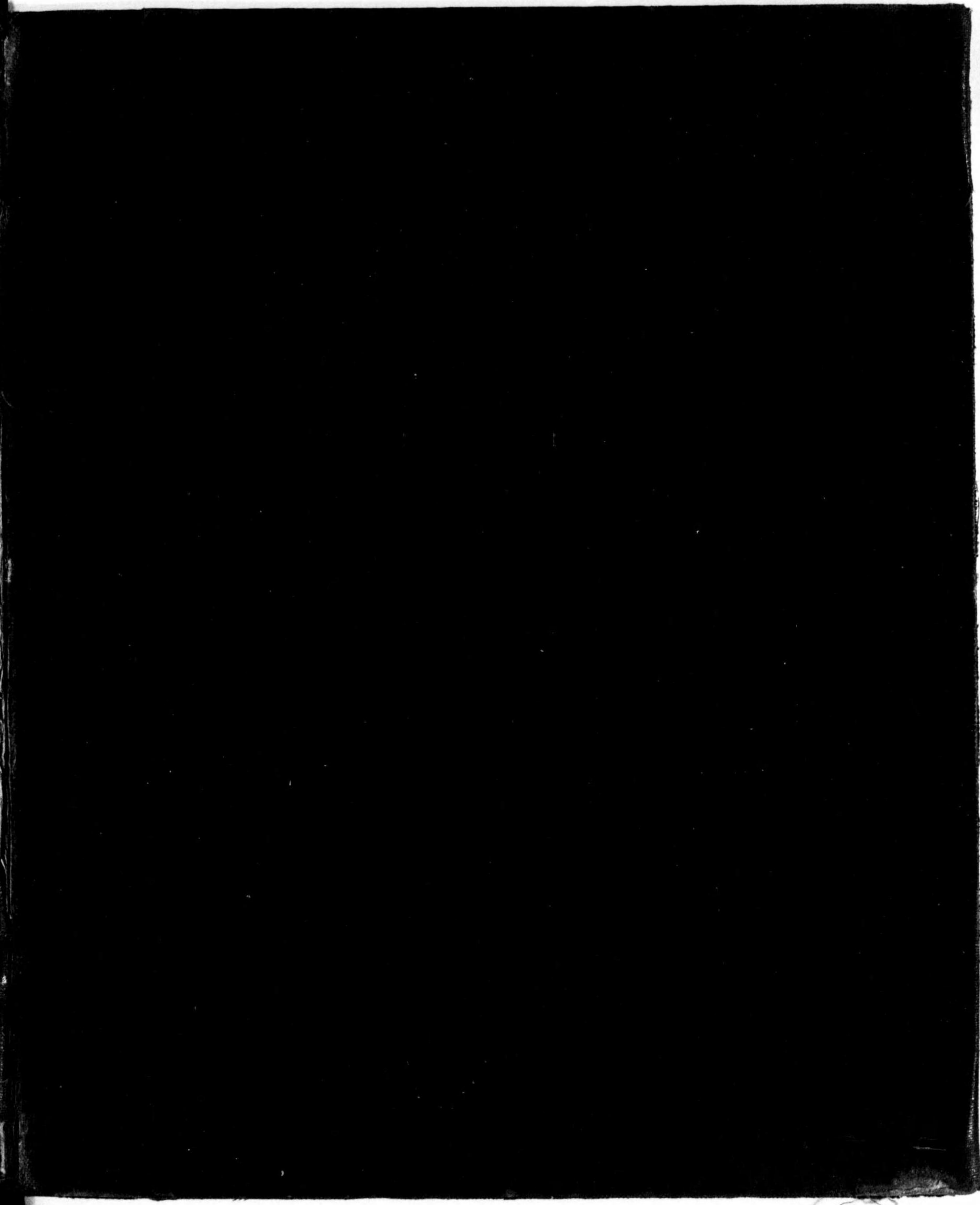


始





P13-20 落丁

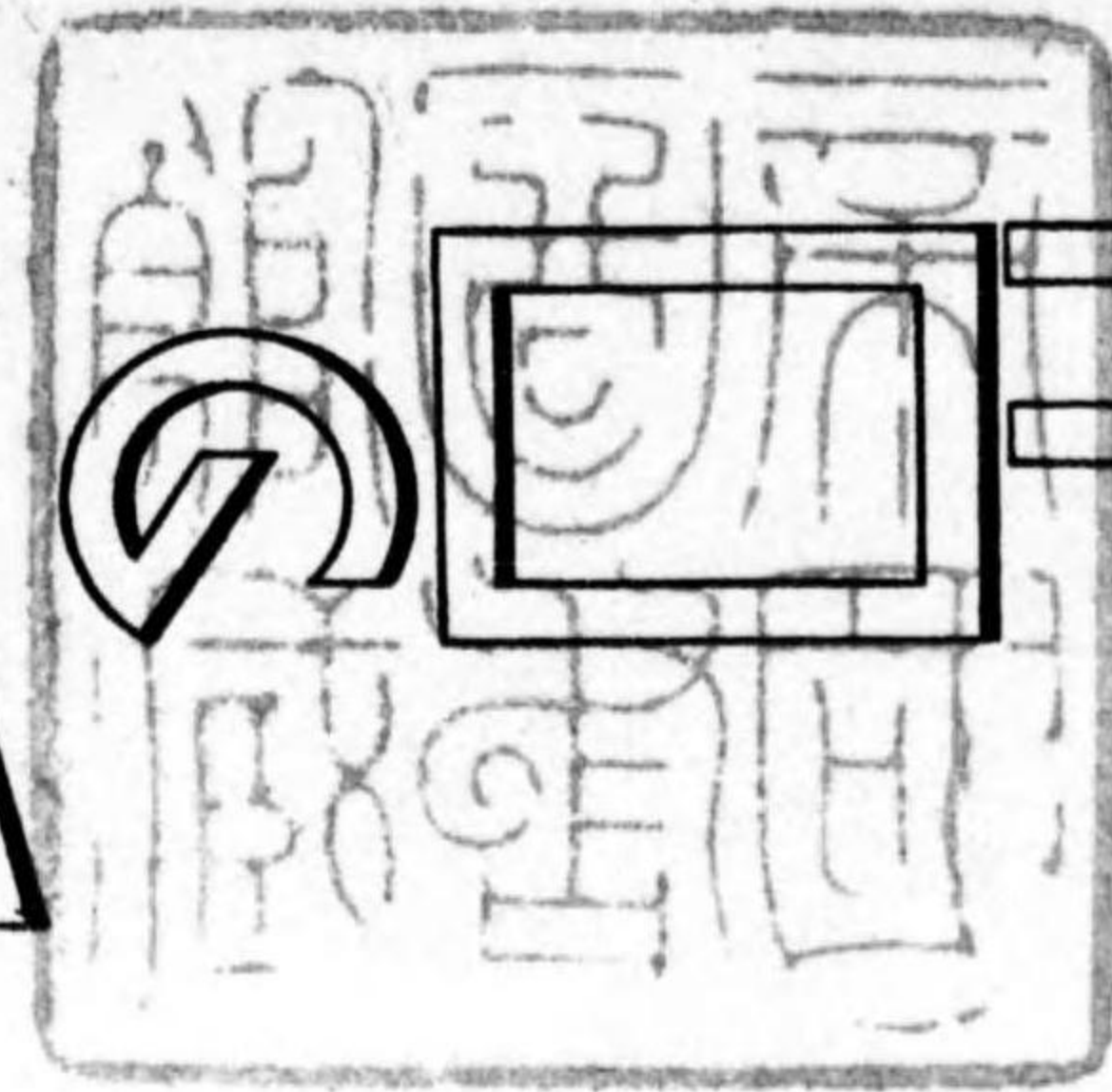
743
Y87

~~743~~

743
Y89

273

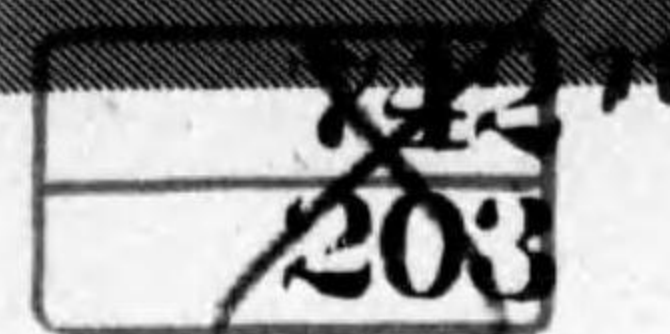
私のライ



吉川速男



新光社刊



はしがき

本書はロライフレックス及びロライコートカメラ所有者の爲に、少し研究を進めた参考書として作つたものである。

既に小型のレフレックスカメラに関する拙著として、先頃出版した“小型レフの寫し方”と“イコフレックスの寫し方”とがある。

それらによつて、小型レフに関する各應用方面の詳細の一通りは盡したが、尙ロライのグループに関しては是非述べたいと思ふ事がまだ澤山にある。のみならず私の實驗は日々次々にと加へられつゝあるから、過去一ケ年以上現在までの分を限つてさへ悠々數冊の専門書を爲すと思ふ。そこで發行所から兼々ロライに関する専門書を熱烈に依頼されて居た故もあり、自分として最近各種カメラ中最も此カメラを使用する機会が多いと云へる程感興を持つて居る爲め、尙各方面の著述を控へ乍ら、私の作意は自ら押へ難くこゝに本書の出版を先にするやう決意した次第である。

同性質のレフに就て述べる以上、前二書に記した事柄と内容的には重複してゐる事も時にはある。然し本書は前二著に比べて一層奥までも深く研究を進めて記す事にした點は、初者心ならぬ熟練者の方々には必ず御満足を頂けると思つてゐる。

故にロライを持つては居るが、まだ一向レフレックスの使用法を心得て居らぬ、従つて本當の興味を持つて居らないと考へらるゝやう

な初心者諸君は、本書を手にとる前に前書の内“小型レフの寫し方”を一通り見て、レフなるカメラに関する全體の理解を得て置かれる事を希望するのである。又フィルムの選擇等に関しては、市販品の名稱を自由に掲げて一層具體的に述べた。

寫真界は實に文字通り刻々進歩しつつある。前二書には記して居らぬ新しい進歩は本書に皆扱つてある。然し俄然世界の情勢が著しい大變化を來した。即ち通商上、税制上、又軍事上等の豫期し得られなかつた事態が相繼いで起つた結果、舶來カメラの輸入に於ては既に従來の如く圓滑には到底行はれない事は確實となつた。それ故舶來カメラ中の主席を占めた本機などは、これで吾々の周圍に於ては一先づ進歩と變化が打切られたと假定する事が出来る。此情勢によつて次に必然的に生ずる事は國産の優秀レフの盛んなる出現と思つて居る。今や一段落付いたところのロライフレックス及びロライコートに就て、其一切の研究を纏める爲のよい機會と考へるものである。

吉 川 速 男

目 次

私の作品集 (作品とその解説)

原色寫眞4枚

別刷口繪寫眞40枚

第 I 篇 (カメラとその装置篇).....	1
カメラの選擇と優劣に關する私の考へ.....	3
ロライの名稱.....	5
ロライへの理解.....	8
現役のロライ群.....	14
ロライフレックス4×4判.....	14
ロライフレックス標準形6×6判.....	14
ロライフレックス自働式6×6判.....	15
ロライコート 1a 6×6判.....	16
ロライコート II 4.5 6×6判.....	17
ロライコート II 3.5 6×6判.....	17
4×4判, 6×6判, ロライフレックスの相違.....	18
最新型ロライフレックス.....	21
ロライフレックス6×6判の撮影に就て.....	24
ロライコートに就て.....	28
最新型ロライコート.....	35
6×6判ロライフレックスの使用法.....	38
フォーカシングフード.....	38
カメラを眼の高さで扱ふ時.....	39
後 壁.....	39

フィルムの交換	40
シャッターに就て	42
ロライフレックス4×4判の撮影に就て	47
更に改良を要する點	54
4×4判ロライフレックス	54
6×6判ロライフレックス	57
6×6判ロライコート	58
ロライ用附屬品	62
一米以内の撮影と近距離用補助レンズ	64
双眼寫眞装置	72
ステレオ装置の使用法	78
パノラマ装置	81
乾板用具	84
6×6判用35ミリフィルム装置“ロライキン”	86
ファインダーレンズ用特殊絞	88
國産二眼レフ, ミノルタフレックス, プリンスフレックス ロールコンター, 其他	92
獨逸ロライ愛用家作品集	98

第Ⅱ篇 (技術篇) 121

高級レンズ中の泡	123
三脚の必要	125
フィルター	127
フィルムの選定	129
多く利用する絞と速度	132
各種撮影とその用具	134
1米以内の近接撮影	135
茸	138

生態寫眞に就て	140
育ち行く力	145
側方撮影	150
スケッチ用具	153
ゴム管製レンズフード	154
複寫に就て	155
ロライフレックス原板の現像法	162
夏季の現像	168
冬季の現像	172
タンク現像器	174
大切なネガの保存	180
印畫紙に就て	183
引伸機の選定	185
宇治の川波	187
平城の秋色	203
日光の秋	223
織なす錦	227
神の森	235

第Ⅲ篇 (私のロライ) 241

私のロライ装置の一部	243
私のステレオ装置	245
2個のカメラを用ひるステレオ撮影	250
ロライフレックス4×4判に35ミリフィルムを使ふ	257
乾板用装置	262
ファインダーを見よくする爲に	264
見にくい番號窓	266
レンズの蓋の黒塗が剥けたならば	270

逆光線と豌豆	273
靴の工夫	274
晝間戶外用ファインダーフード	278
スケッチライトの使用	279
レンズ保存上の注意	280
ロライによる望遠撮影及び顕微鏡撮影	283
報告	284
I. 私の望遠撮影法	287
考案の途上	288
使用法	289
実験の爲の注意一括	292
II. 私の顕微鏡撮影法	293
考案の途上	294
使用法	294
実験の爲の注意一括	297
III. 私の望遠兼顕微鏡撮影法	299
望遠撮影用スタンド	300
実験例	302
此の望遠装置は餘り價値を認めぬ	306
望遠兼顕微鏡撮影の可能	309
望遠撮影法	310
顕微鏡撮影法	311
実験の爲の注意一括	314
私の望遠兼顕微鏡撮影装置	315
実験例	319
望遠鏡顕微鏡其他附屬品に関する附記	324
卷末のことば	330

私の作品集

作品とその解説

以下の作例は、多少連絡を保ち、且は一枚づゝ觀賞する心算で寫したのであるが、春夏秋冬の順序で配列してある。又一貫する心は日光の輝き大自然の力である。尙寫眞的に光又は構圖又は感覺にそれぞれ訴へたつもりである。勿論レフの特徴について充分實例を以て示し、レフの性能を知悉して活用する事に注意したのである。

何を如何に寫すか大體以下の實例を以て判られる事と思ふ。

落 椿

此時の紀行に就ては本文中“宇治の川波”の部に述べてある。

撮影に際して、カメラは非常に低く位置を下げた。恐らく地上一尺位までであつたらう。そしてアタッチメントは附せず最近距離で寫したのである。

作畫は4×4判の一部分を四ツ切に伸し、セピア調色を行つて、乾燥後全面にオリエンタルミヂウム(クリーム様の脂肪)の小豆粒大の量を脱脂綿に付けて全面に均等に塗つてから、パステル繪具を以て着色したのであつて、油の乾燥と共にパステルの粉は手にも着かなくなる。



• 落 椿 •



・平等院の老樹・

平等院の老樹

此老樹の撮影に關しては、やはり本文“宇治の川波”の部に述べてある。

撮影の目標は、大木の幹の肌をシャープに寫すことにあつた。と同時に附近の風物をも畫中に取入れたかつた爲に、約3米の距離から寫した。斯様な場合に於ては單に距離のみ正確に寫るコンタックス、ライカ等のカメラに比して、畫の全部を直接に充分眺めつゝ考究出来るレフの特色がよく感じられる。

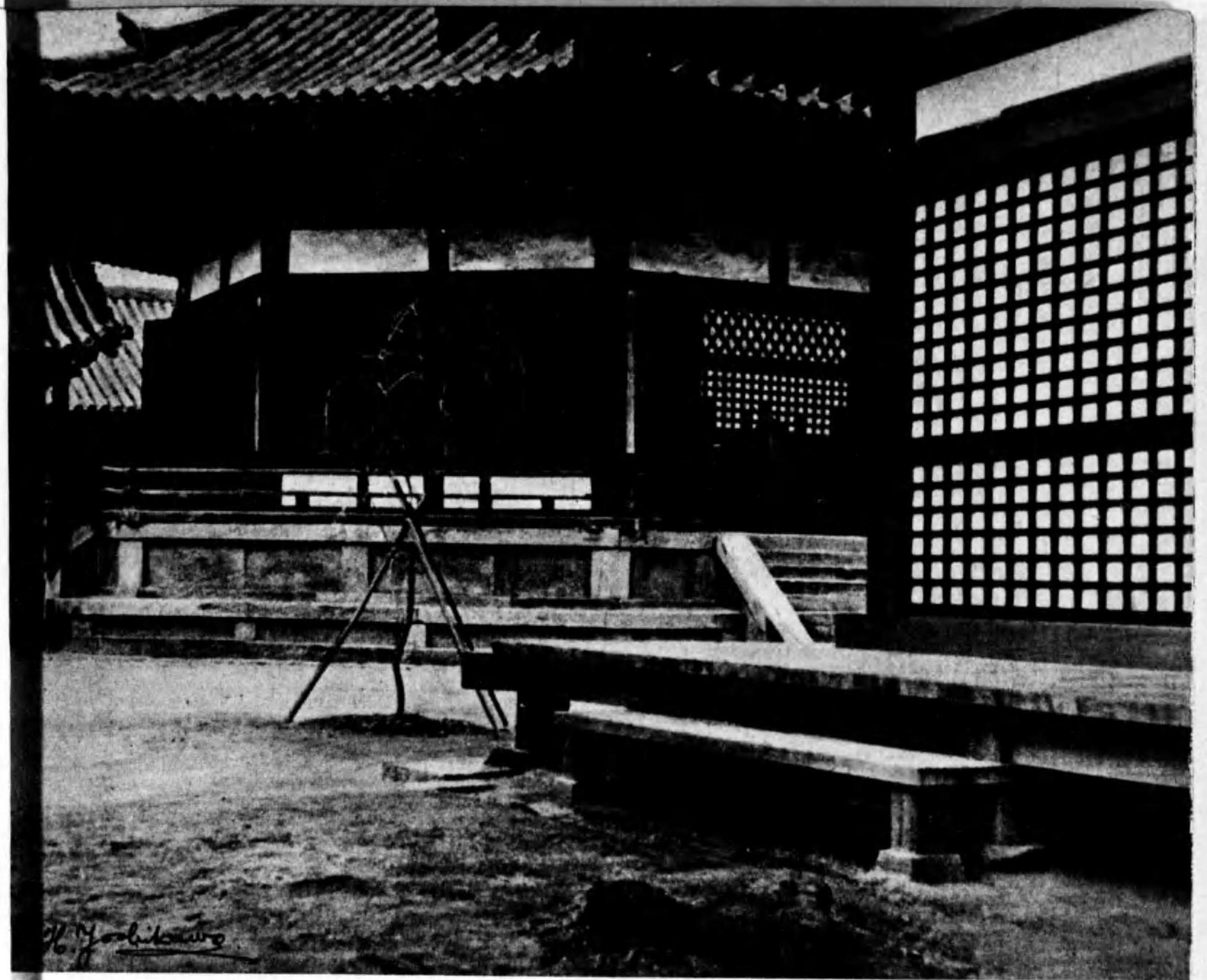
作畫は4×4判の殆んど全部を其まゝに引伸したもので、少しもカットすべき餘分は残つて居なかつた。セピア調色の後矢張りミヂウムを塗布してからポリクロモス(獨乙製色鉛筆)を用ひて着色したのである。被寫體の關係上此着色は割合に骨が折れない。

夢 殿

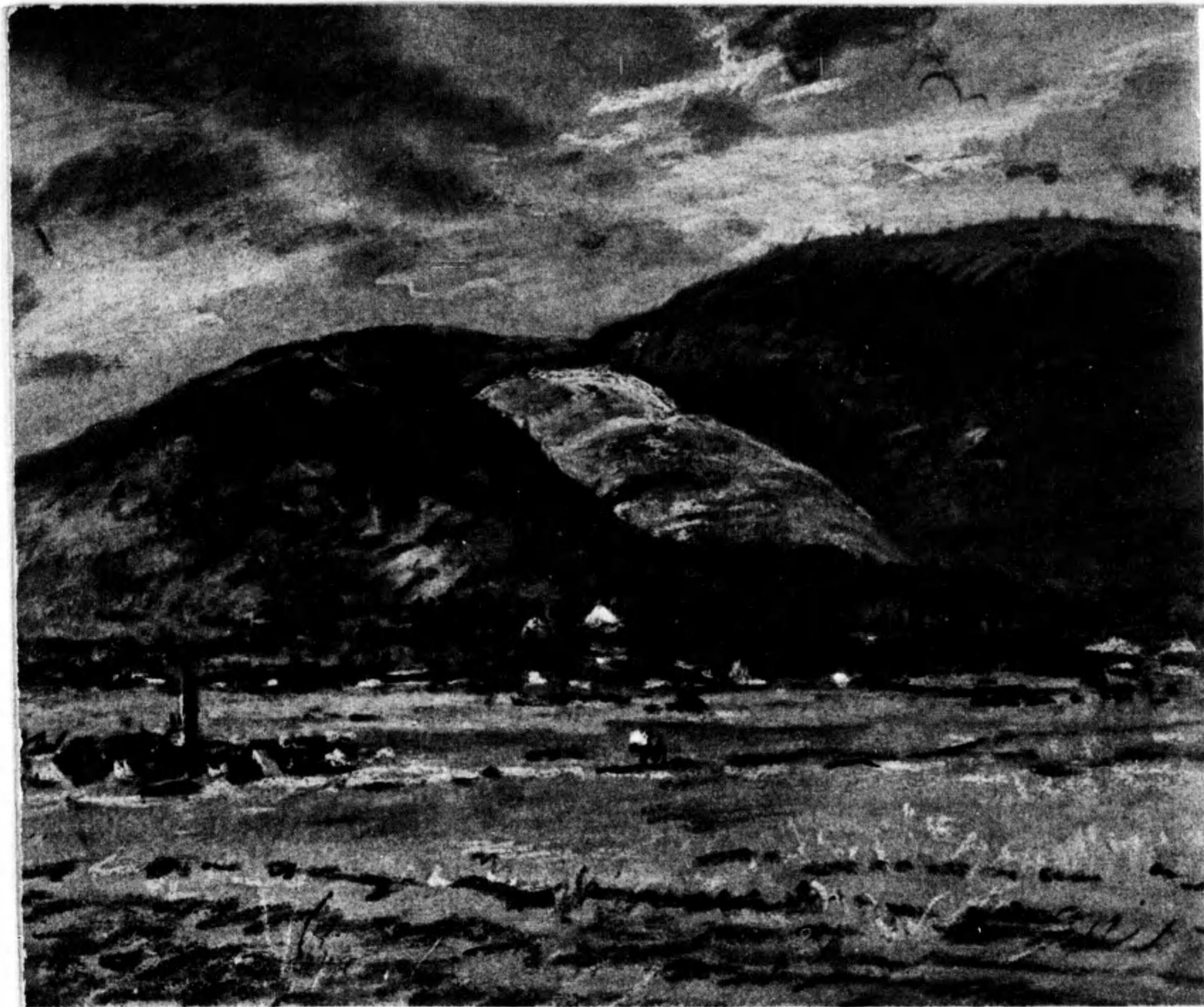
本文「平城の秋色」の部を参照されたい。

夢殿の撮影は此外にも色々ある。又活動映畫としても、同じく撮影を試みた爲に單に一つの場所でもかなり手数を要したのである。大體に於てこの寫眞は全部にシャープなピントを結ばしてある。従つて感じの上では名所繪葉書や建築圖に近く興味にも乏しいが、有名な建築物を細部まで寫さうと云ふ計畫の上からである。極めて近景の地面に、不必要なところがあると感じたので引伸の時に除いた。さて此引伸と着色には法矢張りセピア調色後にポリクロモス法によつて着色を施したものであるが、此着色は非常に骨を折つてある。印刷の結果では原畫の味はよく判らないと思ふ。

かなりポリクロモス鉛筆は高價で（色により違ふが一本20錢前後、色種は60色位あると記憶す）あり、且つ都會の一流の文房具店にしかないが、これに代るべきものを國産品で永年探して居たところ、最近三越本店發賣14色（65錢）の色鉛筆が充分使用に耐える事を見出した。勿論寫眞着色には前記のミヂウムを用ひるがよい。



・ 夢 殿 ・



・夕立に甦る春日山・

夕立に甦る春日山

これは寫眞には關係の無い私のパステル畫であるが、寫眞と對照して、寫眞とは味の違ふ事を明らかにする意味で掲げるものである。

其色彩感、其空氣層から受ける感じは、寫眞の光と影の藝術と全く別の道を歩むもので、寫眞には寫眞獨得の世界がある。これが判然として居ない場合には、繪畫模倣の畫を作りつゝ徒らに苦勞を重ねる。繪には到底なり切れぬに拘らず、寫眞を以て繪に見せ様などゝ無駄な苦心をする。狙ひが間違ふ結果とは云へそれは惜しい事である。眞夏の太陽に照りつけられ乍ら西大寺を一人歩いての歸途、大軌電車の道に添ひつゝ奈良へ向ふ途上に、其昔大内裏のあつた地だと云ふ廣い地域がある。其附近で夕立に見舞はれた。暫しが程濡れるまゝに辛棒しつゝ野路を歩いて居たが、いつか晴れて雨雲は春日山の方へ去つて行き、青空も見えて來た。其時のスケッチである。中央に見える明るい綠色の山は、大古時代に火山作用によつて出來たと云はれる有名な嶽草山（俗稱三笠山）であつて、雲間からの日光は特に此山を美しく描出して居る。其右の高いのは春日山で、中央山麓に一際大きく光つて居る三角の屋根は大佛殿の臺である。此邊りから眺むると昔の奈良の人達の生活がよく判つたやうな氣がする。奈良朝の昔、今の西の京あたりの人々も都の東方春日山麓の美しい町外れのスロープを打連れて上つて楽しんだものであらう。

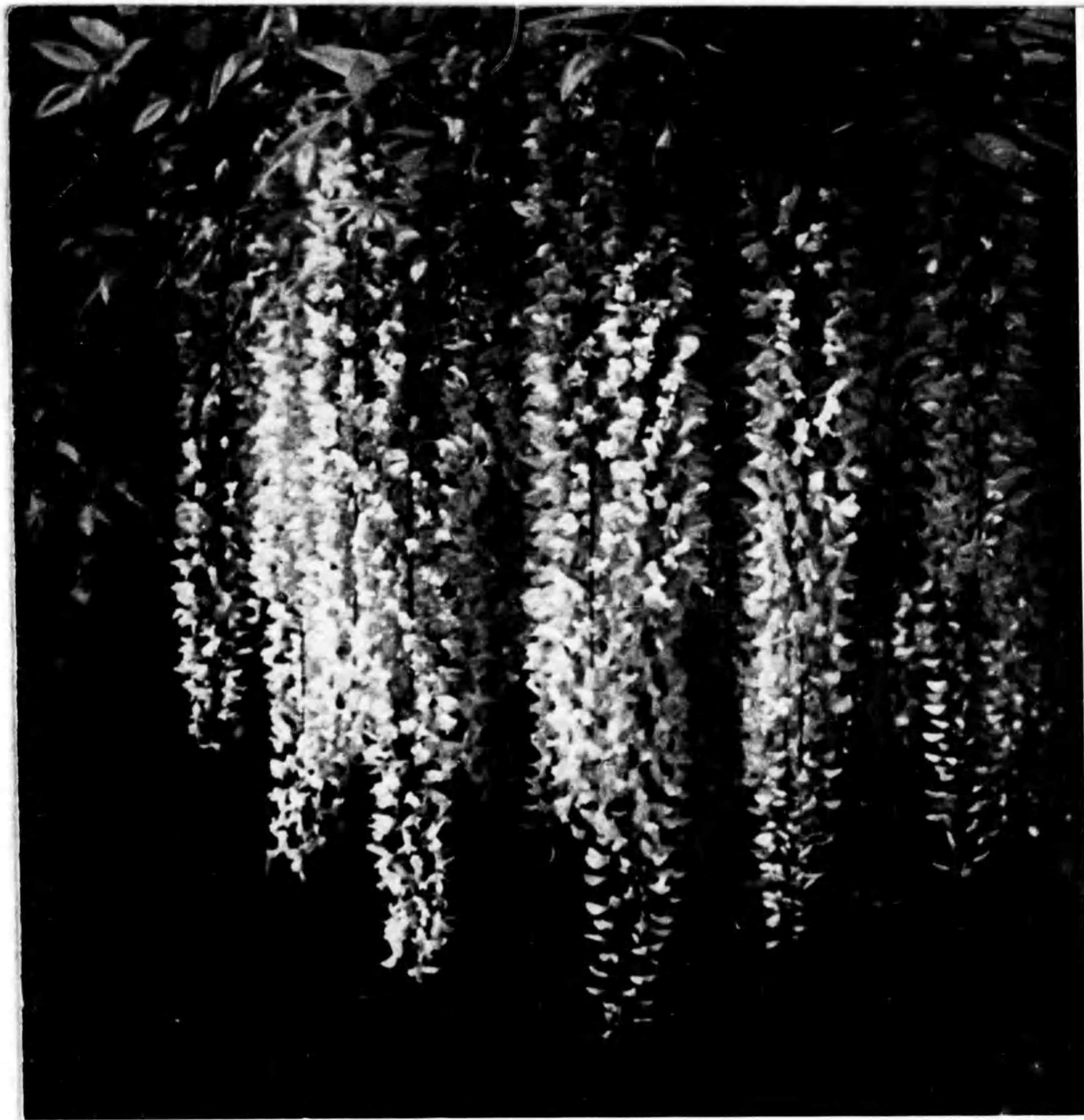
彼の古今集に見る“春日野の飛火の野守出て見よ今幾日ありて若菜つみてん”“春くれば雪消の澤に袖ふれてまたうらわかき若菜をそつむ”の歌にある如く、まだうら寒い頃からやがて麗らかな春光を浴びて“百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ”と云ふのどかな晴々しい上流の人達の生活はみな此山裾で営まれたものであつたらうなどゝ想ひつゝ歩む。

早春の里

12月1月2月の寫眞撮影は、快晴の日でも午前10時から午後2時位までと想はねばならぬ。此頃は日向の光は低く斜めに輝く。日陰は非常に暗い。野外にカメラハイキングを試みる人は、此點に注意してプランを立てなければならない。どうしても不利な時季である。それ故スキー、スポーツ、雪山とでも云ふ撮影以外はよくよくの必要がなければ冬の撮影の目標は屋内人物或は人工光線下に行ふ研究に定めた方が得策であると思ふのである。春未だ浅い武蔵の山野にはそれでも紅梅白梅が豊かに薫つて元氣なハイカーを待つて居た。



早春の里



白藤の花

白藤の花

藤は下ると云ふて嫌ふ人があるが、迷信などを一切氣にとめぬ私は、春には寫眞の種を興へてくれ、夏には自然の西日除けをつとめてくれる此樹を大切に居る。

然し毎年白藤を色々のアングルで寫して見るが、中々思ふやうなものが出来ない。そこで今年にはカメラの位置を地上約八尺位まで高めて、幾分俯瞰撮影風にした方がよろしいと思つて行つたのが此圖である。

私は茲に單なる花の姿を寫したに過ぎないが何か美しいモデルでもあしらつて見たい氣がした。然し生憎持ち合せがないので行はなかつたが、斯様な場合には一應前以て考慮せられた方が生々として又賑やかな畫も出来やうと思ふ。

初夏の園 その1 (花壇のほとり)

ロライによる畫の感じを示す一例であつて、近景と背景のぼけを注意されたい。此様に目標と背景の關係を思ひ通りコントロール出来る事はレフレックスの持つ最も大なる特性であるから、充分此効果を利用するやうにした方が得策であると思ふ。

ロライを使ふ人が懸賞寫眞に多く入選するとか、ロライの畫は何んともなく違ふとか云ふのは、これを心得られて居る人の作品である爲と云へるであらう。

此圖以外の挿畫全部にもさうした味が充分出て居ると云ふ自信を持つて居る。

ロライフレックス
テツサー f:2.8
絞 f:4.5 1/25 秒
さくら パン F

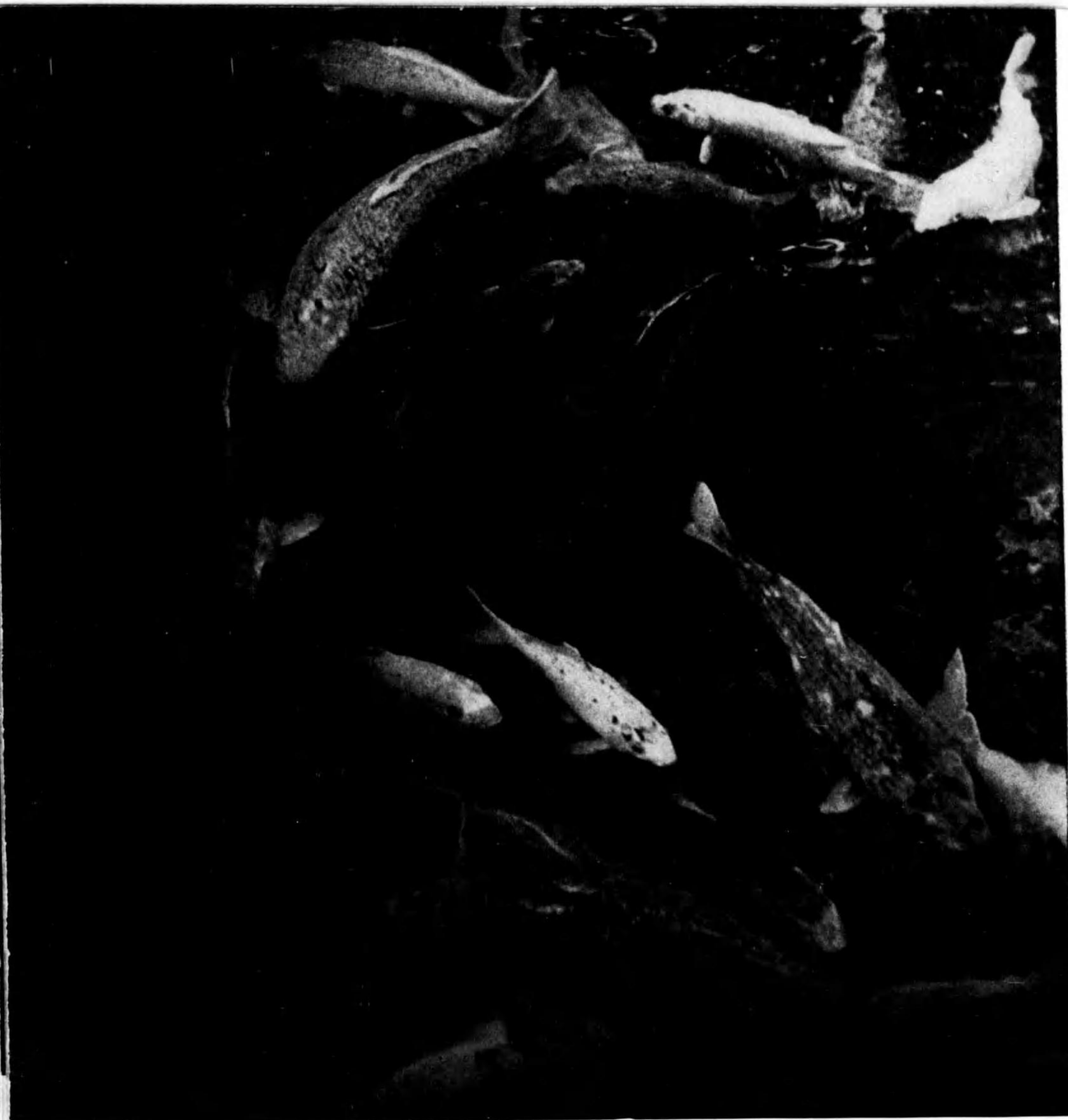


花壇のほとり

初夏の園 その2 (魚紋)

平凡なる材題を捉へた作品の一つであるが斯様な被寫體に對しては色々の撮り方がある。即ち魚其物を最も忠實に寫す事も出来るし、殊更此圖の如く動かして寫す事もある。何れがよいかは其水面の反射光や明暗などにも依るであらう。私も此場合は各種の方法で寫して見たが、これが最も面白く感じたので掲げる事にした。

箱根富士屋ホテル
ロライフレックス
テツサーフ: 2.8
絞 $f: 5.6$ $1/25$ 秒
距離 1メートル
さくらパンF
ワルツ2號フィルター

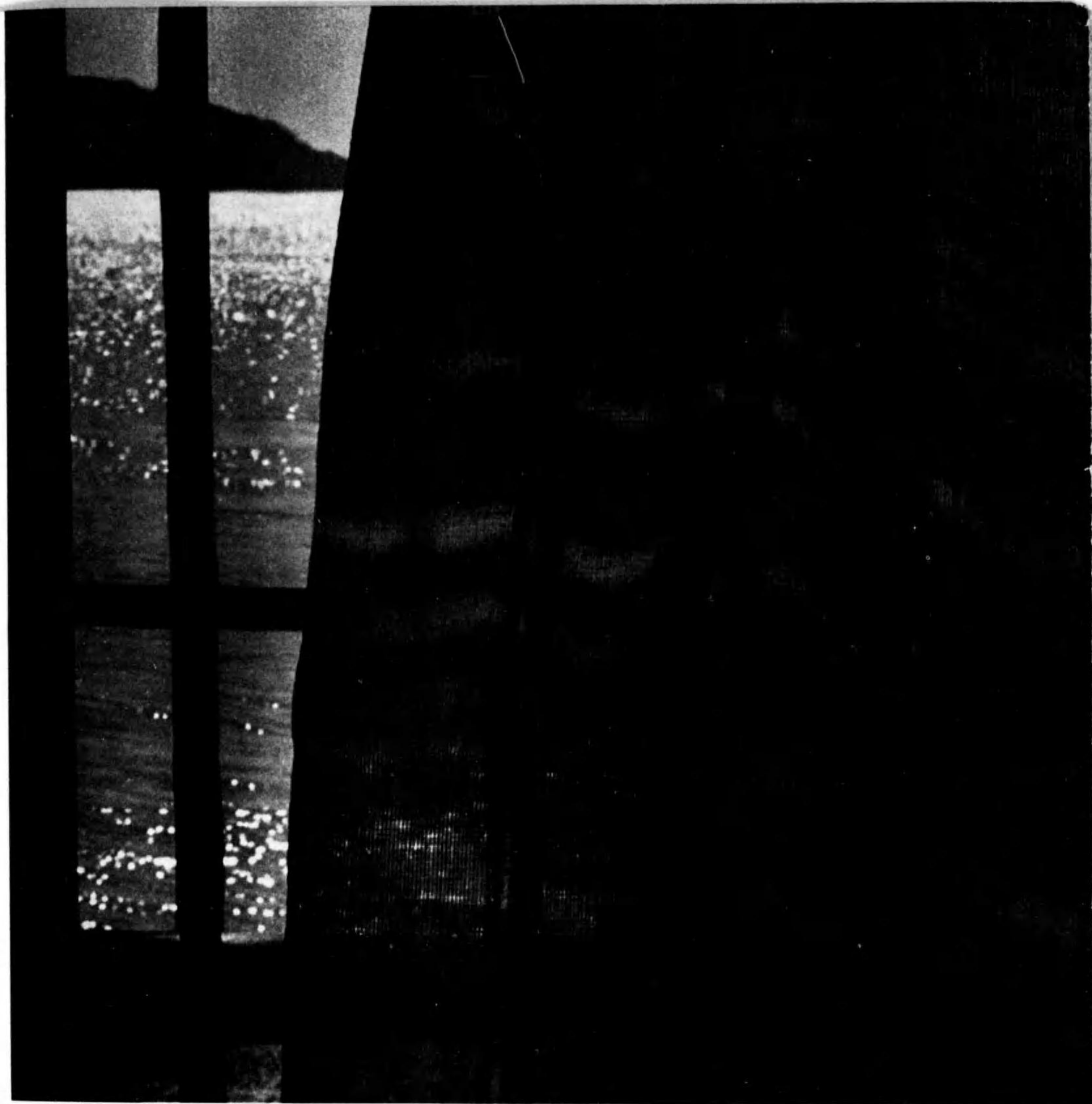


魚 紋

舞子の印象

須磨の邊りの濱を歩いて木の間から明石海峡を隔て、間近く淡路島の絶景を眺めて、いつか舞子まで来てしまった。その料亭萬龜の二階から輝く海の面を眺める時、カーテンに描き出された日光が、如何にも面白く感じたので、島と海と近景のカーテンと皆入れて作畫しやうと云ふ考へが起つた。水平線の高さ、ガラス戸の枠との位置の関係、輝く汀の光の位置、それにカーテンの模様とピントの合ひ工合、これらが皆確實に撮影に際して判つてしまふ事は、矢張りレフの勝れた特長である。

ロライフレックス
テツサー f:2.8
絞 f:8 1/25秒
さくら パンF
フィルター無し



舞子の印象



社頭の五月雨

社頭の五月雨

名古屋市郊外、小牧山古戦場の近くにある田
縣神社境内の五月雨であつて、何時熄むとも
思はれない雨降りの日である。斯様な場合傘
をさし乍らロライを扱ふ事は非常に困難であ
る。ピントグラスに雨滴を入れぬ爲に頭を近
づけて覆ふやうにする。又一方レンズ、殊に
下玉には絶対水滴を付けてはならぬ。ロライ
の深いレンズフードは單に有害なる反射光線
の防止のみではない事に御注意願ひたい。

ロライコート
トリオターノ 3.8
絞 $f:4.5$ 1/25秒
フィルター無し

緑蔭讀書

寫眞の狙ひ方の一例として掲げるものである。云ふまでもなく室内の疊に躍る木の間を洩れる光線の興味を中心として寫したものであつて、若し此寫眞から光を除いたならば、全く畫になる價値がないと云へる。それ故寫眞を曇天に寫すのは、餘程のものでない以上は面白いものが出來ない事が判る。結局は光の藝術である。

これは此夏家庭生活の眞の記録で、團扇も雑誌も手を加へずそのままの姿である。春の頃美しい花を見せてくれた藤は、眞夏の候となれば斯様な緑蔭の涼しさを與へてくれるのである。



緑蔭讀書



夕陽の庭

夕陽の庭

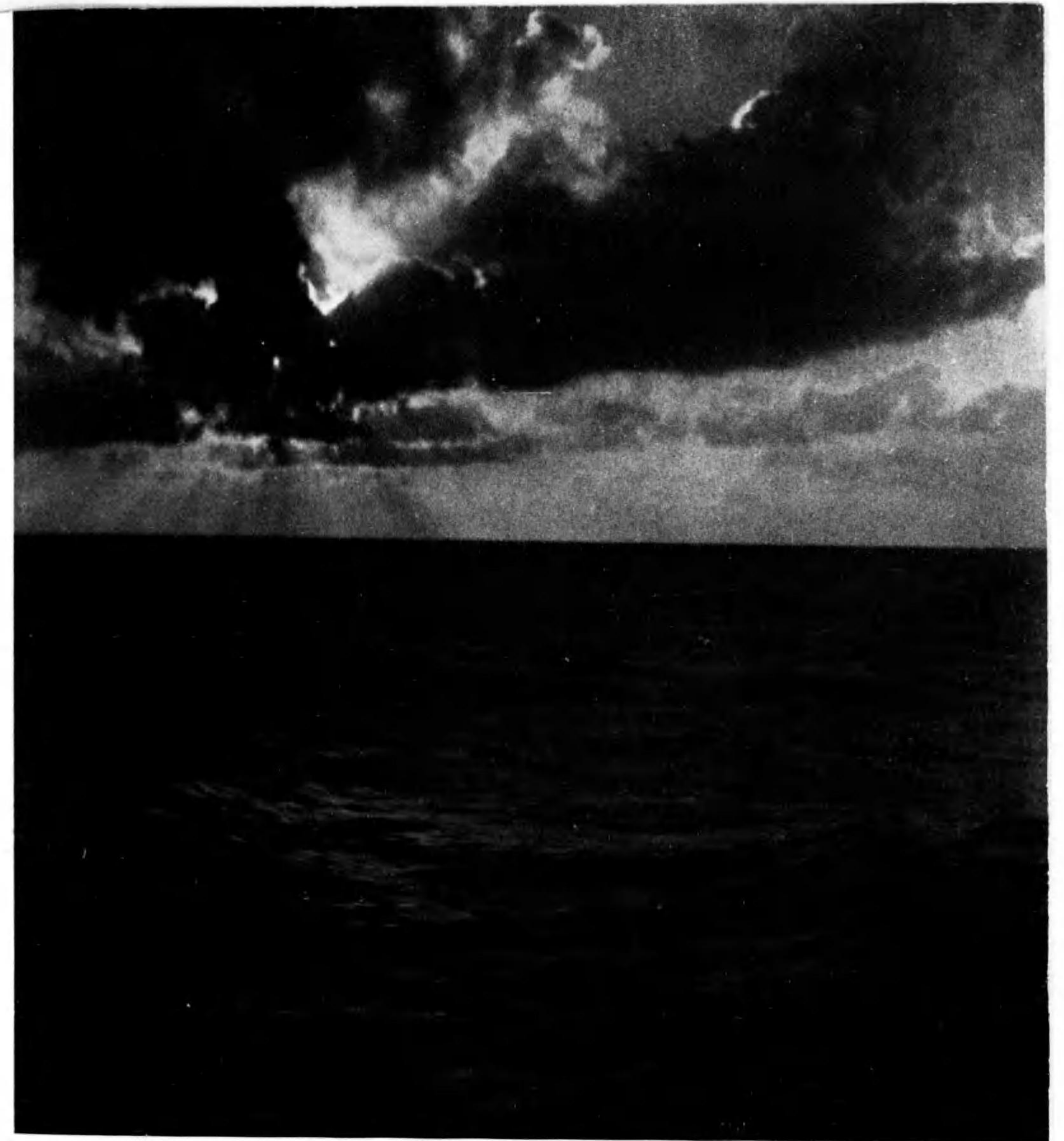
前圖と同じ撮影で眞晝の暑氣も東京灣から吹いて来る夕風に和らいで、残暑は藤の幹に美しく輝いて居る。打水して庭に涼を求めやうと思つた時の撮影である。實際はこれ程の場所ではないが、晴れた日ロライフレックスの力で餘程感じが美化されて寫つて居るのである。汚い所も見にくい物も、レフのカメラなればこそ、斯く見違へるやうに寫せると云ふ一つの安心の爲に掲げるものである。

12.8.18 夕
絞 $f:5.6$
露出 $1/50$ 秒
フィルターなし
フィルム前同様

洋上入日紅

東京を南に去る百五十海哩，太平洋上に陽は没せんとす。水天完全に接する所片影なく，紺青の黒潮を切つて進むディーゼル機關は，好調の振動を傳へてゐる。高いデッキに立つて小山の如き大うねりを眺める人々は一言も發せぬ。折々はカメラもろとも猛烈なる海水の洗禮を受けて船にしがみつくとロライコートの眼トリオターは無限遠の彼方を黙然と眺めて居るのである。

今水深數千米の深海に浮びつゝあるかと思ふ時，腰の邊りが何となく慄然たるの感がしてくる。レンズの向く方角は遙か水平線下に，今や皇軍の聖戦を進めつゝある支那大陸，左手は小笠原を経て我が南洋，背後は北米の空，右手が懐かしい内地に當る。今卑劣極まる歐米の暗躍を想ふ時，我が表玄関を斷じて守る無敵海軍の英姿が眼前に浮んで來る。



洋上入日紅



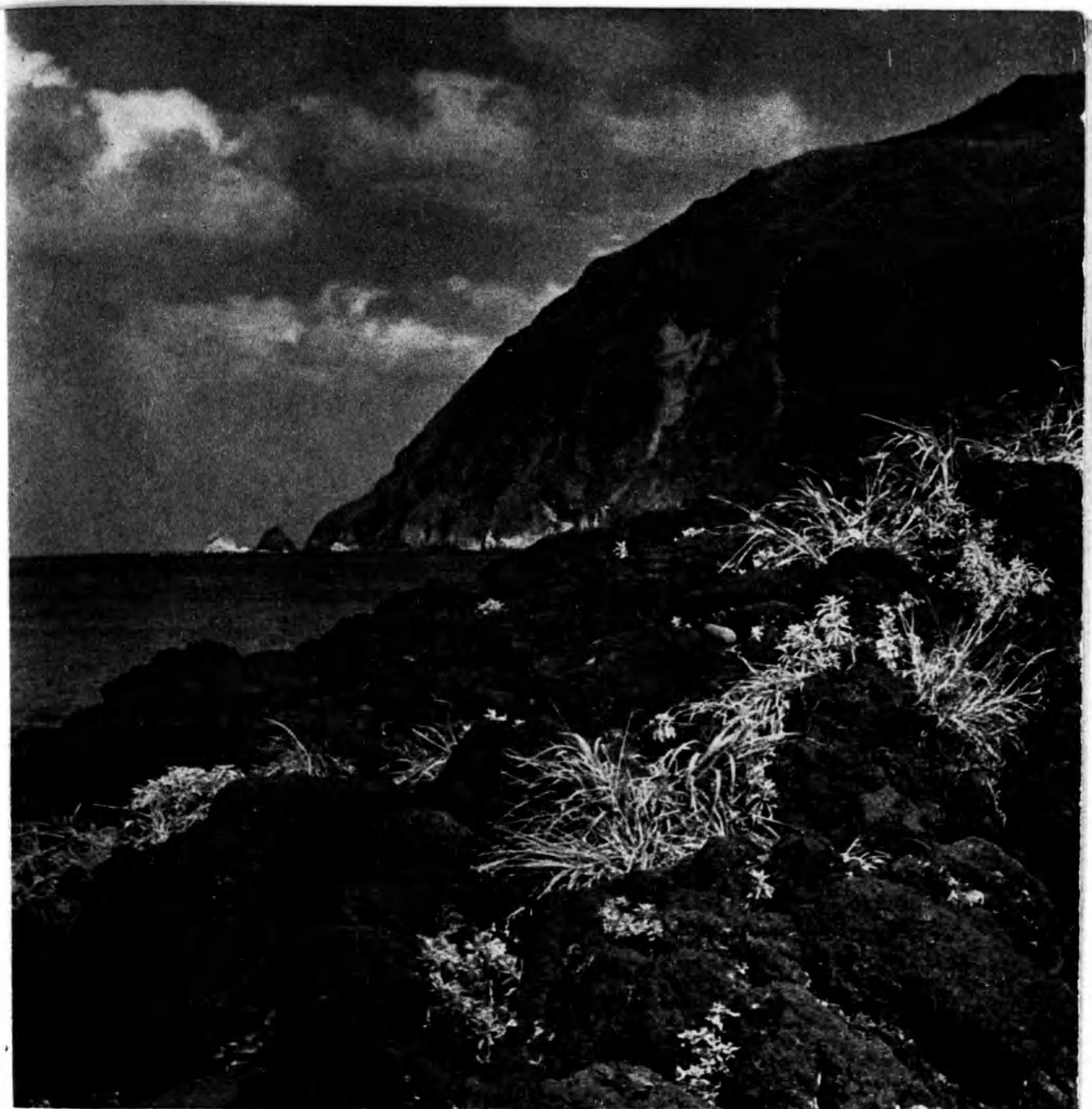
私の夏

私の夏

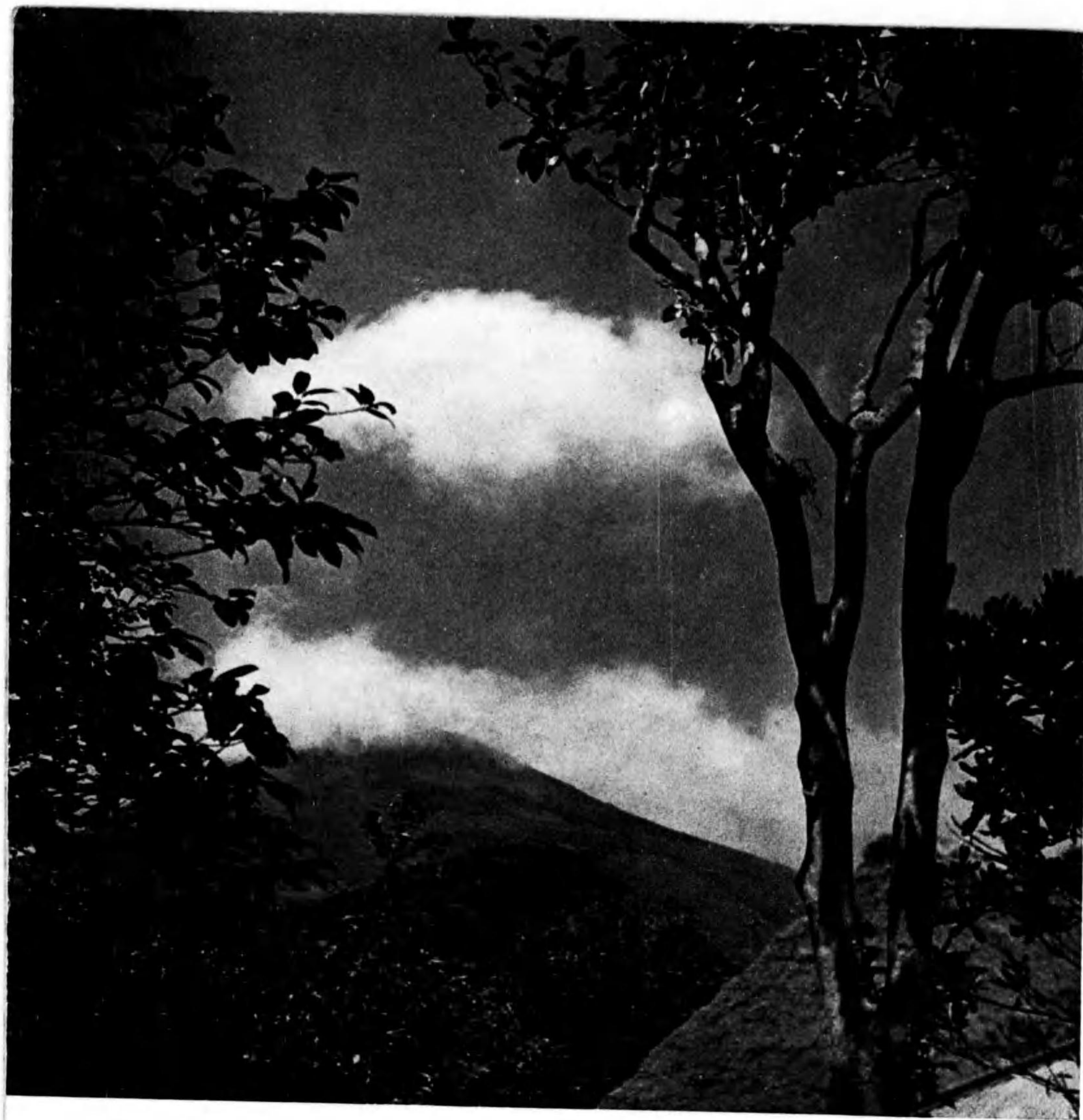
これは、単に線の興味と云ふ點で撮影した試みに過ぎない。従つて特別述べべきものもないが、光の躍動を目標とする外に斯様に線或は構圖などを狙つて寫す場合もあると云ふ一つの例にはなる。此撮影は曇天の日である爲に光の美は一向に見えて居ない。従つて晴天に充分の光を利用して寫して見たが、却つて撮影の目的が判然としなくなるので矢張り此方が勝れて居ると思つた。

南の島にて その1

国防上から地名は省略するが、遙か南の島に遊んだ時の作品で、此時は潮に濡らす心配もあつたので、スケッチ用として低級機620號コダックを、又別にロライコートを何かの場合にと揃へて行つた。尙全コースの記録を同時に8mm映畫としても撮るので非常に忙しい想ひをしたのであるが、此圖は全島周囲が直接恐るべき深海から聳ゆる斷崖で僅か熔岩流下によつてこゝに見るやうな陸地を示して居る。磯の植物も珍らしく、南國らしい氣分もあるので、悠々ロライを働らかす心になつた。



南の島にて その1



南の島にて その2

南の島にて その2

島には水桶を頭上に乗せて運ぶ婦女の珍しい風俗も見られる。それよりも特殊の景観を興へるものは何んと云つても椿の大木である。又大シャボテンの林である。圖は農家の庭を圍む高さ數丈もあらうかと思はれる椿であつて、太平洋を渡つて來た雲は漸く陸に觸れたと喜ぶかの如く、島一番の嶺に俯つて居る。SSパンフルム濃黄色フィルターを用ひ $f:8$ $1/100$ 秒でも露出過度である。作畫は硬調印畫紙(染井)を用ひた。——スケッチは數を寫さずともよい。たゞなるべく特徴を鋭く見て寫せば満足なものが得られる。

高原の夏

箱根駒ヶ岳山麓の高原の爽かな夏の夕の作品で、展望は
広く、人無く音もなくたゞ時々雉子の叫聲と小鳥が美し
く鳴くまことに平和境である。脚下の土は地下を通ずる
温泉によつて暫し立つ間に何んとなき温つて来る。
都會の暑熱を避けて暑さ知らずのこゝに來た私は、早や
美しい秋草の野邊に思ひがけない撮影の種を豊富に得た。
人物を配し、又人物を除いて色々試みた内の一枚である。
東京から二時間にして悠々達する。小田原で列車を捨て、
驛前より富士屋乗合の沼津行バスを利用するのが最も便
で、駒ヶ岳温泉ホテル前に下車し、ホテル裏から駒ヶ岳
目指して登るがよく、美しいモデルとポータブル蓄音機
でも下げて、大自然をバックに寫したいやうな希望を持
つ若い人達には、此上もない撮影地である事を申して置
く。歸途はホテルの箱根隨一とでも云ひたい位の見事な
温泉に浴せば更に妙である。



高原の夏



盛 夏

盛 夏

箱根宮の下の夏である。ロライ得意の仰角を利用してダリア畑に立つて花と雲と山とを取入れたものである。

4×4判ロライの畫中からかなり周囲を切捨て、一部分を利用して作畫したのである。——これはたゞ盛夏の、空氣の清い山の爽かな氣分を寫したいと感じた作品で、構圖や光は未だ満足と云ふまでには及んで居ない。(パンXフィルム赤フィルター使用)

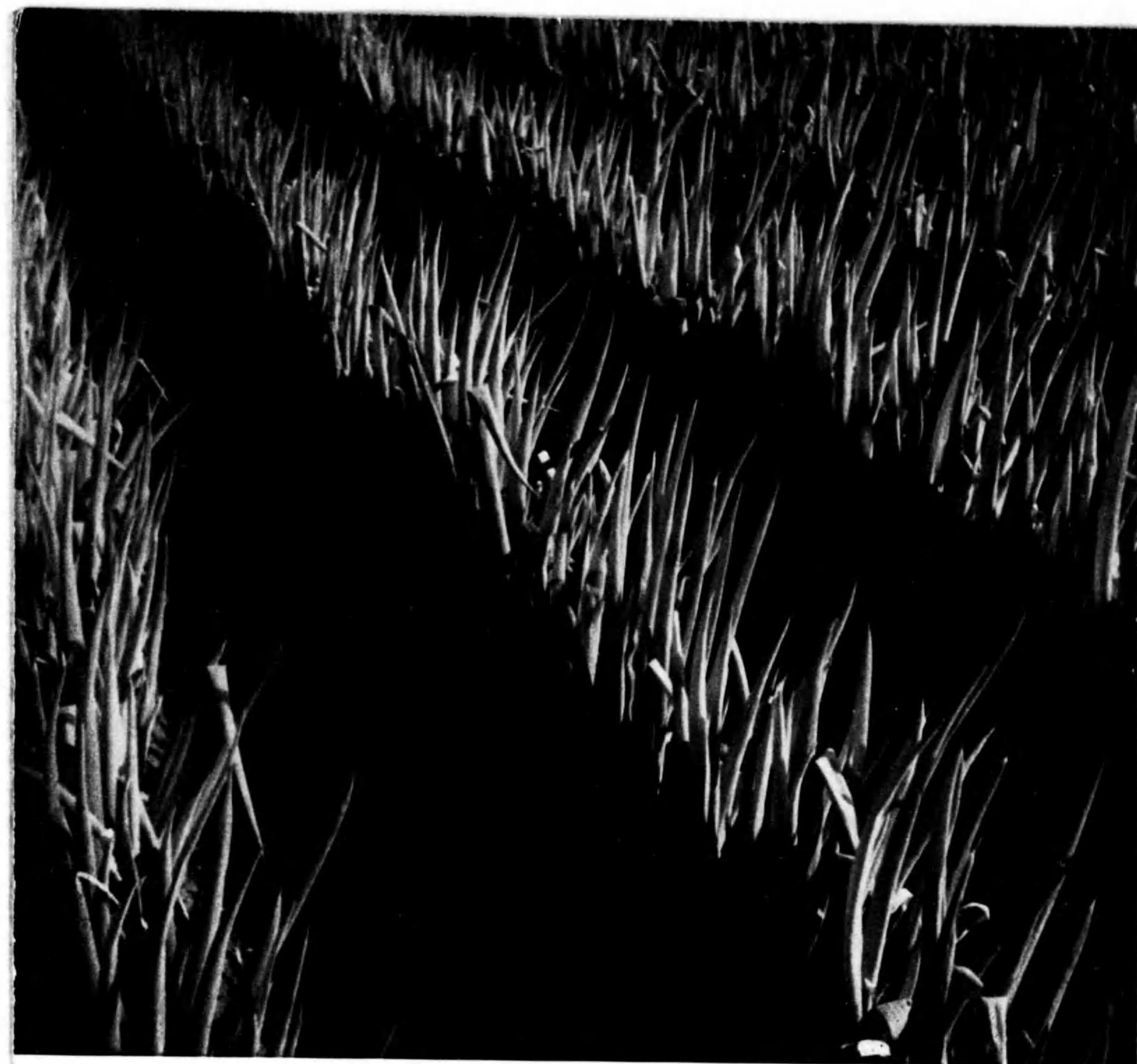
光波の躍り

森蔭の叢を歩むならば、秋の太陽の住家を見出したやうな気がする。

農夫の燃火の煙が、低く大地に匍ふ上に、光は鮮かに躍り狂ふ。カメラは正に逆光に向けられる。其レンズを注意して掌で覆ふて見る。同じフィルム使用、 $f:4.5$ エヒト No2.(中間濃度黄色)フィルター使用、 $1/25$ 秒



光波の躍り



生への努力

生への努力

大地に彫みつけた畝の跡，其處には間もなく生命の力が根ざり居る。低い西日を受けてすすくと伸びて行く生物の姿は實に見事なものである。枯葉の力なく枝から地に落ちる傍らには，北風と雪にこれから闘はうと云ふ葱畑が續がつて居る。眞黒くさも肥えて居るらしい地と半透明に輝いて居る葱の光とを美しく描き出す爲に私は黄色フィルター（エヒト No.2）を利用して見た。フィルムはパン F，絞は $f:11$ $1/25$ 秒である。

葉上の光

泰山木は既に度々私の書物に掲げたものであるが、今回は少しく趣を變へて、木の間を洩れて葉上に輝いた光を目標として寫して見たのである。従つて生態寫眞の目的ではなく所謂藝術寫眞的の考へを以て寫したものである。それが何處まで表現出來てゐるか。光澤があり葉脈が鮮かな葉であるから此試みには極めて都合がよいと思ふ。



葉上の光



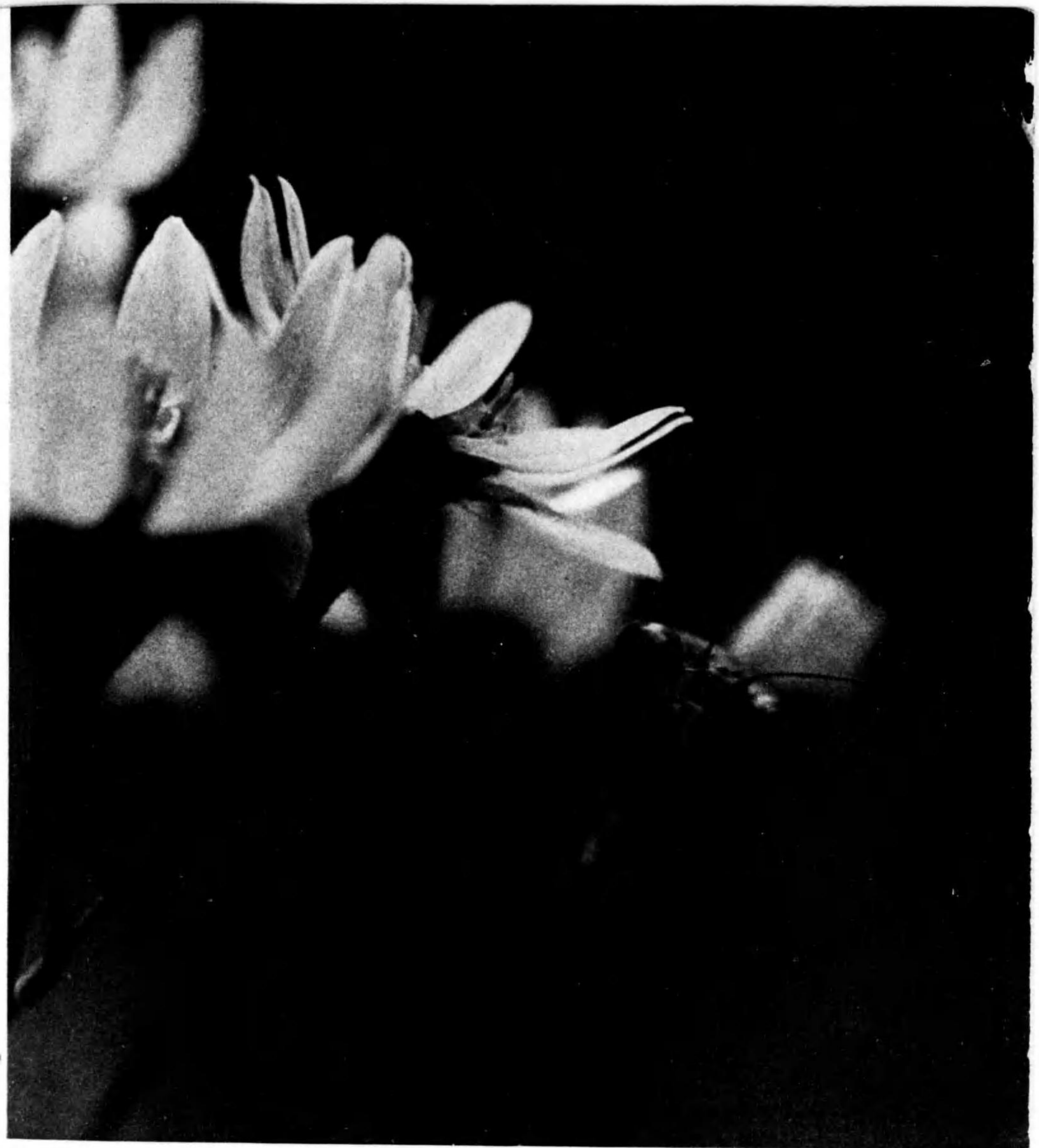
カマキリ その1

カマキリ その1

庭の秋草を見て廻る間にふと蟻螂が將に蟲を襲撃せんとしつゝあるのを發見した。ロライに2號補助レンズを附して接寫する事にした。此様な場合にも毎回申す通り、 $f:8$ 又は $f:11$ 位の小絞を以てする事が適當である。よつて絞を $f:8$ 速度 $1/25$ 秒フィルターなし、パンXフィルムを用ひて撮影した。これは被寫體が位置を變化する動體である上に、下に居る。蟲は瞬間に飛び去るものであるから無論組立暗箱では不可能であり、又ロールフィルムカメラでは覺束ない。又スーパーシックス 或はコンタックスではコンタメーター装置を用ひなければ撮れないロライの獨り天下である。引伸倍率は6倍で實物に比して虫は其儘の大きさになつて居る。

カマキリ その2

蟲は幸ひと危い所を逃げる事が出来た。後に失望したらしい様子の蟻螂は猶も物凄しい顔をして獲物を求めにかゝつて居る。此間に2號補助レンズを更にもう一枚づゝ追加しやうと思つたが、最近作らした特別強度の接寫レンズの試験をする事にした。一眼レフと違ひ二眼レフには全く同種同性質の二個を作らねばならぬから此點は不便が多い。都會ならば此自由が利くが、田舎では一寸無理と思ふ。其様な場合には補助レンズを二枚でも三枚でも重ねて同じ目的に用ひて差支へない。此畫は蟻螂が實物の6倍になつて居る。引伸機はファムを用ひた。



カマキリ その2



湖上快走

湖上快走

此圖は、レフレックスカメラの最も得意とする例の一つである。構圖の適否は勿論又畫の持つ感じも充分にピントグラス上で眺められるが、狭い動搖する小舟の座席にあり乍ら、眼前一メートル邊の硝子板上に注ぎかゝるしぶきの跡を適確にシャープに撮る事の出来る點にレフレックスなればこそその自信が存するのである。

又組立暗箱などは到底此場合不便で用ひられず、又普通のロールフィルムカメラ又はハンドカメラではフォーカスが不正確でこれ程確實な撮影は全く望みがない。

箱根蘆の湖上のモーター
ボート内
昭12.5.6晴
クロームXフィルム
ワルツ赤フィルター極淡色
f:8 1/100秒

朝露の世界

日は上つたが地平線上に低い。昨夜中降りつづいた雨は、書齋の窓ぎはのヒマラヤ松の葉末の一つ一つに美しい水晶の玉となつて光り輝いて居る。餘りの美しさに逆光でカメラを向ける。距離は1米に合はせ テッサ $f:2.8$ 開放 $1/100$ 秒を切つた。フィルムはパンXである。稍焦点より遠い所の露の玉は興味深い光の輪を現出して ファインダーレンズに映じた事を利用して、態々開放で寫したのである。これは繪では出來ず寫眞独自の味である事が鮮かに判る。



朝露の世界



大地の歡喜

大地の歡喜

散々に雨の爲め惱まされた大地が日の光りを迎へて歡喜するかの如く輝く有様を逆光で寫す。太陽の姿を近くの藤の幹によつて覆ふ。

猿澤の涼風

奈良に来て何人も賞する猿澤の風光は、春によいか冬に見るべきかは知らないが、廣からぬ池の面作ら、美しい興福寺の塔の影を水面に映ずるその姿には變りない。多くの人はその姿を寫す。然し私は常套を脱すべくこれを作った。傳説の深く織込まれた衣懸の柳に身を近く寄せて、縦の流るゝ線の美を畫中に充分取入れて見たのである。



猿澤の涼風



奈良のはたごや

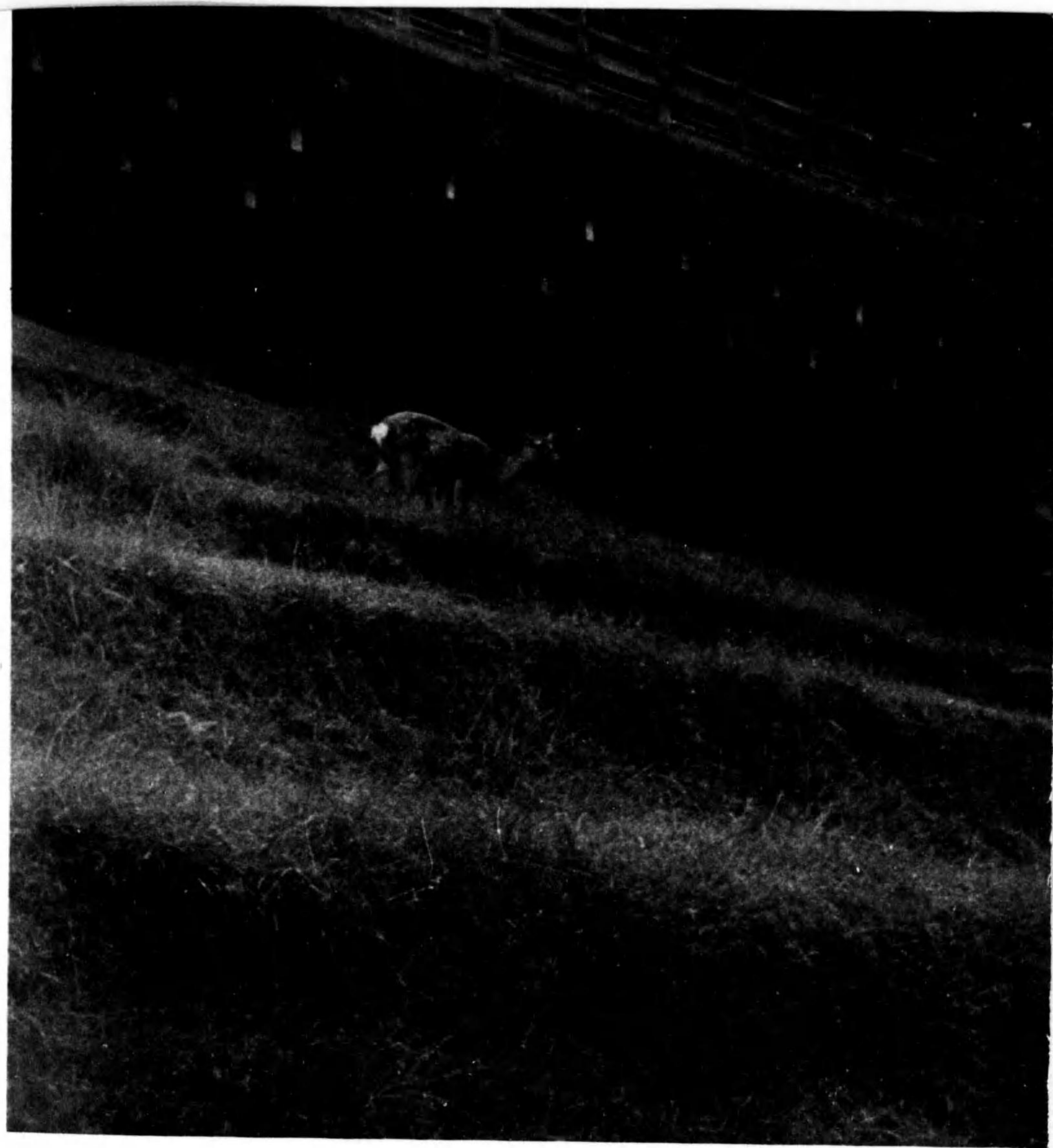
奈良のはたごや

猿澤の池を背にして佇めば、美しい家が並ぶ。清流が青草の低地を縫ふ邊りに人馴れた鹿の來て遊ぶ様は、如何にも長閑である。暫し車をとめて思ふ存分 ファインダーの景に見入つた。

二月堂に来て

大佛殿の裏道を二月堂に急げば、こゝにも鹿の遊ぶ姿が見られる。此作は暗い調子の中に一点の光を描き出す目的であつたが、鹿の體の一部にのみ僅かにそれを認め得て、尙物足りぬ感もある。

何事か心に意圖を持ちつゝ寫す事はロライの有する獨得な味であると云へる。



二月堂に来て



釣燈籠

釣燈籠

二月堂に上つて、そこに見上る幾多の釣燈籠は數によつて名高い春日のそれよりも一しほの趣きがあると思ふ。

軒端に吊られた燈籠は、幾度か人に寫され、私自身もこゝを訪ふ毎に寫したのであつたが、其作品中これは最も満足するものである。

三月堂の春

奈良にある建物中最古のものとしてこの東大寺法華堂，俗に云ふ三月堂こそは實に至寶である。

春光麗かに照り榮ゆる堂の中，そこに拜する不空絹索觀世音ふくくわんそくの見事なる像，銀の透彫に水晶眞珠，瑪瑙等の寶玉數千の裝飾は咲く花の匂ふが如く盛なりと歌はれた奈良の都を今に描き出して居る。私は堂の前の白壁の土塀に添ふて小徑に入つた。そこより振向けば雪の如き白色の木蓮の花は御堂の青き葺と朱塗の圓柱を飾つて一際美しく眺められた。心浮く春の陽氣な氣分を以て作畫したつもりである。



三月堂の春

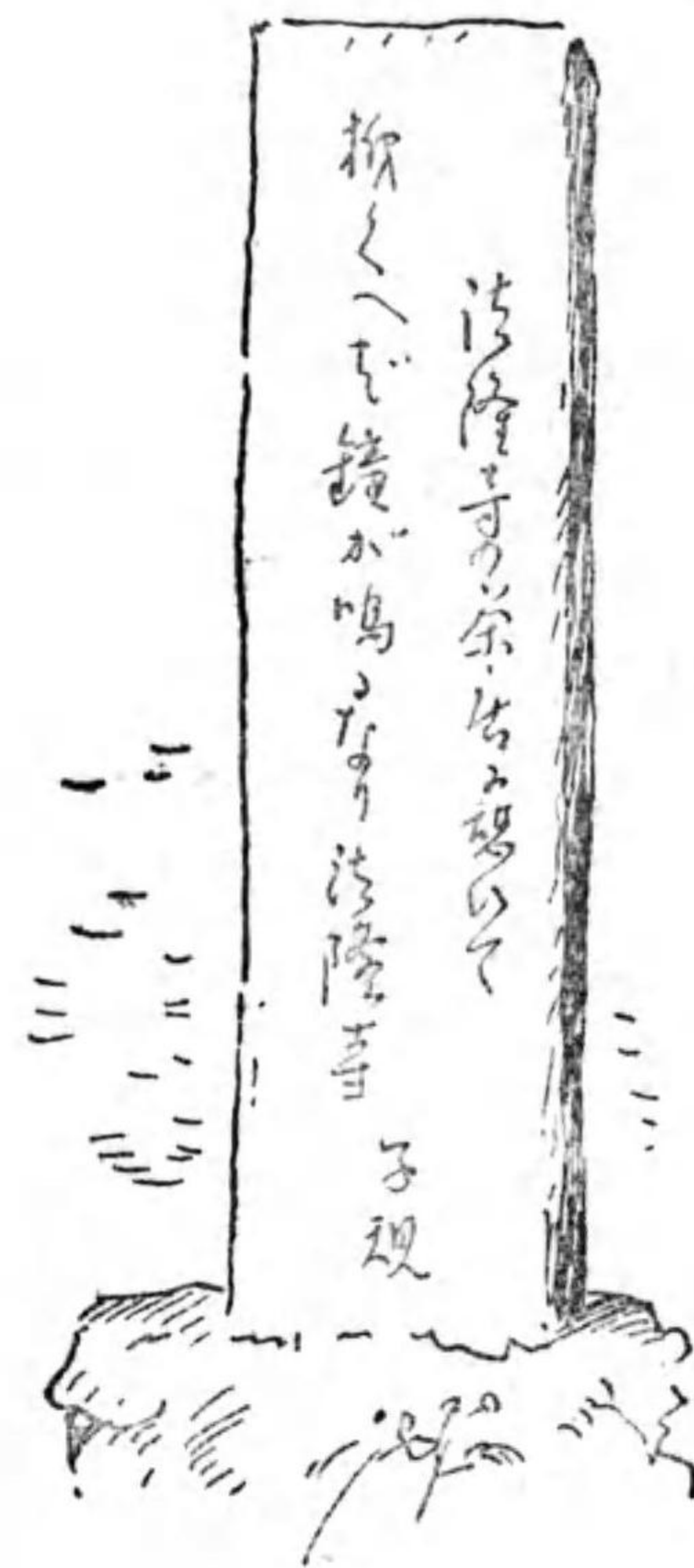


法隆寺

法隆寺

撮影禁止の場所を遠慮して、遠く全堂の屋根を望む。従つて充分意を満たさぬ作品であるが止むを得ない。たゞ記し残すにはあまりにも尊いところである爲に掲ぐ。

こゝの近くの池のほとりに子規の句を吟んだ石碑がある。老松の頂にひぐらしの聲に和して今や大講堂の修理場から盛んに鐘の音が響いて来る。

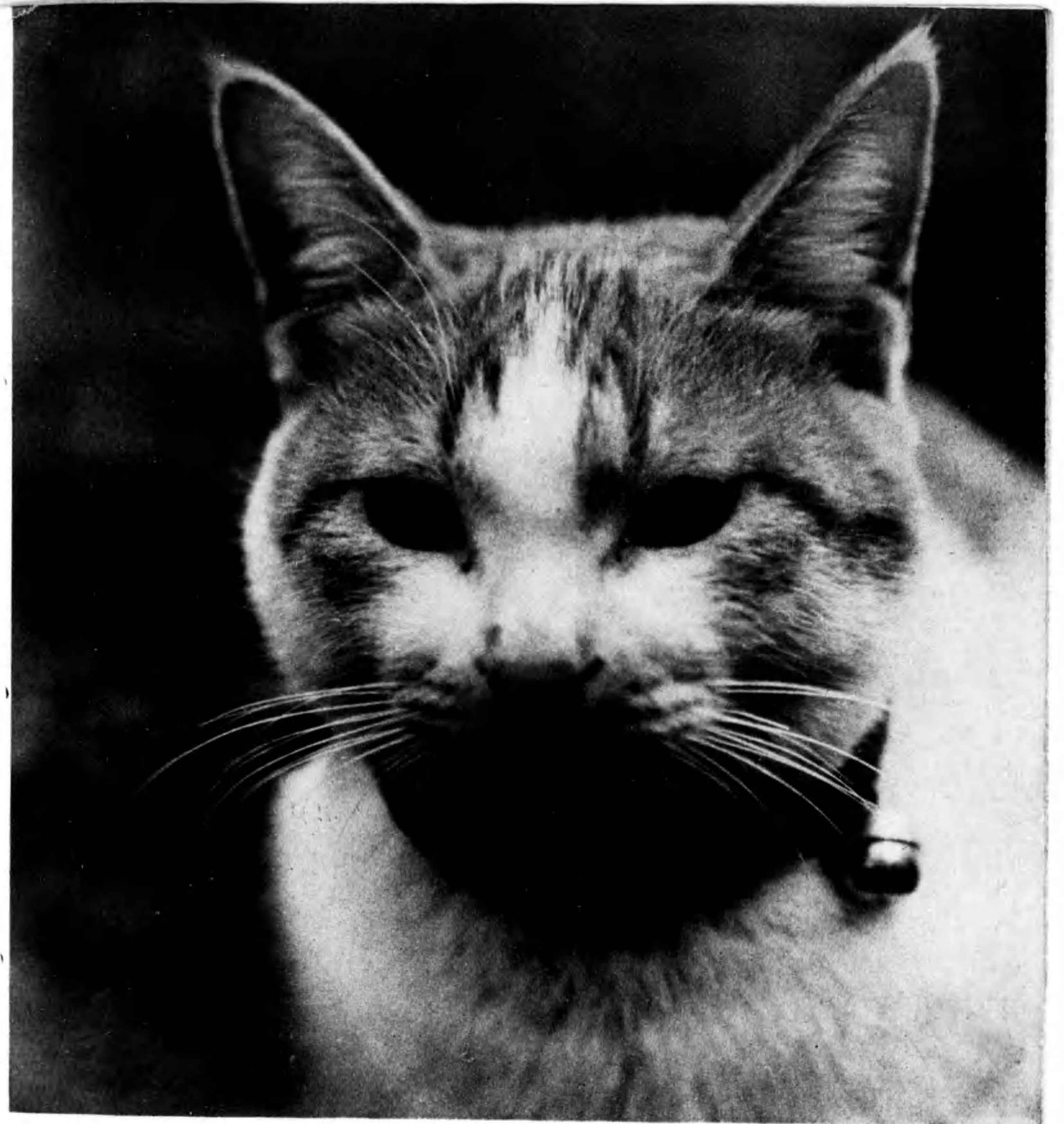


猫

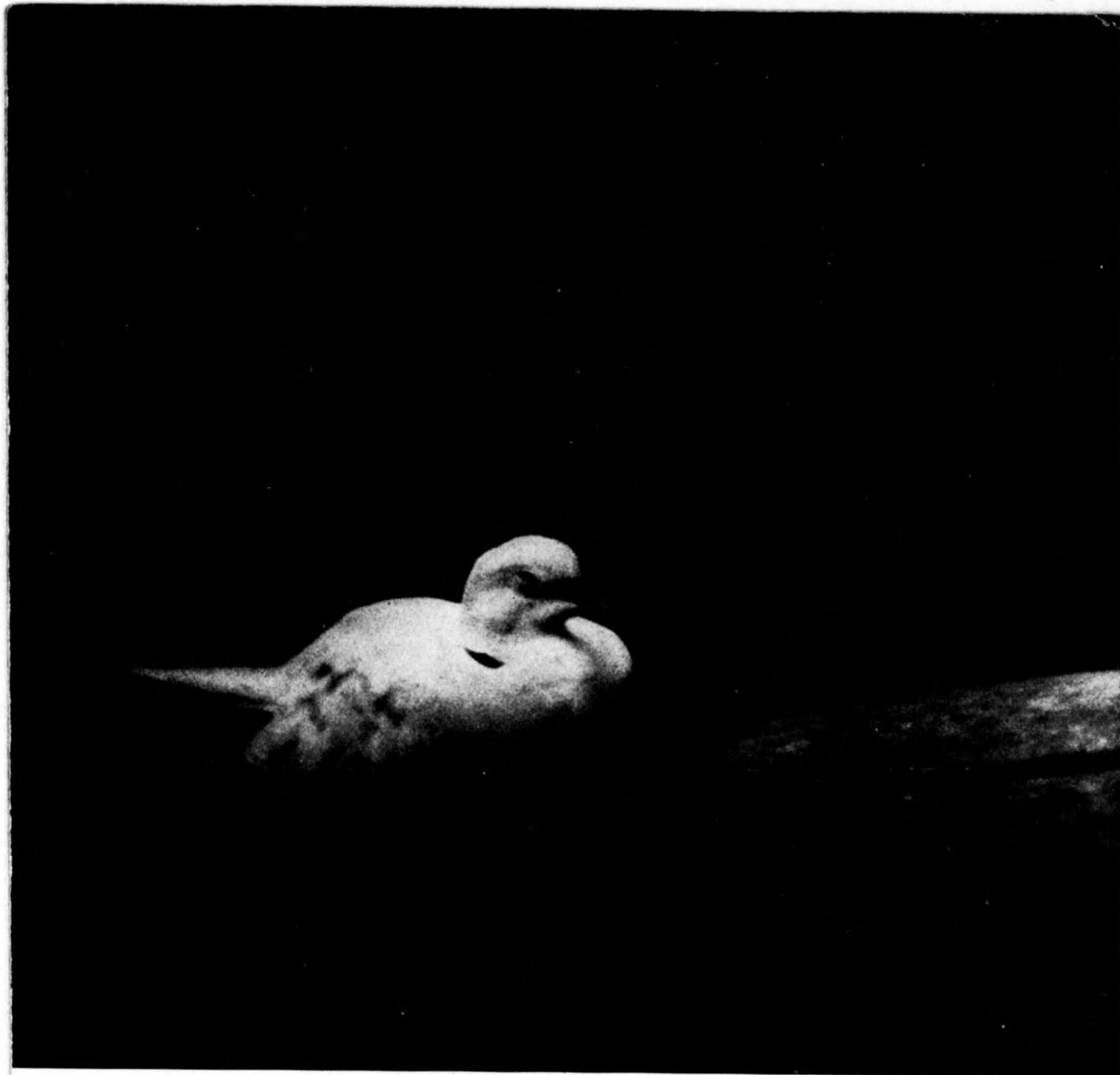
新たに私の研究材料として初めてデビイウする猫である。前に居たものは斑點の關係で寫眞には困難であつたし、又既に10年近くになるので老いて役に立たなくなつたので以後これを用ひる事にした。

然し非常に元氣で且つカメラに慣れず寫眞嫌ひであるが、これを約1/3メートルの距離で寫す困難は一通りのものではなかつた。圖は引伸によつて實物の倍の寸法になつて居る爲に仔猫とは思はれないが、實は未だ小さいものである。此様な接寫で $f:8$ 以上の大絞では一點しかピントが合はぬので餘程光線状態の良い時に小絞でなるべく早いシャッターを切る必要がある。

12. 6. 24. 午前9時疊樹下
テッサー $f:28$
絞 $f:8$
露出 $1/50$ 秒
フィルム クロームX
フィルター無し
プロクサー補助レンズ2號使用



猫



小 鳥

小 鳥

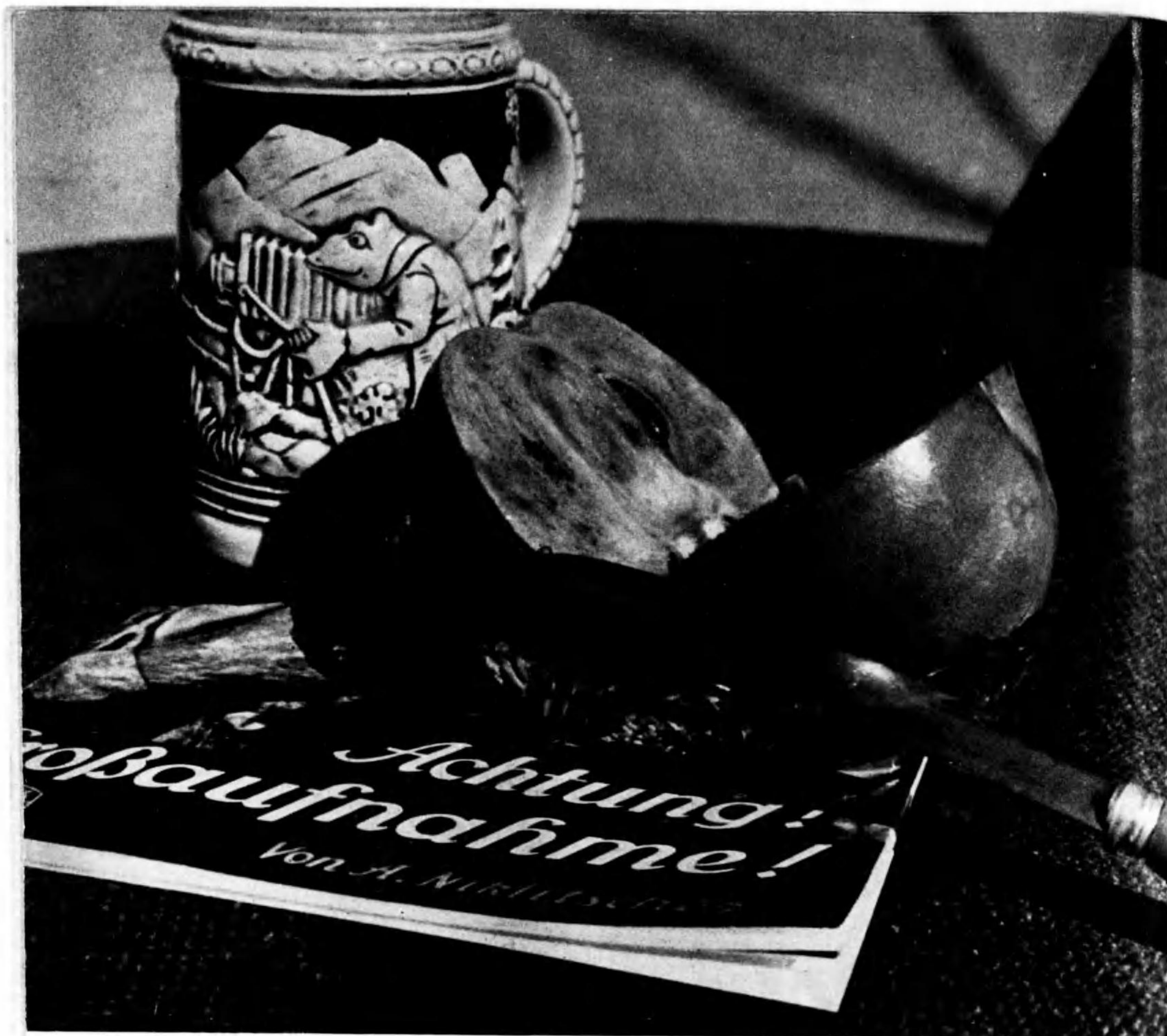
前圖と連絡して初めて意圖を全ふすものでこの一枚では至つてつまらぬものであり、私の失敗作である。然し此一枚を追加する事によつて猫の方の意義を増すだけの力はある。同様の試みは前掲別圖初夏の園其一其二“花壇のほとり”“魚紋”に見る事が出来る。アルバム等に貼附の時、又は展覧會出品畫としても、此様に二枚三枚或はそれ以上を一組にする事も、これからは試みて効果的である事を申上げて置きたい。

山ふところの秋

淋しい秋の山麓の畑の感じを撮る目的で寫したのでそれ以外別に何の慾望はなかつた。到底避け難い程の逆光線であつたが、レンズを幸ひと傍らにあつた立木の幹の蔭に入れて寫した。逆光線に地物を利用する一例までに掲げるものであつて、畫其物は私の満足には未だ遠い作品である事を御斷りして置く。



山ふところの秋



静物

静物

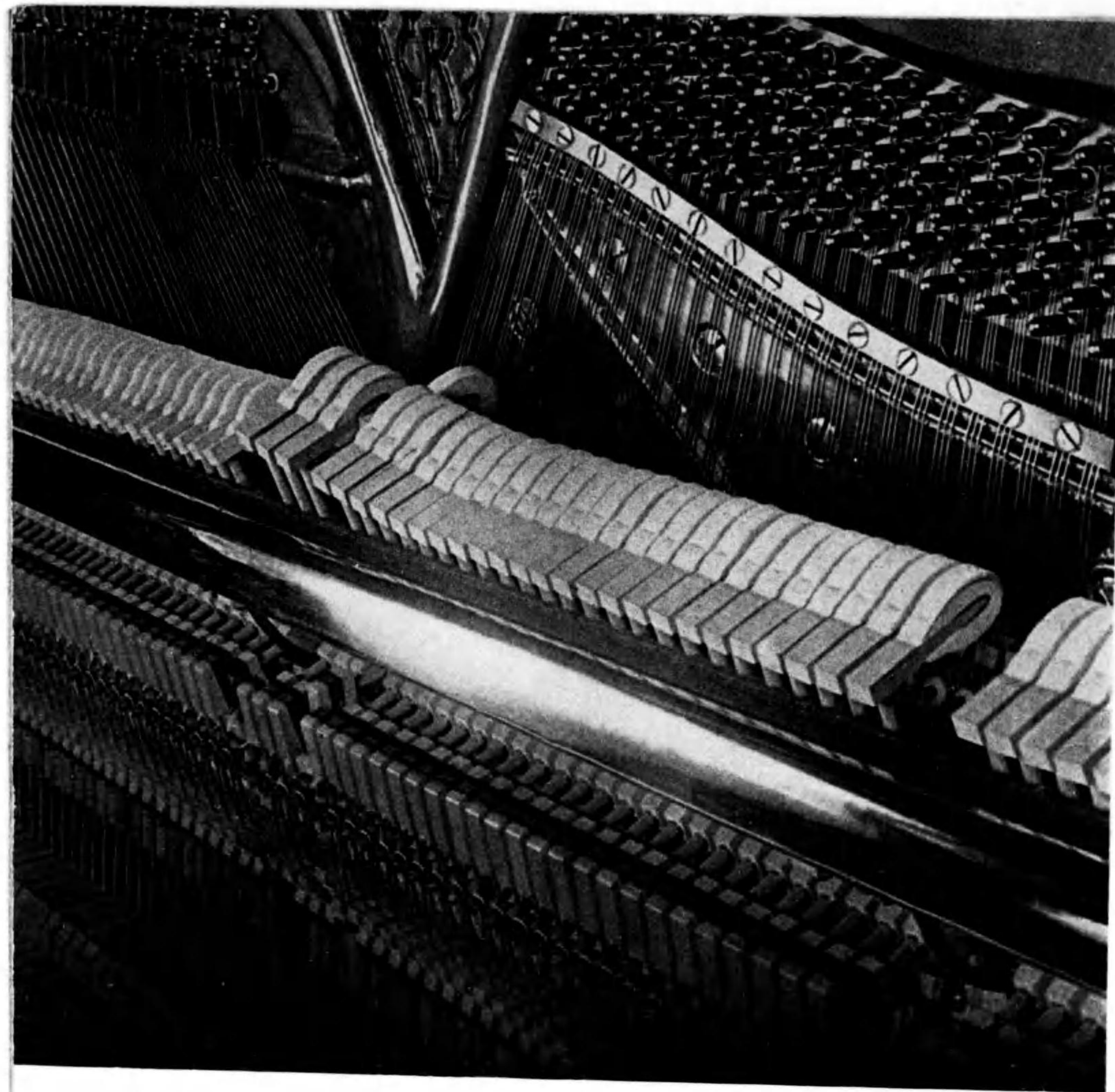
斯くて散々に研究材料とした富有柿はもう用が無いから味ふ事にした。これまで随分幾度か静物として研究材料に供したものである。

今度は接寫レンズとして上玉には2號補助レンズ一個と2號ロライパーを付け、下玉には2號補助レンズのみを勿論一個と同時にエヒト2號黄色フィルターを用ひて寫す。フィルムは同じくパソXであつた。絞は $f:11$ で $1/25$ 秒カメラ手持である。4×4判の大部分を其儘引伸した。場所は戶外庭の日向に卓子を持出して直射日光下である。

日 蔭

此畫の目的物は猫であるが、それよりも尙此畫に大切なるものは地面の木の影である。これが若し曇天であるとすれば決して此作は出来なかつたらう。光と影による藝術として此點に注意を拂ふ必要が常にある。良い寫眞を常に作る人は如何なるカメラを持つて居ても目標が正確に之等に向けられるのであるが、普通一般には被寫體そのもののみ捉はれて光と影の興味を忘れ勝ちであると云へやう。其様な場合にもレフであればこそ斯様な作を作るやうに自然なるものである。





キーのリズム

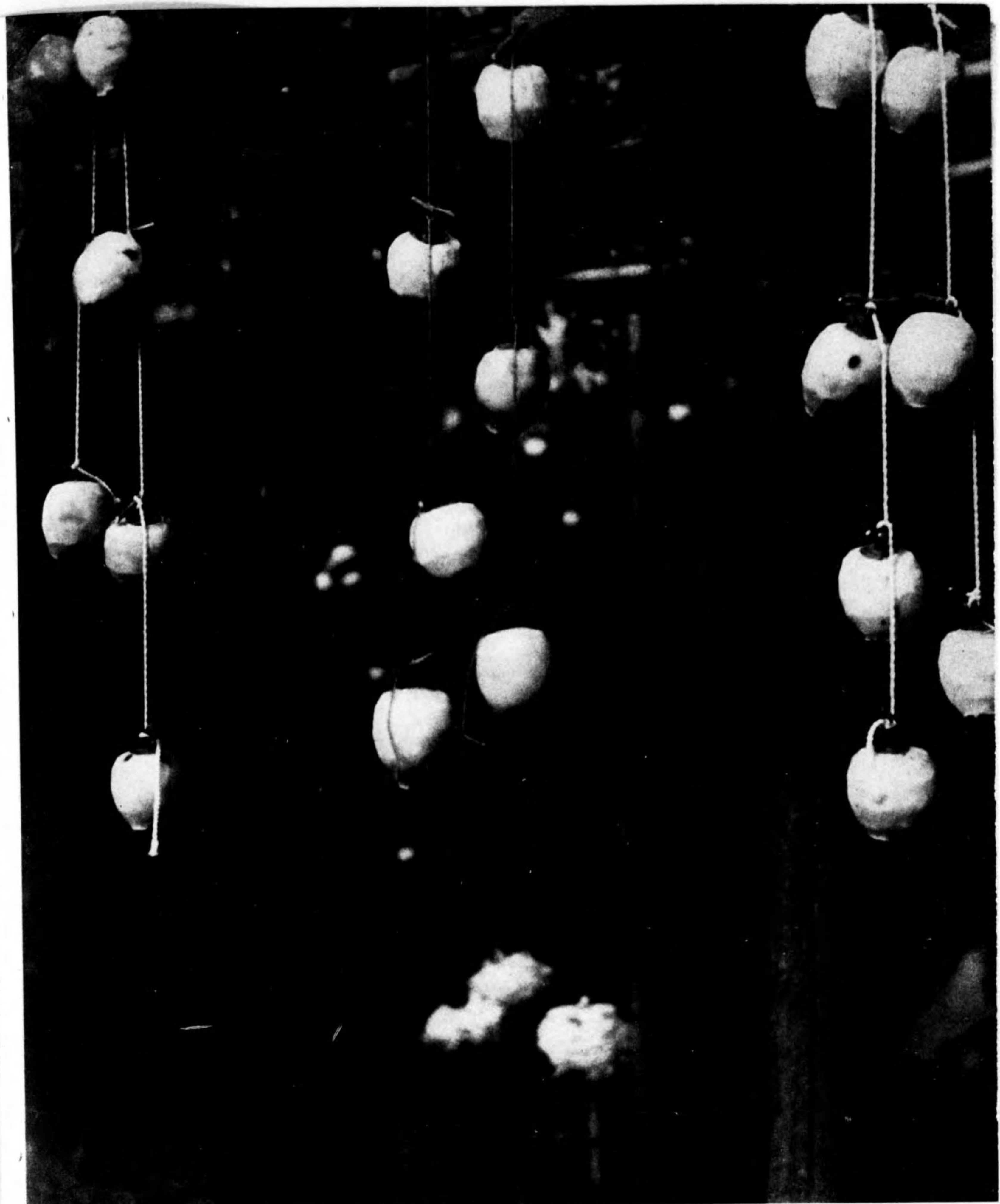
キーのリズム

自然が作り出した樹木の幹のリズムに比べて茲には人工による機械のリズムを見出す事が出来る。平常吾々の肉眼が之等を見逃し勝ちであるに拘らずカメラの眼は常に之を美しく描き出して呉れるのである。要するに寫眞の種は平凡極まるものにも存在するのであるが、それが常に人に氣付かれないのである。然しロライのピントグラスを通じて見る時は容易にこれを發見する事が出来るのである。

干柿

植木屋の御ぢさんは云ふ、ハチャ柿は干して澁
抜きすれば立派なものだと、——私にはこれ
が此上もない種となつた。

昭 12. 11. 12 秋晴。
テッサー $f: 2.8$
絞 $f: 4$
露出 $1/50$ 秒
フィルター パンオルソRO
(赤色中間)
フィルム パンアトミック
定着後 デボー使用水洗
印畫紙 染井B



干柿



潮來の印象

潮來の印象

この圖と次の圖とは共に眼前に極接近する物體を透して適當にぼかしたる遠景を取扱つたもので丁度組立カメラで悠々寫す場合に此様な試みが出来るものであるが、ロライはこれをカメラ手持で瞬間に實行出来る點が嬉しいのである。

今普通のロールカメラでは近景のピントが正確とは云へ遠景の味がファインダーではすべてレフレックスカメラの如くには判らない。特に日常多く遭遇する此様な場合を篤と考へられたいのである。

雨の日の大佛殿

東大寺中門から大佛殿を眺めたところであるが、極めて近い柵を主體とし、大佛殿其物を従とした事はロライならばこそ思ひつく撮影法と云へる。これと前圖の水郷潮來の作品とは全く同じ心で寫されたものであるが、斯様な方法こそはロライの作品を他のカメラによるものと判然と區別する一つの原因だと考へてよいと思ふ。近くのものを取除いた方がよいか、それとも一そ思ひ切つて主體として採用して見やうかと云ふ考は撮影の時にピントグラスの中に自由に想を鍊る事が出来るからである。



雨の日の大佛殿



プールに戯る

プールに戯る潮

街のスナブ、愉快なる各種目のスポーツ、アングルの妙を充分に利用した新しい作品、スピードの快を思ふまゝ味ふやうな作品も、無論物體を最もよくピントグラスでキャッチする能力ある此レフによつて日頃機會ある毎に寫しては居るが、それからは今回は當初からコンタックスやライカに譲つて本書はなるべく落付ある作品のみを以て作り一貫してざはついた、作品を乗せぬ考へで着手したのである事は御感じになる事と思つてゐる。——然し $f:3.5$ 級の優秀レンズを有し又 $1/300$ 秒以上の高速度で寫せるレフとして、スピード撮影を忘れて居るものでは決してない。此意味で本圖一枚は本書全卷の氣分を多少亂すと考へたが掲げるものである。

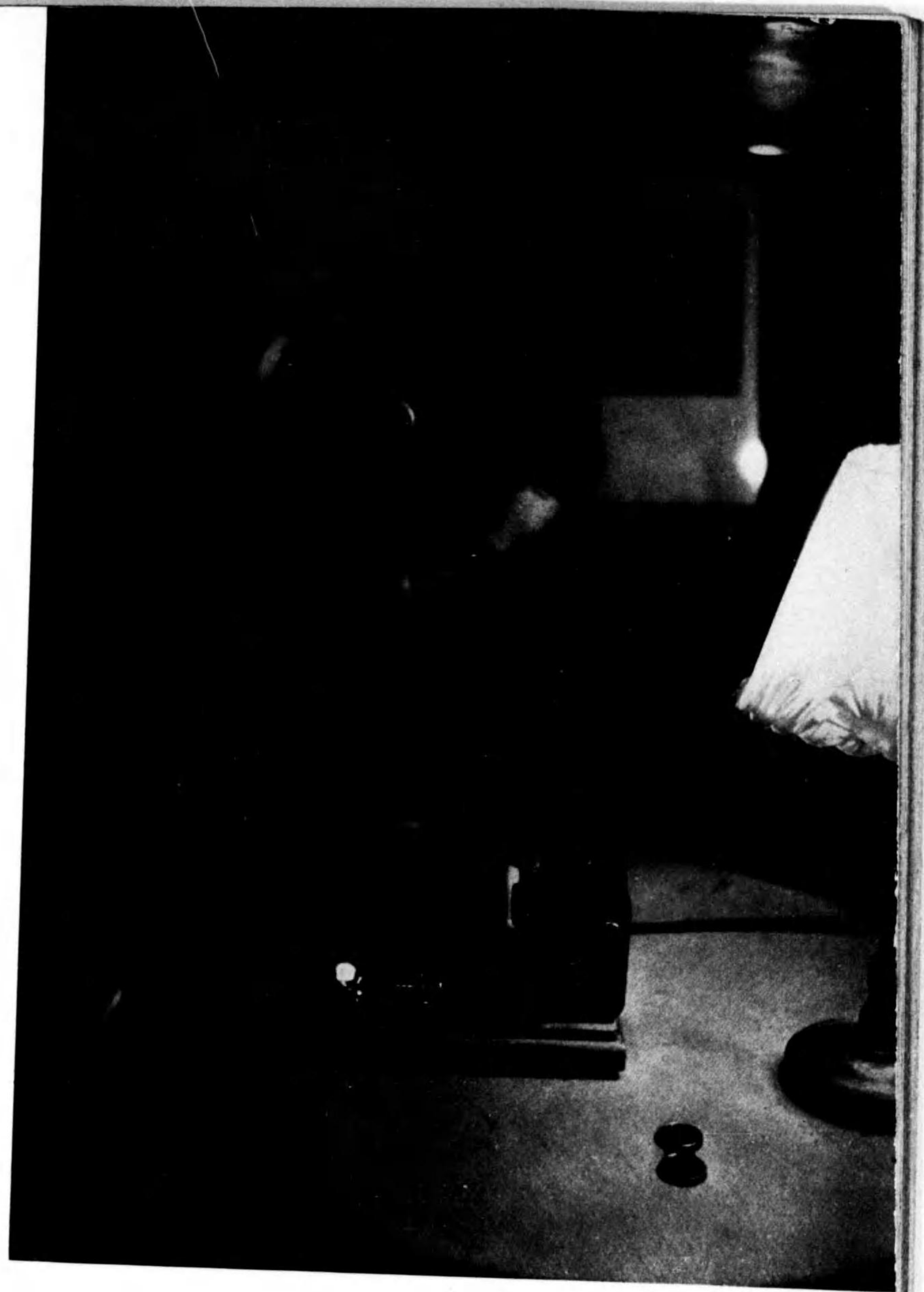
眞夏の日盛り箱根宮の下富士屋ホテルのプールに戯るゝ外人達であるが、水底の白タイルをエメラルド色に染める澄み切つた山の清水のプールの色、桃色に日焦けした肌、明るい黄色のゴム帽、之等の色彩は正にコマクローム向のものであつた。絞 $f3.5$ 、 $1/300$ 秒、ならば約5米位の近くでさへ此位の撮影はレフでも無論容易である例までに掲げる。

此機會に序に申上げて置く。本書は云はゞ靜かに觀賞し味ふ老人向の作品を主としてあるが、レフを以つて潑刺たる元氣ある青年向の作品は次回の書“カメラと機關車”で充分に見て頂く事にする。

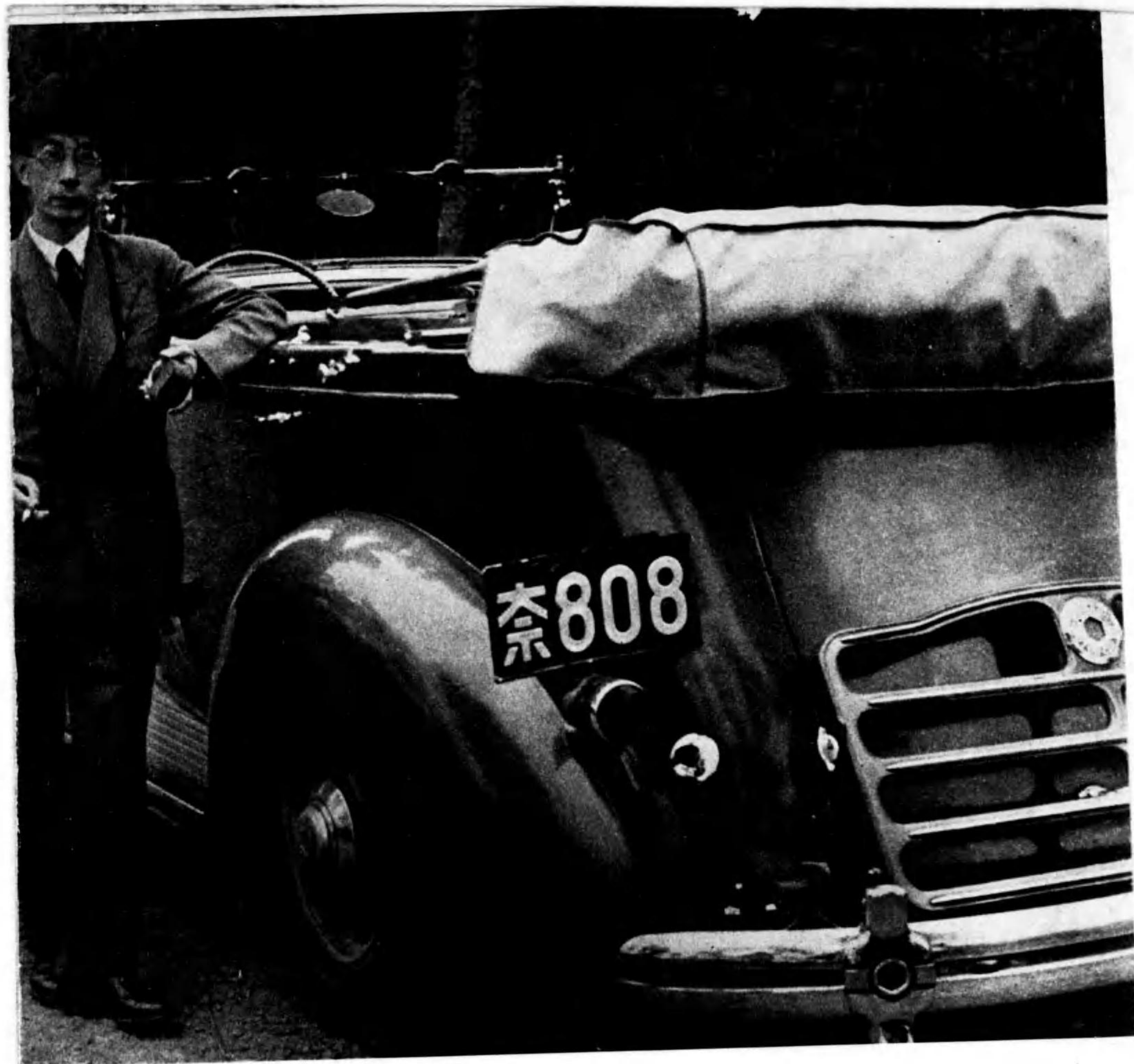
顕微鏡撮影の実際

夜間撮影の實例と同時に本文別掲挿畫の
マイクロフォトの撮影の部の補足の意味も
兼ねてゐる。100 ヴォルトの電流をトラ
ンスで落して6 ヴォルトランプが點火さ
れ、それが鏡を照して居る。從來に無い
高尚な操作で寫す事が出来た事を私は非
常に満足に感じた。尙背景に見える右方
の顔の畫は別掲色刷挿畫とした春日山の
パステル畫である。

60ワット卓上電燈一個、ネオパンフ
イルム、ロライコート、トリオター
絞ノ:4.5, 6×6判の一部より
1秒、セルフタイマー使用



顕微鏡撮影の実際



春日山にて

第 I 篇

カメラ及び装置

本篇に於てはロライフレックス、ロライコートカメラの種類と構造の大體、並びに附屬品を一通り簡単に紹介するもので、未だロライの知識の全くない方の爲に掲げるものである。既に前書“小型レフの寫し方”で一通り解説してあるから、本篇と共に御覽願ひたく又外に“イコフレックスの寫し方”の使用の場合の知識を應用出来るから、これも御参照願ひたい。

本篇に扱つた事に関する詳細はアルス発行の北野氏の書物にもあるから、私は同書に譲り、簡單なる御紹介にとゞめる。

カメラの選擇と 優劣に関する私の考へ

本書を讀まるゝ諸君が、ロライフレックスの6×6判がよいか、或は4×4判がよいか、又ロライコートの何れを求めたらばよいか、などゝ考へられるであらうが、私はカメラに就ては、左様な問題を茲に解決致さうとは思はない。何れを求められ、何れを持つて居らるゝとも一向差支へないと申したいのである。

此理由は、段々に本書を見て下さる間に自然判られると思ふのであつて別にこのカメラだからこそ出来、これでは出来ぬと云ふやうな事が無いと云ふ事に氣付かれやうと思つて居るのである。

それよりも、色々機構などの細部だけの理窟を研究しても、それによつて必ずしも良い畫が出来るとは云へないと申上げたい。カメラは自分のものを徹底的に使ひこなされて、又如何なるものを如何に撮るかと思ふ究極の目的に邁進せられる事のみ願ふものであつて、これこそロライを生かして働らせる根本の目的であると信ずる次第である。



何卒飽くまで自分のカメラを愛用せられたい。信用を拂はれたい。それが何よりも良い寫眞を作る秘訣なのである。

本書で充分御覽になる事ではあるが、私はさう毎回新型の出来る度毎に

轉々と其後を追ひはしない。寧ろ此機械にどれだけの工夫を加へやうか、どう云ふ時にどう用ひて見やうかと、日夜研究を續けつゝある。其結果は恐らく歐米でも實行して居ないと思ふところまでも、色々に用ひて居るのである。



従つて、色々機構などに就て知りたい方は、本書よりも他の著者の書物を讀まれる方が適當である。私自身としては、カメラに就てのみ従らに理窟を述べたてる事を根本から好まないのである。例へばトリオターはテッサーに比してこれだけ劣るの、此ロライフレックスの性能は自分のロライコートにはないなど並べても、それは作畫上の可否には餘り関係がないものと思ふ。自分のカメラに使ひ慣れ、眞に寫真らしい寫真を作る頭腦を養成する事が何よりも大切と思つて居る事が、心を平靜に保ち良い寫真を作れる道と思ふからである。これは豫め呉々も申上げて置きたい事柄である。

ロライの名稱

どうでもよい事であるが、此カメラの名稱に付て一寸心に浮んだから記して置く。

ロライフレックス(Rolleiflex)の方に對してこれまでは大概“ローライフレックス”と云ふ讀み方で通つて居る。又ロライコート (Rolleicord)の方は“ローライコード”で呼び慣れて居る。更に何れとも云はず總括する場合には“ローライ”と云はれて居る。

勿論日本人が本當の發音を守る必要もなく、他にも“Camera”を“キヤメラ”或は“カメラ”で通す例もある如く、それで通りもし、又獨乙語では明らかに“Kamera”“カメラ”と云ふ如く、品物の區別が付けばなんと云ふ呼び方をしても差支ない事で、どうせ皆日本的の發音になるのであるから構ふ事ではないのであるが、吾々が“富士”とか“富士山”とか稱する山に對して、外人が“Fujiyama”と呼ぶのを見る時、一種特別な感を催すのと違はない例であると思ふので、一應は述べて見たい。



ロライは獨乙のカメラであるから獨乙讀みにする方が本當と思へる。ローライコード、ローライフレックスで長く呼び慣れて居た後に、偶々或る店の廣告や宣傳物に態々“ローレイフレックス”“ローレイコード”と云ふ名稱で記されてゐるのを見た。Rolleiflex, Rolleicord, の lei を英語的

の読み方ならば“レイ”となるのであらうから、これも間違はないと云ふても差支へはないが、leiは獨乙語では“ライ”の發音になる。其故に“ローライフレックス”よりも“ローライフレックス”の方が少しは正しく“ローレイコード”よりも“ローライコード”の方が未だ本當の方に近い。



然し今度は、ロライかローライかと云ふ事を見るに、Rollは恐らく、Roll filmを用ひる事から取つた字であらうが、Rollは英語ならばto roll(卷く)獨乙語ならばrollen(卷く)と云ふ動詞から來た言葉である。これを見るとrollは英語ならばロールと伸び、獨乙語ならばロルと短かく讀まれる。して見るとローライフレックスはロライフレックスと讀む方が眞に近いのである。



さて“ロライフレックス”の方はそれでよしとして、“ロライコード”か“ロライコート”か、更に又“ロライコルト”か“ロライコート”かと云へば、終りの“d”は英語ならば“ド”と濁るが獨乙語では“t”“ト”と清音になつて濁らず、即ち“t”同じ發音になるのである。従つて“ロライコード”よりも“ロライコート”の方が正しい読み方であると云へる。又“d”の前の“r”は態々“ル”と發音しても或は發音せず前音を伸して“ー”と扱つてもよい。随つてこれは場合により文字により色々な發音する人がある。故に“ロライコート”でも“ロライコルト”でもよい事になる。

そこで私は、私のこれまでの書でも本書でも皆“ロライフレックス”“ロライコート”と云ふ名稱と共に略語として“ロライ”と云ふ發音を用ひて居るものである。前にも記した通り、どうせ日本人の口に上れば日本的發音になつてしまうのであるから、どうでもよいと思ふのであるが、それでもなるべく呼び慣れた読み方に近く、又向ふの人が聞いても餘り奇異の感がせず、自然に聞える方がよいと思つてさうした譯なのである。

ロライへの理解

ロライの名稱については前述の通りであるが、吾々は自分のカメラの性能なり價値を熟知する事が何よりも必要である。

ロライフレックス 6×6判と4×4判、ロライコートの新型、舊型等のどれであつても其通りで、假令カメラが何の種類に屬しやうが、機械を上手に取扱ひ、性能のすべてを利用するならば、随分役にも立つし、面白い試みも出來、良い畫も作れるものである。



ロライは皆二眼レフに屬するものであつて、これに就ては前書“小型レフの寫し方”の初めに(23—26頁及び47—54頁参照)充分述べ、同時に一眼レフに對しての相違までも詳しく研究發表したから、再びこゝに轉記する事は同書を御持ち下さる方々に對しては迷惑と感じて、再び轉載は致しませんが、御存知のない方の爲めに其要領を挙げ、幾分追補の意味を以て下記の事だけ申上げて置く。



一體どのカメラでも、愈々シャッターを切るまでの準備が出來てしまへば、後は寫すだけの事であるから被寫體の相違によつてもそれ程變りはない。然し問題はそれまでの手數と時間の事が肝腎だと私は考へて居る。

これを一番よく示して居る實例は、カメラの兩極端とでも云ふべきライカ、或はコンタックスと其一方に組立暗箱とを比較するとよく判る。

首から前に下けていざと云へば速寫ケースの蓋を明けたかと思ふ間にレンズは前に引出され、シャッター・ボタンに手が觸れ、距離も瞬間に合つて撮影が終り、直ちに次の撮影がいくらでも出来る此迅速なスケッチ用カメラを頭に入れて置いて、今度は組立カメラを考へて見ると面白い。

組立カメラを持つて歩く人は大抵助手を連れて居る。助手に大きな鞆をかつがせ、三脚をツックの袋などに入れて持たせて居るやうである。こゝを寫さうかと云ふ時になれば、鞆を先づ地面に置いて三脚を袋から出し、足を一本一本伸して先づ此三脚の組立に取かゝつて居る。見て居ると先生の方の一人はカメラの組立である。布に包んだレンズを叮嚀に出してカメラにはめる。三脚にカメラを注意深くのせて、捻子で止めて居る。愈々ピントを見る段取りである。裏の赤い黒布に頭とカメラを覆ふやうにして覗いて、色々工夫して居る。其内に自信がついたと見えて撮影であるが、未だレンズにはシャッターが附けてないのでこれをはめて居る。スピードをきめる。シャッターを取つて、そこでピントガラスの代りに木製の取枠と入れ換へ、カメラを動搖させぬやうに注意して前蓋を除いてそれからが本格的撮影である。實に悠長極まるものではないかと私共は感心してしまふのである。



然しそれが又馬鹿には出來ない結果を齎すのであるから考へなければな

らないのである。

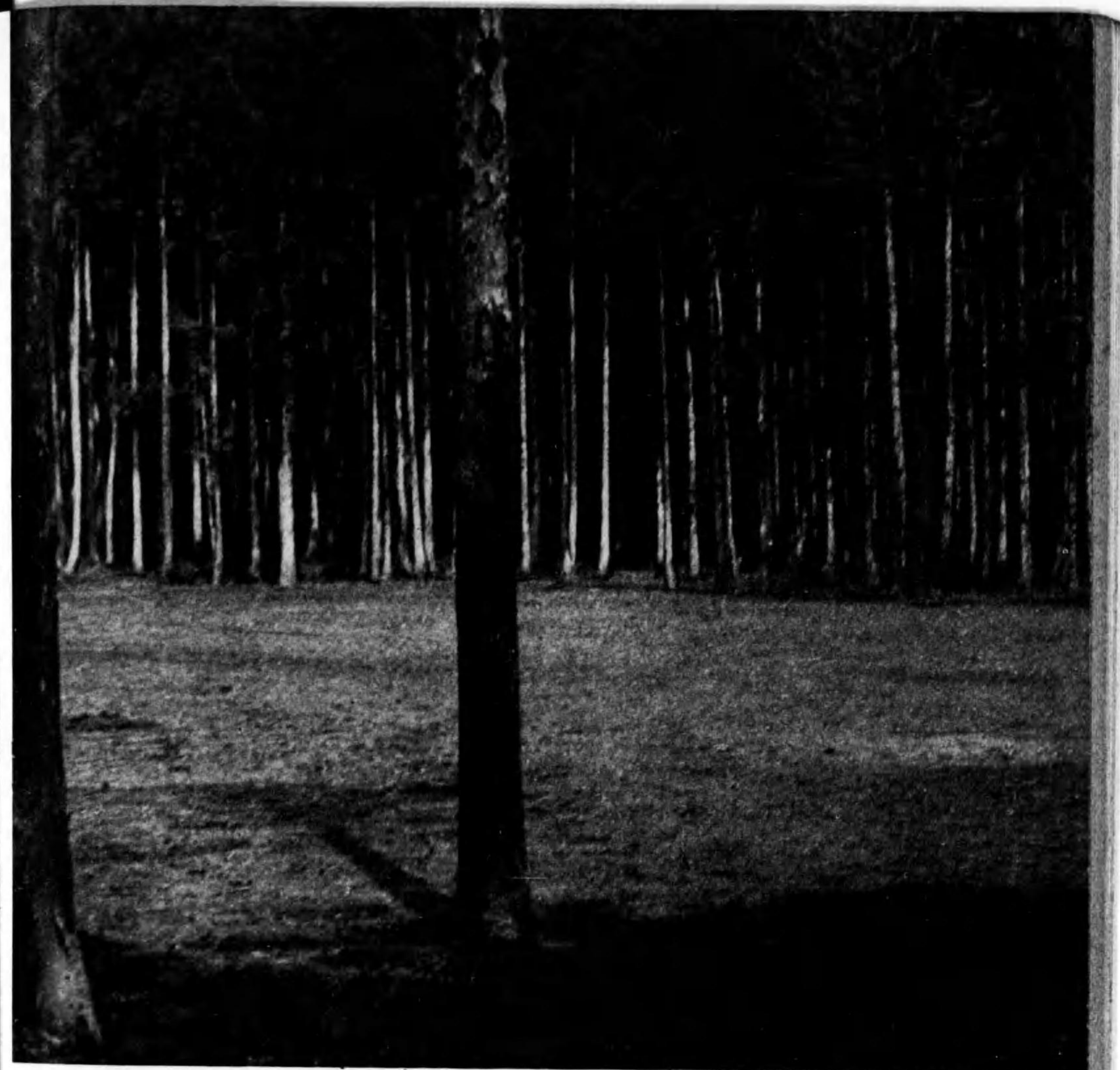
ライカは實に疾風迅雷、あの通り知らぬ間に大口を明いて笑つて居る婦人の實際の顔を寫してしまつたと云ふ時に、此組立カメラの方は身だしなみもきちんとして、納まつた眞面目な他所行きの婦人の姿を寫したのであつたとする。此ライカの畫は人物は如何にも其人自然のまゝであるが、背景の家の前に見苦しい荷車などが見えて居る事もあると云ふ場合にも、それに反し組立カメラの方は、それをレンズのボケを利用してうまくぼかして氣にならぬやうにして了解であらう。即ち一は自然、一は堅苦しく不自然の感があつて、互に何處かに違つた意味の見どころがある。即ち一は輕妙で一は眞剣なところが現はれて居る筈である。



そこで、若しもライカの輕妙に組立カメラの眞剣味が加はつたならばどれ程よからうかと思ふに違ひない。事實これが出来るのは吾々の愛機たるロライ一族の特長なのであると云へるのである。



ロライのピントグラスを覗く時は、組立カメラの如くレンズ像のまゝを自分の眼で直接見て居るのである。即ち目標にピントが合つて其前後のぼけが判るから畫の味が見られる。これは組立カメラと同様である。ライカでは目標だけは正確にピントが合ふが其前後の像は皆二重像になり、決してぼけは見られない。つまり畫の感じは全く知られない。ロライでいざよ



木立

いと思ふ瞬間、迅速にシャッターを働かせ軽妙な作用で寫す事は組立カメラとは似ても似つかぬ敏速さを持つて居る。これはライカと餘り違はないのである。こゝがロライの價値の大きいところである。



さればとて、もともと迅速と敏捷を旨とするライカにはロライが常に及ばないのは、機構上の問題と外に又容積の稍大きい爲に常に身邊に携帯して苦痛を感じぬと云ふ事が出来兼ねる爲であるが、一方又組立カメラの如く自由な焦點距離のレンズを取換へて、機に應じ寸分の隙の無い寫真を作ると云ふ程の仕事が利かぬ點では、組立に及ばぬ。つまり此中間に存在する事を念頭に置く必要があると云へるものである。



然し乍ら組立カメラでは、多く密着燒して寫した原畫のまゝを用ひるに反し、ロライでは引伸による作畫を主とする爲に、茲に新らしい趣きの寫真と云ふものが出来て來る。それはライカの如く單に迅速敏捷と云ふ報道寫真的のものではなく、餘程自分の主觀を以てし、且つ光學的特色を利用した藝術味豊かとも云ふべき畫が生み出せるのである。それがロライの特色であつて、藝術寫眞の競技などでロライによる作品が斷然主位を占める傾向のあるのは此理に基くと云ふ事がはつきりして來る。



欠

欠

最新型ロライフレックス

ロライ群に異彩を放つ最高級機の事を少しく記して置かう。此カメラは取扱を一層迅速にしようとするのが眼目で生れたものである。すべてが此 Quick Action を目的とするために考案が施され、殊にロライコートに見ると同じフォーカシングフードを用いた事なども一段質を低下したのではなくて迅速さを尊ぶからであると思ふ。従つてなるべく頭を使はず自動的に手先で行くと云ふ點からして、Vollautomatisch (全部自動的) に考へが進

められ、従つて “Rolleiflex Automat”
ロライフレックス フオートマート

想出のロライフレックス 最舊型で (ロライフレックス自動機) と云ふ名稱で出して居る。
1931年頃盛んに活躍したものである。



然し此カメラの出現も今日の制度の下に我がロライファン全部の目を樂しませ、機構の妙を味ひ、絶大な効果を擧げると云ふ譯には行かず、恐らく堅い關所の門を何かの方法で無事通過した極めて少數が一部の人の手に於てのみ得意の働らきを爲すものと思ふ。

然し外觀が優美に、機構が都合よくなつた爲に、それだけ此カメラに依る作品が従來のものより鮮かに現はれる

と云ふ譯のものではなく、上手な寫眞家は今日相變らずヴェスト單玉を離さぬ事實がある位であるから、敢て胸を高鳴らせなければならぬ譯でもない。



眞に改良の諸點の良さは使つた人でなければ判らない事であり、一般のロライ愛用家としては關係が薄いとも思ふので簡単に説明をして置く。圖と對照せられたい。

(1) **フィルム自動捲上 (Automatic Film wind)** によつて (a) シャッターがかけられ (b) 二重露出と空露出が防止され、(c) セルフタイマーがかけられる。



(2) **フィルム新装填機構 (New Loading Device)** カメラの番號の赤窓が無くなつた。單にフィルムを入れハンドルを廻せば自動的にフィルムが止る所がある。それでもうよろしいのである。カメラの外部にも1の數字が出る。

(3) **絞と速度の調節輪 (Milled Disk Controls)** 兩レンズの中間左右に齒車式になつて取つけられた。此方が取扱易いと云ふ。

(4) **セルフタイマー (Selftimer)** がつけられた。毎回自動的にかけられるが使はない

時は其まゝで置いて差支ないものである。前驅時間は12秒との事。カメラの前から見て右上の肩にある。

(5) **絞と速度數字の窓の改良 (Improved Peep Window)**

4×4 のロライ同様に擴大鏡が附いた。

(6) **フォーカシングフードの改良 (Reflex Hood with Eye-level Focussing Viewfinder)** II型のロライコート同様の機構のものが用ひられ透視してフォーカスが合はせられる。然し畫像は勿論逆さに見える。

(7) **距離釦に深度表が附いた (Combined Depth-of-focus scale & Focussing knob)** これも II型ロライコートにあると同様に珍らしいとは云へぬ。

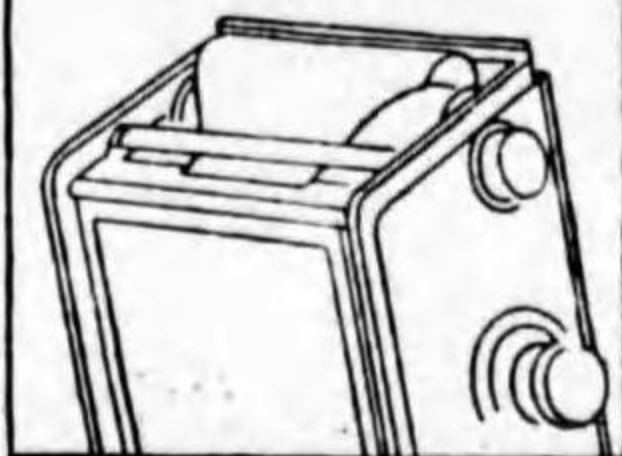
(8) **露出 (Exposing)** は毎回の撮影と共にフィルムは勿論捲かれ、又シャッターは次の撮影の爲にセットされる。

(圖はそこまで示してあるが此外に)

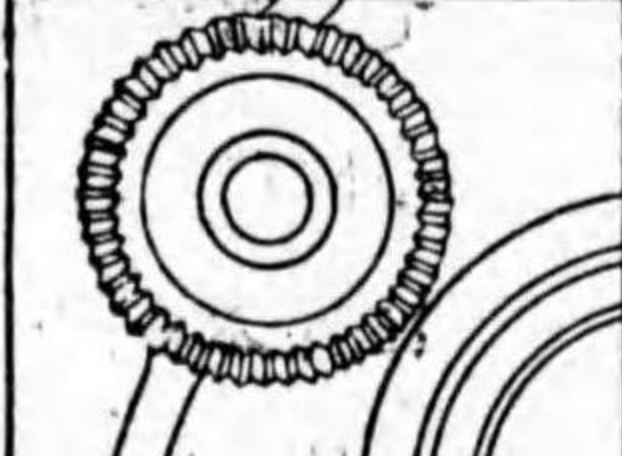
(9) **上方のファインダー用レンズの口径が大きくなつた (Larger Aperture Finder-lens)** 従來下玉は $f:3.5$ で上玉が $f:3.1$ であつたが此上玉が $f:2.8$ になつた。但し下玉は元通り $f:3.5$ テッサ。



1. AUTOMATIC FILM WIND



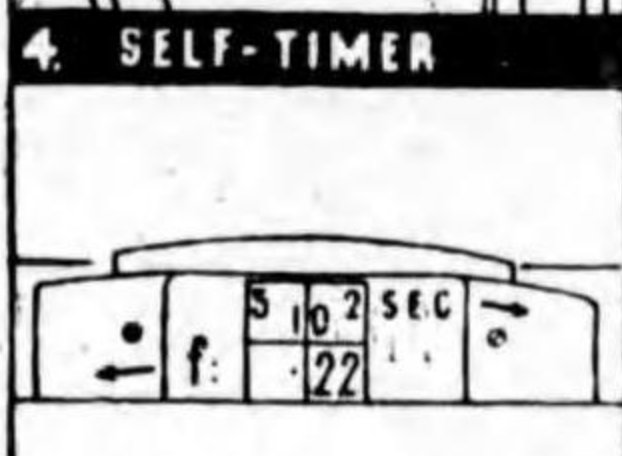
2. NEW LOADING DEVICE



3. MILLED DISC CONTROLS



4. SELF-TIMER



5. IMPROVED PEEP WINDOW



6. EYE-LEVEL FOCUSING VIEWFINDER



7. COMBINED DEPTH OF FOCUS SCALE & FOCUSING KNOB

ロライフレックス 6×6判の撮影に就て

4×4判ロライフレックスカメラでは若し可能ならば常に微粒子フィルムで、微粒子現像液を用ひ、露出から仕上げまで本格的に操作するに越した事はない。又然らざる場合でも露出から仕上げの終りまで微粒子の仕上げに拂ふと同一の注意を以て行ふべきものと思ふ。

然るに6×6判ではロライコートにしてもロライフレックスにしても此點が非常に氣輕で濟むと云ふ事が、何よりも大型サイズを扱つて見て有り難く感じる場所である。外に色々の差もあらうが此現像に氣兼が少ないと云ふ點が4×4判と6×6判との第一の違ひであると思ふ。そして若し6×6判たりとも充分の注意を拂つて行つた場合に得られた完全なる微粒子好調子の原板を見るならば、實際に於て小型が厭になつて來る。全紙に伸してびくともせぬ其像の確かりして居る所を擴大鏡で眺めて見て獨り悦に入り、暇を見て素晴らしい引伸を作つて見やうと云ふ大なる希望を他日に残す事は疑ない。斯様な時、いつも私は日頃愛用して居る他機、例へば3×4判(ヴェスト半裁)であるとか24×36ミリ判(ライカ判)などが急に厭になるのである。勿論此等の輕快性は別として、原板の大きい爲に後の作業の安心と云ふ心からである。



以前6×6判が四角である爲に、山岳や海岸の撮影には向かないサイズである、矢張り長方形の方が流通性があるなど、語り合ふのを聞いた事もあるが、それは時と場合によつての事であり、又6×6判は四角でも、割合レンズの角度が廣いから、左右の廣がりに對してはそれ程不満はなく寧ろ天空の廣さが充分入れられて、氣持ちよいものが出来るなど、云ふ場合もある。結局に於てサイズが四角であらうが、長方形であらうが、適當に使用する事によつては問題とする程の事はない。



然し四角で、又其サイズが6×6判であれば、日常吾々の作畫の上に相應しい事は最早や動かし難いところである。たゞ不足としては印畫紙に四角なものがあつて呉ればと思ふ事だけである。それ迄望む必要もないかも知れないが、要するに四角なサイズの畫を見て其全面から何も切捨て難いと思ふ事が常にある。それは即ちレフの特長であつて、寫す時から不要のものを全くピントグラス外に取除いてしまつて居るからに外ならない。そこで此やうな時には印畫紙の片側が必ず無駄に切落される。勿論切落した小片とて、他日ポストカードとか又は試燒など何等かに有効に利用されるから大切に置いて置くが、今日の長方形印畫紙に對する四角形原板は不合理とも云へる。



けれどもかりに印畫紙が長方形であるとしても、何も必ず四角に作畫す

る必要はないから原板中の天空とか地面とかを除けばよいと云ふ考へは常に私等の持つところである。其場合には天を落すか地を除くか、四角判であるが爲の選擇性が豊富に存するから實に便利でもある。



此 6×6 判のロライレフックスを扱ふ味は同じカメラ乍ら 4×4 判の時とは餘程感じが違ふ。これは私の感じのみではないと思ふが、4×4判を持つて家を出る時は外に小型のスケッチ用カメラを二重に持つて行く考へなど起らないが、6×6判の時はポケットに何か他の便利なスナップ用カメラが欲しくなるものである。つまり 6×6判が幾分輕妙な動作に缺けるからであらう。例へば途上で氣の向くまゝに見る物見る物をパチリパチリと次々と寫すには 6×6判では其都度氣遅れがする事もあらう。それは一寸人に此カメラを向け難いときもあるし、又他に 12枚無雜作に撮つてしまつて、又フィルムを取換へなければならぬと云ふ面倒を思ふからである。實際ロライのフィルムの取換はうるさいものである。12枚位は呆氣なく寫してしまふが取換の手数は一寸大きいものである。その點に於ては小型のスケッチカメラの方は氣輕に人にも向けられる。又枚數も多いから苦勞が少ない。そこで必ず二個持つて行きたいやうな氣が起るのである。



然し一度撮影になると大型のピントグラス像の如何に眺むるに便利な事か、擴大鏡に依らずとも充分シャープなピントを得られるし、又構圖を見

るに易い。これは 4×4判とは大違である。

これ程 6×6判の特長が大きい以上に携帯にごろごろするなど云ふ事は當然忍ばなければならないと思ふ。私の考へでは恐らく此サイズのレフは如何にカメラが発達しやうが、最も良い畫を作る中心のカメラである。又如何にサイズが小型で精巧なカメラが出来て來ても、到底此サイズのレフには及ばないものであらうと思つて居る。

6×6判に對する觀察を大體以上の如く纏めて置いて、更にカメラを顧みる事にしやう。

ロライコートに就て

ロライフレックスを求めたいが代價が高いから、ロライコートにして置かうなど云ふ考へでロライコートを求める人が多い。

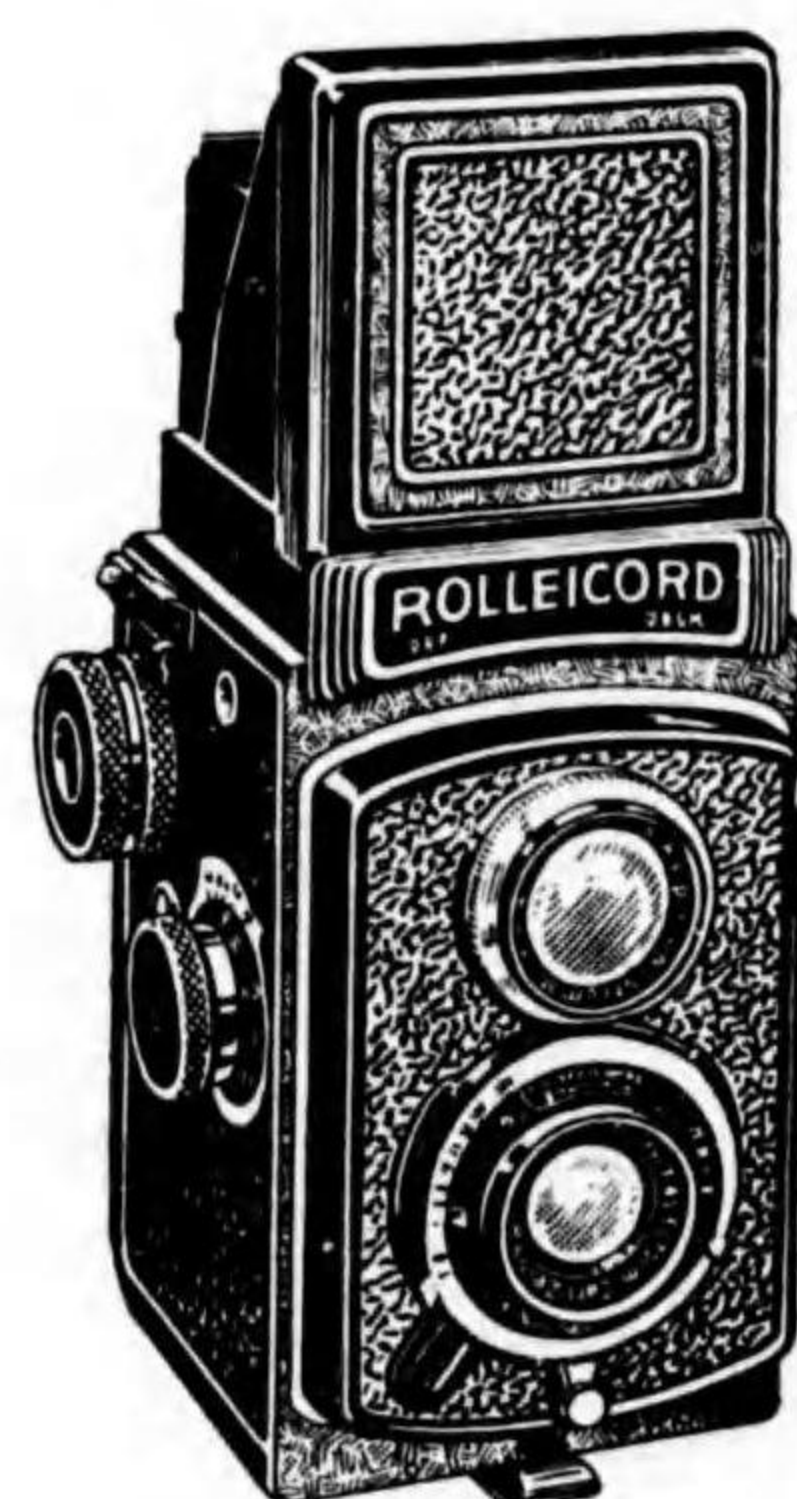
然し私はさうとは思はない。否却つてロライコートの方に幾多の長所と便利な點を見出す。

そこで暫らく此カメラに就て色々の點から見て研究を重ねて見たいと思つて居るのである。

ロライコートには 4×4 判 (ヴェスト判ロール・フィルムを用ひる) は



現在我が國で用ひられて居る $f:3.5$ トリオター付 II 型ロライコート



今度出來た未入荷の普及型 (Ia) $f:4.5$ トリオター付ロライコート

なく 6×6 判 (ブローニー判ロール・フィルムを用ひる) のみである。序にブローニー判ロール・フィルムと云ふ名稱より B II フィルムといふ名稱が此サイズに對する世界共通名である事を注意して置かう。



さて最初に此ロライコートカメラは目下我が國で使用されて居るものに舊型と新型の二種ある事に就て此差を述べて置きたい。

- (1) 舊型ではフィルムの番號がカメラの左側に出るが、新型では右側に出る。左側には最早何の裝置も施されてない。
- (2) 舊型では此番號窓によつてフィルムの進行を一枚づゝ檢視するが新型では全く自働送りになつて、一々見る必要がなくなつて居る。
- (3) フィルムの捲上げは舊型も新型も同じボタンであるが、舊型は何處までも止まらずに廻るに比して、新型では一枚分フィルムが移動するとボタンは廻らなくなる。一回の撮影を了つてボタンを廻すにはボタンの中央に二重に施された小ボタンの頭部を押せば廻るやうになる。そして適當の長さ廻つて再び自働的に止まる。

最初フィルムを裝填した際に此小ボタンを押しつゝ番號を 1 に戻すものである。

- (4) 舊型新型共にレンズ座の繰出を行ふボタンは同じ所にある。然し舊型では單に此ボタンに於て大體の距離を輪上の數字によつて知る事が出來たのに比して、新型では、數字は特別に設けられた座金に移され、距離のみではなく、焦點深度も同時に讀めるやうになつて



想出のロライコート 革張りではなく金属製外被の美しいものである。ロライコートの最初の頃の製品でf:4.5トリオター付。

以上の如く舊型新型、そして本書執筆中未入荷の最新型ロライフレックスにはそれぞれ刻々の進歩を見る事が出来るのである。

殊に今日多くの諸君が用ひて居らるゝ新型となつてからは、ロライコートの便利さは完全に發揮されるに至つたのである。

例へば此カメラは下から左手の手の平で支へ乍ら、左手の指でシャッターを樂に切る事が出来、之れは最もカメラを動かさずに行ひ得る安定の取扱方であると云へる。

居る。

(5) シャッター部分は新舊型共に格別變化はないが、別項に掲げた最新型に於ては改良が施されて居る事を特に御注意して置く。

(6) フォーカシングフードは新型に於ては非常な改良が施されて、カメラを眼の高さに持つてファインダーを透視して眺める場合にも、フード中の反射鏡によつてピントガラス上の映像によつてピントを検し得る事はロライフレックスにすら無く一步進んだ考案である。然し像は逆に見えるから見にくいとも云へる。



而して、吾々の使ひ慣れた右手を以て、フードの扱ひ、擴大鏡の操作、絞、速度、シャッター等の一切の操作が自由に出来得るやう、全部運轉機能が右側に集中されて居る事は、恐らく此カメラが世界中のカメラ中最も進歩して居て合理的なものであると云ふ確信を私は持つて居る。



私は前にも度々記した通り、數種のカメラを携へて旅行する爲に少しでも少量のものを望む結果、平常は4×4判のロライフレックスを最もよく用ひて居るが、總ての點に於てロライコートの方が上であると認めて居る。それ程に此カメラは合理的で使ひよいカメラである。



都合のよい事にロライコートはロライフレックスの附屬品が大抵共通に用ひられる。そしてレンズのマウント直径も28.5ミリで同一であるから、フィルターも共通に使へる。これは便利な事と思ふ。



ロライコートのピントガラスを取去つて仔細に研究して見た事があるがこれは一般の方にはお奨め出来ない。折角よくピントを調整してあるものを狂はせる虞が無いとも限らぬからであるが、私が此カメラを開けて見た時驚いた事には、實に其内にかくれたる巧妙な装置を見出したからである

ロライフレックスではハンドルによつてフィルムを自動送りする其機構

の複雑さの爲に煩はされて、ロライコートに見るやうな、フォーカシングフードの両袖を其儘一操作の下にカメラ中に疊込む餘地がないのであるが、此ロライコートには機構が簡単な爲に充分の餘地が存し、それが爲にピントガラスの内側に近距離撮影に際してマスクを自動的に移動調節するが、此ロライコートには機構が簡単な爲に充分の餘地が存し、それが爲にピントガラスの内側に近距離撮影に際してマスクを自動的に移動調節する巧妙なる楨杆装置が付けられて居る。



尙ロライフレックス同様此カメラのボデーは一個の丈夫な輕金屬の鑄物で出来て居て、單に打撃に弱い部分としてはレンズを附して前方に繰出される前方の長方形の前板のみであるが、レンズを支持する部分は堅固な金屬製であるから、長年月の酷使でもピントの狂ひは起らぬと思ふ。但しフォーカシングフードは薄い鐵板だから弱い。従つて取扱は充分に注意しなければならない。



毎度云ふ通りレフのレンズを濫りに外して内部を拭く事は、カメラのピントの絶對を期せられなくなるから慎んだ方がよいが、止むを得ない場合にはよく最初にレンズの周圍の文字の位置を見て置いて、再びはめた後もその位置まで捻ぢ込むやうにしなければならない。ピントガラスの方も、寫す方も、共に絶對に同調されて居てこそ安心の出来るものである事を忘

れてはならないのである。



ロライフレックス、ロライコート共に黒色の塗工が相當よく堅固ではあるが、永年の内には方々が剥けて來る。こんな場合、小部分ならば自分で塗り直す事はカメラ手入中の必要事の一であるが、塗料としては黒色のラッカーがよく、黒色の光澤ラッカーならばそのままよく、黒色の艶消ラッカーならば乾燥後に少量の機械油を附した布で表面を拭くならば、新品と少しも違はぬ外觀に直るものである。ラッカーは東京市中の如き場所では藥店に小壺入り 30~40 錢で得られ、それを細い水彩畫用筆を以て塗れば 2~3 分間で乾燥する。筆は薄め液 (Thinner) を同時に求めて置いて、使用後に必ず拭いて清めれば、固まる事なく常に新しいものと同様に使へるし、此薄め液少量をラッカーに加へれば、ラッカー其物が空氣に觸れて濃厚になつて使ひにくくなる事を防ぐ事が出来る。シンナーはアルコール壺位に入つて居るもので矢張り 30~40 錢で得られる。



新型ロライコートのレンズはトリオター 75 ミリ $f:3.5$ であるが、舊型では $f:3.8$ であつた。シャッターは $1/300$ 秒まであるコムプーアであるが、セルフタイマーはない。一卷のフィルムには勿論 6×6 判が 12 枚撮影出来る。



此ロライコート II型に全く同じと云つてよい機構を持つ國産レフとして
ロールコンターと云ふものがある。總ての點に於て舶來機に勝るとも劣ら
ぬから安心して御推奨出来る。此カメラの外観は後に示してある。

最新型ロライコート

ロライコートはテッサーレンズを好む人には物足りない唯一の點であら
う。それ以外の機構から云へば、却つてロライフレックスよりも非常に合
理的に各取扱部分が配置されて居り、其上機構の巧妙さに至つては此方が
上級と云ふて憚らない。

たゞ従來のロライコートで、私は美的見地から云つて何んとかく前方か

ら見た時多少貧弱の感を持つて居た。それが
先頃の改良によつて大分よくなつたが、想ふ
に ROLLEICORD と書いてある文字板が平
面の薄板である事と、デザインの物足りなさ
が第一であり、それに上下レンズの周圍の金
具に尙一息のところが残されて居たからであ
ると思つて居た。



然しこれは本機を愛好するの餘り、長所と
短所と一切見出したいと云ふ熱意から、私は
態々無用の詮索をした譯なのであるが、今も
しそれと同じ頭で見ると、ロライフレッ
クス、ロライコート以外の他のレフには更に

多大の物足りなさを見出し得ると云つてもよからうかと思ふ。



今私の思ふ通りロライコートを改造して見るならば、私は現在自分の所有するあらゆるカメラ中、これは最も気に入るものになると思つた。

つい先頃獨乙から届いた型録によると、圖に示す新型が出て居た。私は自分の好きなカメラであるから、強い關心を以て見つめたのである。すると前記の文字板は平面の板でなくて數段の押出が加へられて長方形の輪廓にデザインが簡易化されて居る。其上今迄の多少間抜けた感のある上方レンズのマウントは、丁度 6×6 判のロライフレックスに似て、下方レンズと共に瓢箪形のマウントの中に收められ、コムプーシャッターのダイヤルは上方から讀めるやうになつて居る。



此瓢箪形の形が又ロライフレックスのものに比して非常に美的である。殊に其外縁を太く描き出した線が實に利いて居て、カメラ全體を此上もなく生かして居るのを見たのである。

然し此カメラが最近の世界貿易界の情勢からみれば、決して従來の如く直ちに何人にも手に入るやうになるとは思はれないから、欲しくも當分は我慢しなければならぬと諦らめて居る。



若し此上にテッサー $f:2.8$ 位までも附けて貰へるならばこれ程嬉しい事はない。勿論現在では $f:3.5$ トリオター付であるが、このレンズでも決して悪くはない。

その内に私も此カメラで色々の試みをしてみる時があると思つて居る。

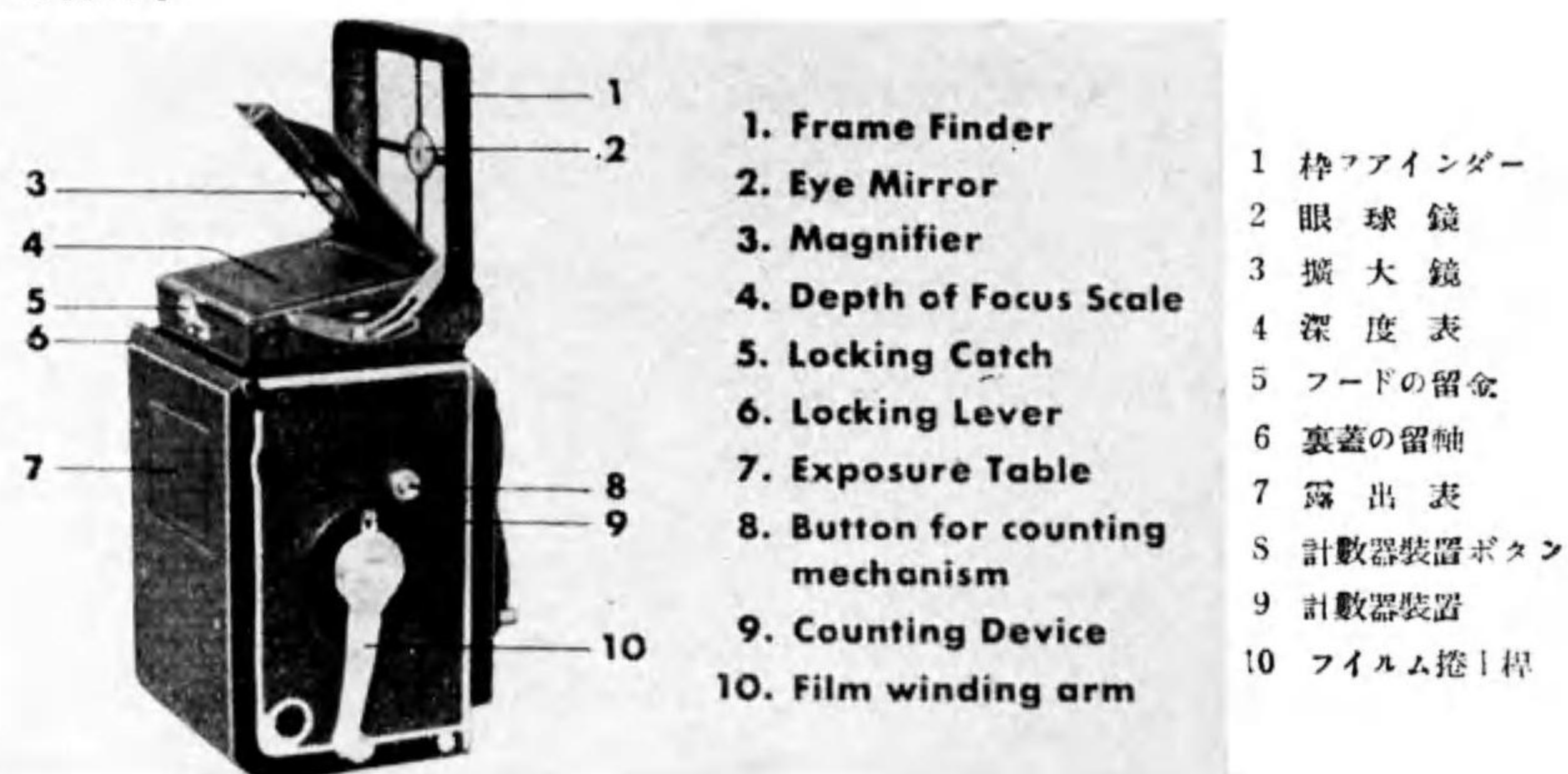
6×6判 ロライフレックスの 使用法

フォーカシングフード (Focussing Hood)

開く (5) の留金を引くと、フードは自動的に起立する。同時に拡大鏡 (3) (Magnifier) は直ちに見る位置につく。

精密に合はす そこで眼を拡大鏡に接近させて見乍らフォーカシングボタン (Focussing-Knob) (17) を廻しピントガラス (Focussing-screen) を注視する。精密にピントが合へば、拡大鏡を一寸押すと下に戻つてしまふ。

閉づる 拡大鏡を押下けてから、先づ右側の板 (Panel) を、次に左側の板を指で疊んで、又次に後部の板、最後に前方の蓋を閉ぢるのが正しい順序である。



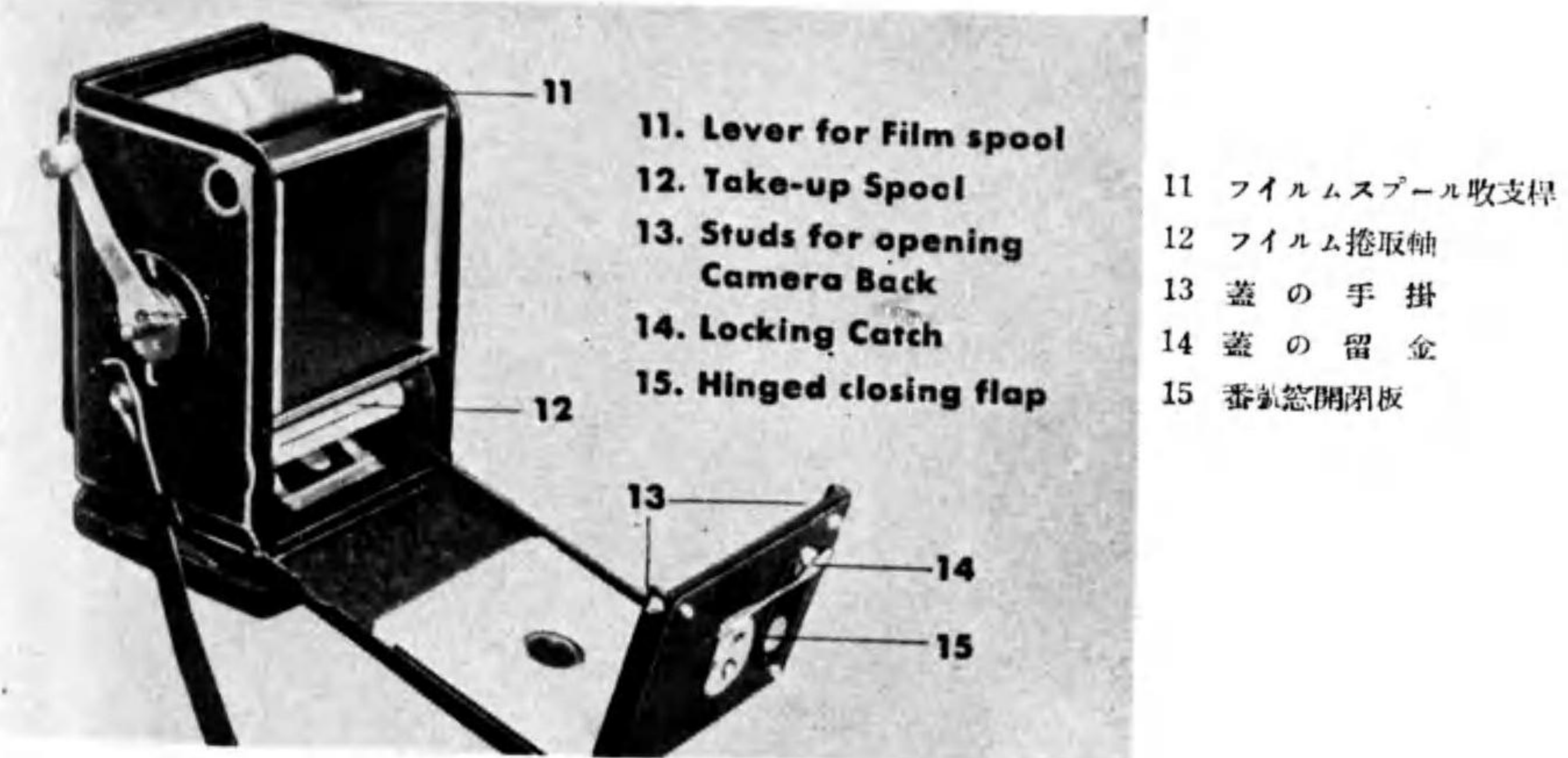
カメラを眼の高さで扱ふ時

フォーカシングフードの前蓋は枠ファインダーの役目をする。それには蓋の格子の間を指で押へて左右兩側及び後壁を立てぬやうにして留金 (5) を外せば前蓋 (1) だけが起立する。その時格子の十文字の中央にある眼球鏡 (2) に自分の眼の瞳孔が映する位置を以て物體を覗けば、枠の範囲に見える物體は正しくフィルムに撮影される部分なのである。

後 壁 (Back Panel)

開く (14) の留金を外してから、指先を (13) の手掛に置いて少しく引ばる。それで後壁は開くのである。

閉づる 反対に後壁をカメラに押し、元の如くにしてから (14) の留金で押へる。



後壁を取外す 普通には一切取外す必要はないが心得て置く事も大切である。例へばカメラを横位置の引伸機につけて利用する時、乾板用取枠装置と取換へる時、シネ・フィルム用装置“ロライキン”と取換へる時などであるが、それには後壁を充分に上まで開けてしまつて、少し左方へ押すと、右方の蝶番承座から外れて来るものである。

三脚使用 後壁には三脚穴が取つけられてある。

フィルムの交換 (Film Changing)

フィルムの装填 即ち Loading には先づ後壁を開けて、(11) の桿を押下げてからフィルムスプールを溝に収める。此時 (11) の装置は自然元の位置に復する。そこでフィルムの裏紙を引出して捲取軸に喰はせる。捲取軸を廻す爲にはハンドルを使ふと便利である。

フィルムを送る フィルム捲上用ハンドル (10) を元位置から起して前後に動かして見ると、フィルムの裏紙がぴんと張れる。勿論フィルムは正しく巻かれて決して曲らねやうにしなければならぬ。そこで後壁を閉



めてから、後壁の赤窓に1のフィルム番号が出るまで捲き続ける。そして窓の蓋は閉めてしまふ。



そこでハンドルを元の位置に納めて同時に (8) のボタンを押すと、(9) の計数器の数字は No.1 になる。最早これで撮影の準備が完了したのである。



そして一枚寫した後はハンドル (10) を起してから、最下部の位置にとまるまで降せばフィルムは一枚分進んで同時に番号は No.2 に變る。斯様に簡単に一枚づつフィルムを進める事が出来るのである。即ち一枚寫す毎に必ず此やうにハンドルを動かすのであつて、遂に No.12 を撮り終ると赤色の點が現はれる。これはフィルムが全部寫し終つた事を示すものである。

フィルムの取出し 全部寫し終つた時は更にハンドルを前後しつゝ裏紙全部を捲取軸の方に捲いてしまはな



ければならない。さうして後に初めて後壁を開くのであるが、捲取られたフィルムをカメラから外すには(16)のボタンを引出すと、スプリングによつて自然外に飛出す事になる。此フィルムの交換操作は云ふまでもなく直射日光を避け、なるべく暗い所で行ふのである。尙フィルムは捲きしめてはならぬが、又緩んで居ては光線が裏紙の間から入るから充分に注意すべきである。

シャッターに就て (Shutters)

ロライフレックス、ロライコート共にコムプーアシャッターが用ひてあるが、6×6判ロライフレックスと最新型のロライコートに於ては特殊のカバーの内に装置されており、4×4判ロライフレックス及び舊型、新型のロライコートではカバーは無く其儘外に露出して居る。こゝにはカバーを



施してある 6×6 判のロライフレックスに就て説明するのである。



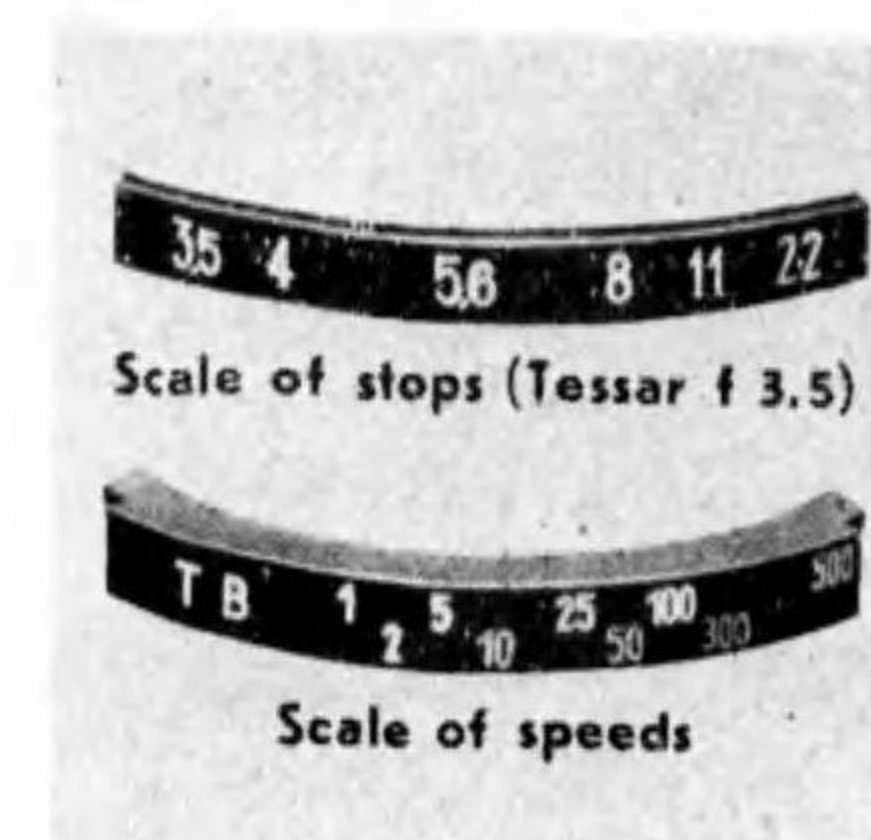
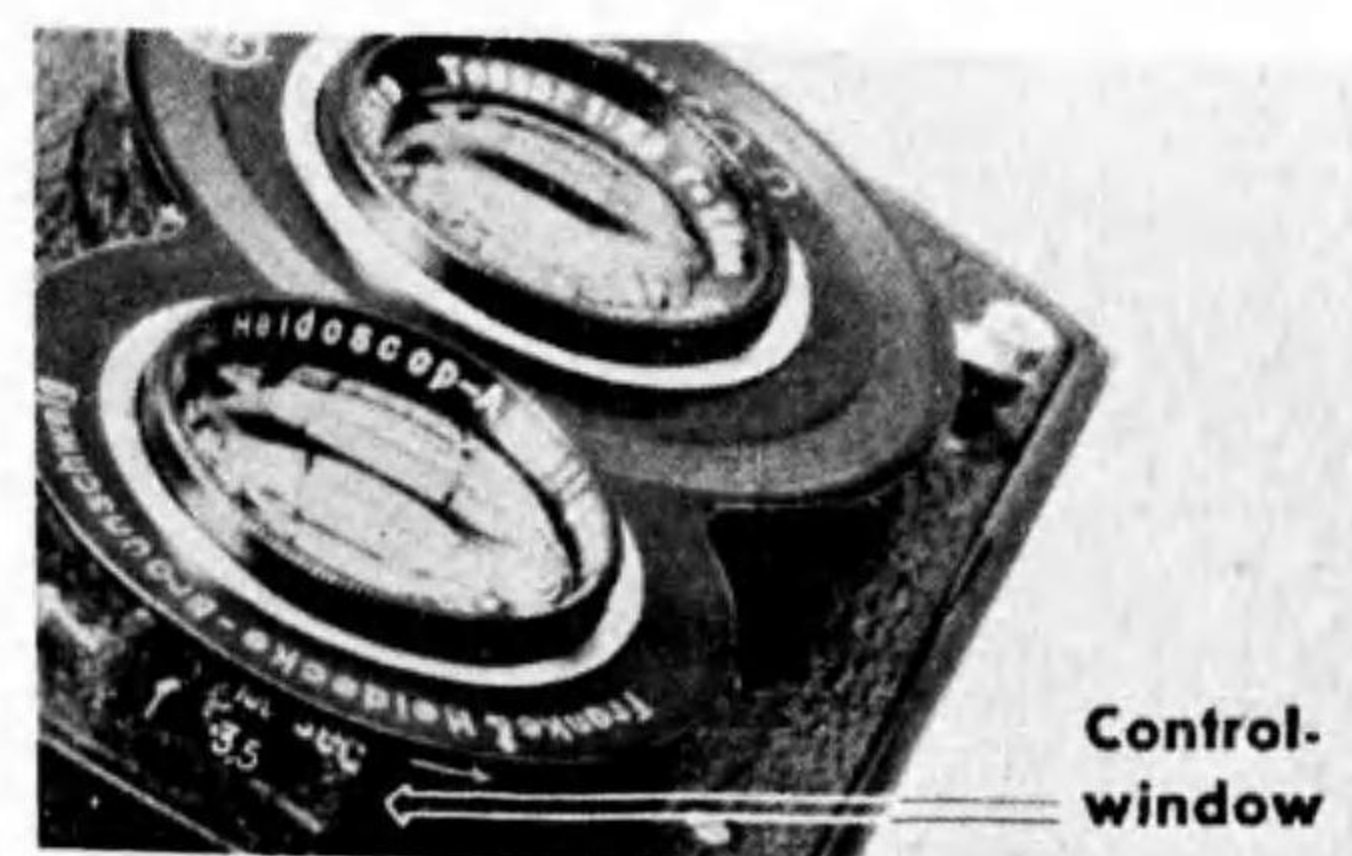
右側にあるハンドル(2)はシャッター速度を計り、左側のハンドル(1)は絞を調節する。下方ハンドル(3)はシャッターを動作せしむるものである。又カメラ上部の視窓(Control Window, Peep Window)に T 又は B が現はれて居

る時、決して此ハンドル(3)を右方に力を入れて押しはならない。此視窓に現はれるシャッター速度の内 10 と 50 と 300 とは赤文字となつて居る。それは最も多く用ひる爲と考へてよい。即ち 10 は室内又は夜の明るい街景、50 は晝間の常用速度、300 はスポーツ其他スピード撮影の爲に用ひる事が多いからである。

長いタイム撮影 即ち T で、タイム (Time exposure) の時は單にハンドル(3)を左に押せば開き、再び同様にすれば閉ぢるものである。即ち三脚を用ひて寫す場合である。

短いタイム撮影 即ち B でバルブ (Bu'b exposure) の時である。これは單にハンドル(3)を左に動かして居る間だけ開きつゞけるものである。2 秒至乃 5 秒を以て寫す時に、此 B は非常に便利なものであつて、矢張り三脚を用ひる。

速寫 即ち I (Instantaneous exposure) の時である。それは 1 秒から 1/500 秒までに選ばれて居る。此 1 から 500 までの數の一つを視窓に出して、ハンドル(3)を右に押すとシャッターのテンション(張力)が掛け



られる。そして左に押せば撮影されるのである。1/25 秒までの速度ならば手持で寫せる。然しそれより遅いシャッターでは、カメラは三脚上に置かなければならない。又シャッターの構造上 1/10 秒と 1/25 秒の間、同様に 1/300 秒と 1/500 秒の間では之等の中間速度は得られない事になつて居るから無理をしないやうに注意を要する。其他の數字の間は中間の速度が出る。更に 1/500 秒の時はテンションをかける爲に相當力を要するが、此時はなるべく指でシャッターの側面を支へ、つまむやうにして行つた方が、シャッターとカメラの取付部分の爲によい。又一度スピードを定めハンドル(3)にテンションを加へてからは最早ハンドル(2)でシャッター速度を變更してはならぬ。これはシャッターを破損する處があるからである。

露出表 はカメラの後壁に出て居るが舊製品と新製品ではフィルムの感光度の標準が漸時違つて來て居るから注意して用ひる必要がある。例へば私のカメラでは 2700 H&D であるが、其後のものは 4400 H&D になつて居り、又最近のものは一層高感光度フィルムに對するやうに改められて居る。然し何れにせよ、此露出表は速寫ケースの中に隠されて居るから日常一々の場合参考にする事はない。それよりも別に新しいものを求めて参考に携帯する方が確かと思ふ。

焦點深度表 深度表はロライ其他レフに於ては普通のカメラ程に重要な役割を持つて居ないが、兎に角参考になる事もある。これはフォーカシングフードの後壁に取り付けられて居る。云ふまでもなく最上段は當該絞の大きさ、又左右最外側の縦の欄は距離を合はすべき位置を示す。此縦と

横との相合する所に深度が讀まれるもので

例へば $f:5.6$ の絞で

7 メートルに合はせるならば

其相合する所に

何メートルから何メートル迄が實用上シャープに寫る

と云ふやう示されてゐるのである。勿論 ∞ の印は無遠(無限大 Infinity)の記號である。

自分を寫す場合 即ち Self-portraiture は此カメラのシャッターではセルフタイマーが無いから寫せない。故に別にセルフタイマーを求めて、直接リリース穴に取付け、或は針金リリースの末端に附して用ひれば目的を達するが、T と B との速度では用ひられない事は記すまでもないことである。

距離ボタンに就て 次にカメラの左側にある距離計(Distance scale) (17)に就て記さう。

此フォーカスボタンの外輪には距離が刻んであるが、 ∞ から最近距離まで距離を調節するには此ボタンを二回廻さなければならぬ。然るにボタンには ∞ から 1.7 メートルまでしか刻んでないから、最初の一回しか此ボタン上の數字は讀む爲に用ひられない。レフであるからそれで済むが、普通カメラならば最大の缺點と云ふ事になる。御承知の如くレフでは此部分で距離を合はす事は殆んど無く、すべてピントグラス上で合はせるからである。

プロクサー 近距離用補助レンズ 即ちロライ用のプロクサー(Proxar)

を用ひる時は1メートルよりも近く寫せるのであるが、無論さうなると距離ボタンの價値は全く無くなる。

そして専らピントグラスに依る。補助レンズに就ては別項に詳説してあるからこゝでは省いて置く。

ロライフレックス 4×4判の撮影に就て

4×4判は獨乙ではスポーツ用、夜景用及舞臺用として作られたものである事は前に述べた。登山家其他スポーツマンに便利の様小型にし、夜間に都合よいやう、 $f:28$ を用ひてある。4×4判のロライフレックスは大體に於て6×6判を小さくしたやうなものであるが、多少構造が違つて居る。

今詳細な研究は後に譲るとして相異の目立つ所を求めて見るならば、

(1) 4×4判には巾35ミリ、即ちライカ判フィルムを用ひる道具のない事

(2) ピントグラスの一角に水準器が無い事

(3) コムプーァシャッターが被覆されず、普通の外見で露出されてある事

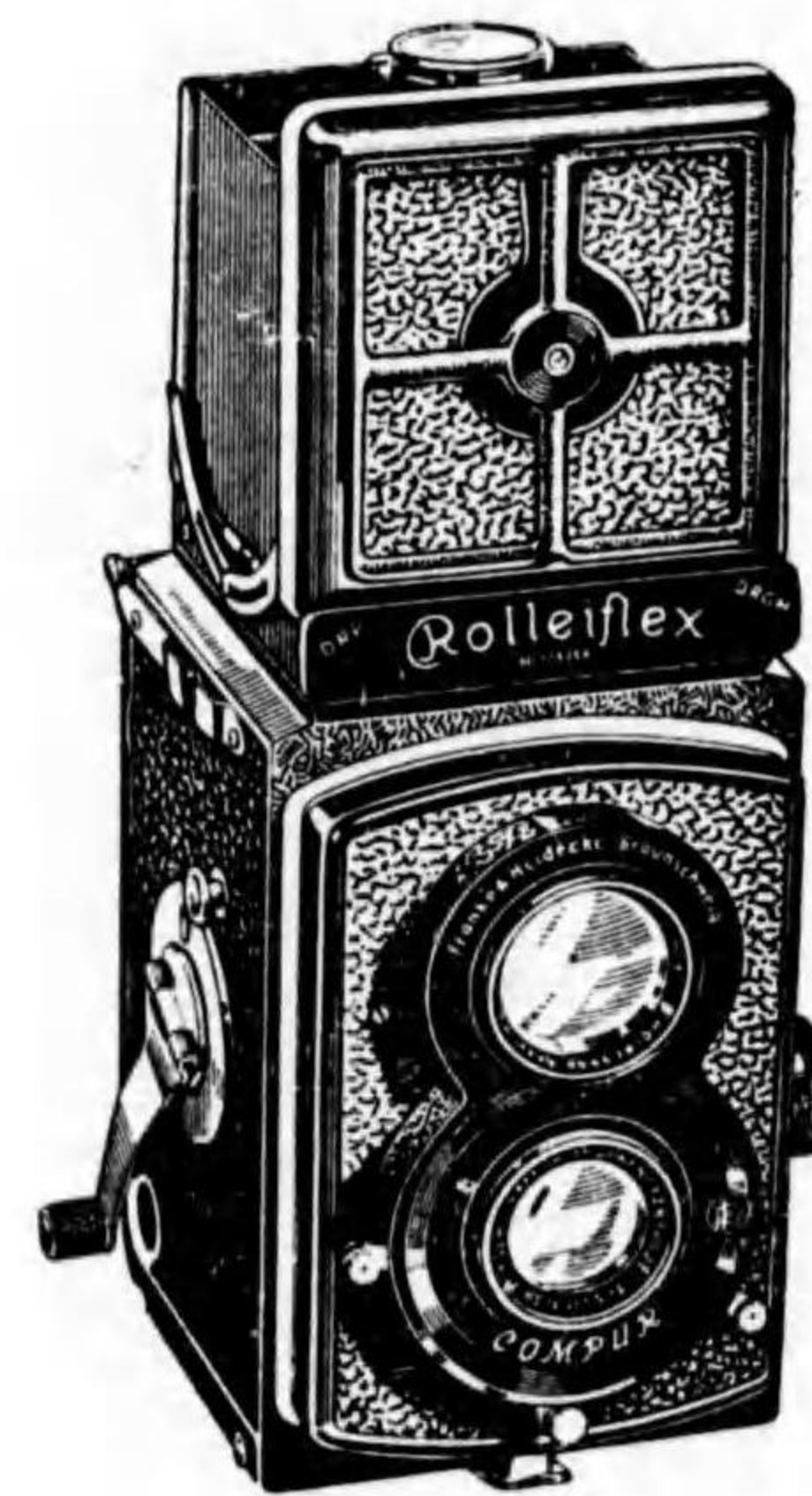
(4) シャッターを作用させるレヴァの位置が6×6判の如くシャッターの下方中央部になくてカメラの右方にある事

(5) $f:28$ 付きである事

などが違つて居る。其他は殆んど變りない。



さて先づ此4×4判と云ふ**サイズ**から述べて見やう。



此カメラにはヴェスト判のロール・フィルム即ち 127 番フィルムと一般に稱せられて居る 8 枚撮りのフィルムに 12 枚の畫を作るのであるから、自然サイズは 4×4 センチ正方形の畫となり、結局 12 枚撮るものであるが、幾分長目のフィルムを用ひるならば、13 枚は撮れる。(例、富士フィルム) 尤も此場合最後の第 13 枚目はカメラの計數器には現はれては來なく、ただレヴァを便りにして行ふものである。



そこで此サイズが單に 6×6 判より僅か小さいと云ふ位に思つて居るならば非常な間違ひである事を使用した經驗がある者ならば必ず感じて居る事であらう。

先づ 4×4 判と 6×6 判とを密着焼にして並べて眺めるならば僅か 2 センチづゝ畫が縦横に相違して居るだけと思つても、被寫體が如何に大きさが違ふかと云ふ事が判る。4×4 判では見られない物も、6×6 判では實によく見える。想像以外に明瞭のやうな氣がするのである。そこで 4×4 判はアルバムに貼つて見るには既に適しく、是非共引伸をすべきものである事が感じられる。それに引かへて 6×6 判はアルバムに貼るには未だ都合がよい大きさであり、密着焼のまま人に贈つても必ず喜ばれる程に見榮のするものである。



さて今度は**原板の性質**から見る事にしよう。本書の挿畫を見ても御判り

の通り、多くの讀者諸君と違つて、私は常に 4×4 判を最も多く用ひて居るものであるが、4×4 判を用ひる時と 6×6 判を用ひる時と、最初から心構へが全く同じではないのである。

即ち

4×4 判では 終始細心の注意が要るが

6×6 判では まことに氣が樂である。

私の日頃の經驗から 4×4 判を取扱ふ時は

出来る限りピントを鮮銳に

出来得る限り粒子を粗大にしないやう。

及ぶ限り塵や塵を附けないやうにして居るのである。

それには

第一に**微粒子フィルム**を求めらるやうにしなければならぬ。例へば現在私は通常次の如きものを求めて居るが、勿論此他の製品が劣つて居ると云ふのではない。たゞ私の使ひ慣れて居る爲に、なるべく手慣れた性質のものを選ぶと云ふ意味で茲に掲げて見る事にするのである。

- (1) さくら パン F フィルム——此のフィルムは DIN 17 位であつて遅くもなし、早過ぎもせぬ手頃のもので粒子も申し分ない。
- (2) 富士ネオ パン フィルム——DIN 18 と云はれるが、私はパン F と全く同じ心持で使つて居る。
- (3) オリエンタル パン X フィルム——DIN 20 これは粒子も細かく感光度も高い。従つて常用に供してゐる。

- (4) アグファ イゾパンF — DIN 17 舶來品で私には最も良いフィルムと思はれるものである。國産の間に挟んで時々用ひて居る。
- (5) コダック パンアトミック — DIN 16, 力のある畫を確實に得るこれも舶來品として素晴らしいフィルムである。パンアトミックがDIN 16の速度である事は本邦では發表されて居ないが獨乙のコダック支社では公表して居る。
- (9) さくら USS フィルム — DIN 20, これも私の常用フィルムである。

此6種は私が常用するパングロ級フィルムであるが、此外にパングロの必要ない時、つまり赤フィルターを使ふ考へを持たぬ時などにはクローム級として下記を選んで居る。

- (1) さくらクローム・スペシャル
- (2) 富士ネオクローム — DIN 13
- (3) オリエンタル・クローム X
- (4) アグファ・イゾクローム — DIN 18

此外内外の製品があるが、稀に用ひるものであるから記さないで置く。

然し次の如く粒子と云ふ事を念頭に置いて細心な撮影を行つて居る場合のみであるとは云へない。例へば夜間撮影や舞臺撮影など暗い所でなるべくよく感光させやうとか、或は幸と餘り暗くなければ或る程度の小絞か早いシャッターを用ひやうなどと考へつゝ人工光線下の撮影に出掛ける場合には、私は下記のフィルムを求めて行く。數から云つて私の一番多く用ひるものから順次に記すならば、現在の市販品を基として

- (1) さくら USS パン フィルム DIN 20
- (2) アグファ ISS フィルム DIN 20
- (3) オリエンタル パン X フィルム DIN 20
- (4) コダック SS パン フィルム DIN 19 (伯林コダック社の發表)
- (5) 日寫ハイパーパン フィルム DIN 19

などである。同じく DIN 20 と稱されて居てもそれぞれ特性があつて縁に感光度の高いものや、赤に恐ろしく速いものなどがあるが、その分類はここでは略して置く。又 19 と云つても 20 に比して感光度が低いなどは實用上殆んど區別なく、大體の事である。之等を取扱ふ時にも勿論なるべく粒子を細かくと注意しつゝ行ふ。すべて充分に感光させる事を第一としてかゝる方がよいと思ふ。



斯うした心で先づフィルムの方から細心の注意でかゝつてから露出であるが、露出は云ふまでもなく適度を望むが、適度と云ふ事はむづかしい問題である。こゝが適度と思ふ時更らに一寸餘計に與へるやうに心がける。つまり適度を目標として少しく過度に傾き、又露出不足には少しでも陥らぬやう注意するのである。これが露出に對する秘訣であるがさうして寫した以上今度は現像の注意である。



現像は微粒子現像液 (私は精々 D-76 處方までの範圍でそれ以上餘りや

かましく考へて居ない)で行ふか、又はアミドルの如きを以て簡単に済ませるが、さりとて現像液の如何は問はず、決して現像時間の延長即ち後に云ふ押すと云ふ事をしない。押す事は一番微粒子に上る事を阻止するものである。今微粒子フィルムを用ひて寫し、微粒子現像液を用ひて現像しても押す事によつて非常に粒子を荒びさせてしまう事がよくあるものである。これでは何んにもならないが、反對に如何なる平凡な處方でも露出がよく現像の手心がよければ相當の微粒子に上るものである。試みに一本5錢の硝子管入現像薬を以て私は相當微粒子に仕上げる事が出来る。況してや微粒子フィルムを用ひ、微粒子現像液を以て細心なる注意の下に行へば必ず驚くばかりに成功するものであると云へる。



斯う云ふ工合に4×4判の方では一切細心な注意を以てかゝらなければならぬのであつて、それはライカフィルムの現像や3×4判(ヴェスト半裁判)と共に所謂小形フィルム(Klein film)に對する當然の手段であつて、これは相當寫眞技術の心得を持つた人でなければ出来ない事と云はなければならない。昨日今日始めたと云ふ初歩の寫眞家には困難であり、又不可能と云はぬまでも成功率は低い事は確實である。



その點に於て6×6判を見ると樂なものである。即ち同じ物を寫しても被寫體が原板中には大きく寫つて居るから、引伸の場合の倍率が少なくて

すむ。従つて細かい線も亂れず、像も鮮鋭で又引伸の倍率に於ても小さくて済むから、何の位ひ得か判らない。さう云ふ譯で私は自分では4×4判を用ひて居乍ら、他には6×6判を常に御奨めして居るのである。

以上を豫備知識として置いて次にロライフレックスカメラに就て話を進めやうと思ふ。

更に改良を要する點

以上の如く之等ロライフレックス及びコートの完璧を誇りつゝある間に又、其缺ける所が無いかな否かを一應考慮する必要もあると思ふ。物は徒らに其特徴のみを過信してはならぬ。如何なるものにも缺點の無いものはない。たゞ其程度が少なければ成功であると考へるに過ぎないと思ふのである。

事實此位優れたロライ各機に就ても各々特長もあれば缺點も相當ある。それは使つて居る間に、自然考へられて來るものであるが、今日の4×4判のロライフレックス 6×6判のロライフレックス及び6×6判のロライコートの此三種を見ても、彼れにある装置が之れに缺け、又これに有り乍ら彼れに不足して居り、若し皆同じく其特長のみを互に合はしたならば都合がよいと思ふのである。

以下に日常氣のついて居る事のみを掲げるが、これは型録で比較するだけでは判らぬ事であつて、多少とも私は各種を用ひた經驗からして考へつくものである。従つて今自分の持つ一種だけに於て充分使ひ慣れて居る人では、あながち缺點として不備を感じる程の事でもない。然し一應は知つて置いて損になる事ではない。

4×4判ロライフレックス

(1) シャッターを作用させる最も大切なハンドルが、6×6判ロライ

フレックス及びロライコート同様の位置に欲しい。4×4判では右手で操作し左手でフォーカスを合はせる様に出来てゐるから止むを得ないが、

(2) シャッターを動作させる時、指先が深く此ハンドルにかゝつて居る時は、大概の場合テンションの突起の急速に戻る装置との間に指先を喰はれる。而して喰はれて居る間はシャッター瓣が開いて居る爲に、其一枚は失敗に歸する。6×6判の二機に於ては此心配は全然ない。

(3) フォーカスを合はす爲にレンズ座を前方へ繰出す車は左側にある全部繰出すまでには此車が二回轉弱廻るが、その周圍に刻まれたメーターで距離を示す數字は、最初の一回だけにしか役に立たず。二回目には讀んでも無効である。

勿論レフでは、車の上に刻まれた文字板を見てフォーカスを合はす事は普通無い筈であるが、無理に缺點を求めればこの點に未だ改良の餘地がある。

(4) ピントグラスを仔細に見る爲に取付けられて居る擴大鏡が、スプリングに依り上方に固定される力が如何にも弱い。

私共日常眼鏡をかけたまゝで覗く者にとつて、實に不備であつて、必ず眼鏡の枠によつて常に下方に容易に押し下げられ、再び原位置にはね上げる力がない。

(5) 又フィルムの最初のNo.1の文字を見る爲に具へられた赤窓のセルロイドが過度に暗過ぎる。

此カメラこそは一々窓から番號を讀むものではなく最初だけの事である上に、遮光用の安全蓋まで取付けてある以上、あれ程濃い赤セルロイドを

用ひる必要は少しもなく、黄色か淡い緑色でよい筈である。

私は自己のカメラでは此濃赤のセルロイドを焼却して、其代りに明るい橙色のセルロイドに取換へてあるが、蓋を用ひずともスーパーパンフィルムにさへ少しも感光の故障は見て居ない。

(6) 4×4判こそ活動フィルムを用ひる爲には適当な筈なのに何故それが造れないのか不思議でならない。

6×6判の中に小範囲を求めるよりも4×4判の中に求めた方が合理的な事は當然と信ずる。ライカ、コンタックス等は50ミリ、4×4判は60ミリのレンズを有する此4×4判に造るべきものである。然るにその無いと云ふ譯を私は斯う考へる。即ちライカに用ひる如く36枚を寫す其儘ではマガジンが必然的に太くて、此カメラに入らないからである。

私は無理と36枚にしなくともよいと思ふ。さうすれば細くなるから樂にマガジンが出来る。現に私は簡單なるマスクの一個と巻取軸を35ミリに狭めたものを以て、4×4判の小形ロライフレックスに時々シネフィルムを用ひて居る。

(7) セルフタイマーの無い事は私は大いに不満である。

(8) フォーカシングフードはロライフレックスはロライコートに比して不便である。

つまりこのフォーカシングフードの立て疊みがロライコート同様に簡易化されるとよいと思ふ。

以上の點が私の不満である。

6×6 判ロライフレックス

(1) 大形ロライフレックスでは餘り不備はない。然しシャッターが小形ロライと違つて外箱の内部に抱込まれて居る事は改良かも知れないが、私には不足と思へる。即ち此大形ロライでは、必ず絞と速度とは上部の小形の角窓中に讀まねばならない事になつて居る。従つて少し暗い所では非常に見にくい。

例へば夜間の街景などの時や、劇場の暗い観客席から舞臺を寫すと云ふ時などには少なからぬ困難を感じるものであるが、4×4判の小形ロライでは普通のコムプーシャッターのまゝであるから、光に照らして見て容易に讀める。

(2) 小形及び大型ロライフレックスはフォーカス用の車を左側に有する事は何んと云つても感心出来ない。此二機では右側にフィルム自動捲上用のハンドル装置を有する爲に止むなくフォーカス車を左側に持つて行つたのであるから、左手でフォーカスを合はせ右手でシャッターを動作する次第であるが、ロライコートだけは手の扱ひ方が全く此反對になつて居る實際にカメラを扱つて見る時、左手でカメラを下から支へ、その遊びつゝある指先はシャッターを動作する。而して右手でフォーカス車を返す、其扱ひ工合のよい事は當然である事が判らう。此點ロライコートの方は遙かに新しい考案であるだけに一步進んで居る。假令大形小形ロライフレックスに慣れたとは云へ、ロライコートの便利さに到底及ばない事は云ふまでもない。

(3) レンズの交換式でない事は各機共に不備ではあるがこれは最初から別問題として置く。

(4) 6×6 判に 75 ミリ焦点のレンズは比較的廣角度であつて、都合のよい事もあるが目的物に正しく方向を向けられ、範圍を決するに易いレフに於ては、遙かに長焦点レンズを用ひても、決して使ひにくい事はないと思ふ。私は寧ろ 80 ミリ以上 105 ミリ迄のものを別に附して賣出すならば、非常に喜ぶ人もある事と思つて居るのである。

(5) 拡大鏡を起した場合スプリングの腰の弱い事も 4×4 判に於けると同様であるから、もつと強くして貰ひたい。

(6) 此機も赤窓が濃くて暗過ぎる。其必要のない事は 4×4 判にのべたと同様であり、又

(7) セルフタイマーの無い事も私などは不満の第一である。

(8) 小型ロライは $f:2.8$ 付までであるが、大型では $f:3.5$ 止りである。

(9) フォーカシングフードはロライコートに比して不便である。やはりフォーカシングフードはロライコート同様に簡単な取扱のものに改めて貰ひたい。

6×6 判ロライコート

獨乙本國では最近別項に掲げたやうな新型が出来たが、目下尙入荷が遅れて居り、又入荷しても極めて小數であらうから、主として曩に入荷した新型であるフィルムの自動停止装置付、所謂 II 型を基として記す事にする。

(1) ロライコートは今日のあらゆるレフレックス中最も使ひよいもの



・湯本・

である事は私として断言するに少しも憚らぬものであるが、たゞレンズで多少不満を感じる。

ロライコート級に於てはテッサーを附しない契約が會社同志に出来てゐるものか、或はロライフレックスとの等級を判然とする爲に行ふものかは知らないが、これ程巧妙な機能を有するレフが他にないと考へられて居るのに、たゞレンズに於て幾分でも不満のある事は残念でならない。

勿論アマチュアとして平常の使用範囲の仕事ではトリオターである事とテッサーであると云ふ事とに、大して違ひを認めないが此點は何んとしても不満である。

(2) ロライコートは今迄カメラ前面上部のカメラ名文字板の所が貧弱であつたが、今度出来た未入荷の最新型では私の不満とした此部分が全く面目一新したから申し分はないが、現在迄の品では貧弱である。

ロライコートでは缺點が非常に少なく無理に考へてもこれ以上を擧げる場所がない。又以上の2點もとりたてゝそれが缺點と云ふべき程の事でもない。つまりロライコートは三者の中で最も理想的に出来てゐるカメラと云ふてよいと思ふ。



さて初めにも云つた如く如何なるものにも満點と云ふべきものは無い事を考へるならば、物は或る程度で我慢しなければならぬ。さもなくば自ら氣の濟むまでに改良するより外はない。

此位に完全なロライフレックスやロライコートカメラに於てさへ此迄り

であるから、低級カメラで色々文句を云ひ非難を加へる方が間違つて居ると思ふ。否ロライフレックスのみではない。コンタックスにせよ、スーパーセミにせよ、スーパーシックスにせよライカにせよ持つて見ると何かしらの不満が立所に感じられるものである。今日最高級カメラと云はれて居るコンクフレックスにしても常に横位置の畫しか撮れない事などを見ても判ると思ふ。

ロライ用附屬品

(1) **フィルター** 圖に見るものは舶來品で天部だけのフィルター、即ち空フィルターであるが、此外普通のフィルターとして、獨乙製の **PAN ORTHO** があり、國產品としては **WALZ, ECHT** 製品と云ふ立派なものがある。6×6判, 4×4判兼用。

圖の硝子部分を取除いたと同様な外觀と構造を持つ**レンズフード**が矢張りワルツ, エヒト製品として出來てゐる。此フードの内部に常にフィルターを固定して置く事が出来る。

(2) **近距離用補助レンズ** 圖に見るものは其一種で獨乙製の **PROXA R** であつて、縁は茶色に塗つてある。國產品として前記のワルツ, エヒト等があり、縁は黒色になつてゐる。1號と2號とがあるが、これと共に用ひる **ROLLEIPAR** レンズは圖には出てゐないが別章に掲げてある。6×6判, 4×4判兼用。

(3) **双眼寫真用雲臺** は二度の撮影を以て浮出即ち立體寫真を作る爲の用具である。6×6判, 4×4判, 兼用。

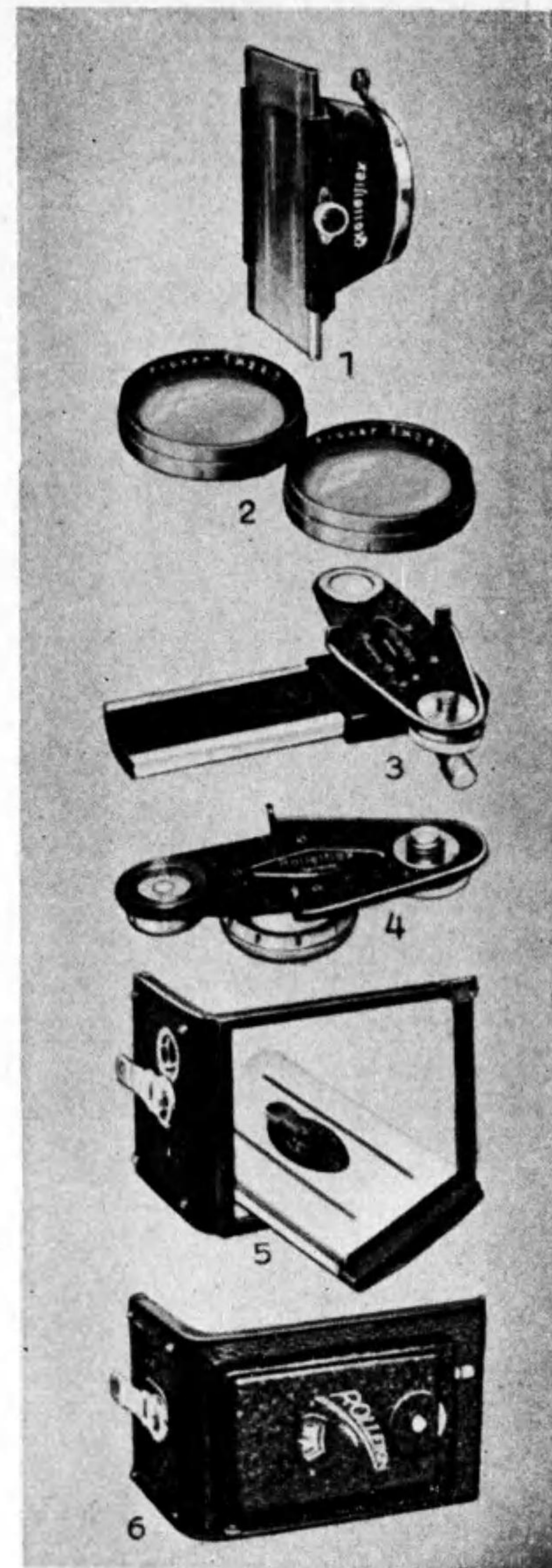
(4) **全景寫真用雲臺** はカメラを此用具上にのせてカメラを一廻りして10枚の撮影を以てぐるりと自分の周囲の景を一廻り撮る爲に用ひる便利なもので、地形等の撮影や、山岳寫真家などに喜ばれるものである。6×6判, 4×4判兼用。

(5) **乾板用具取枠** を用ひて乾板を使用する時のカメラ後壁と取枠三

枚とによつて成るもので、普通寫眞の如くピントガラスは必要としないから、これは附屬せずに入荷して居るが、向ふにはある。これは勿論4×4判用と6×6判用とがある。6×6判にはロライフレックス, ロライコート用がある。

(6) **35ミリフィルム用具** これは6×6判カメラのみに出來て居るもので、ロライフレックスにもロライコートにもある。特殊のフィルムマガジンが二個附屬して居る。但し4×4判のものはない。

(7) **アイリスストップ** これは後章に語る。



一米以内の撮影と 近距離用補助レンズ

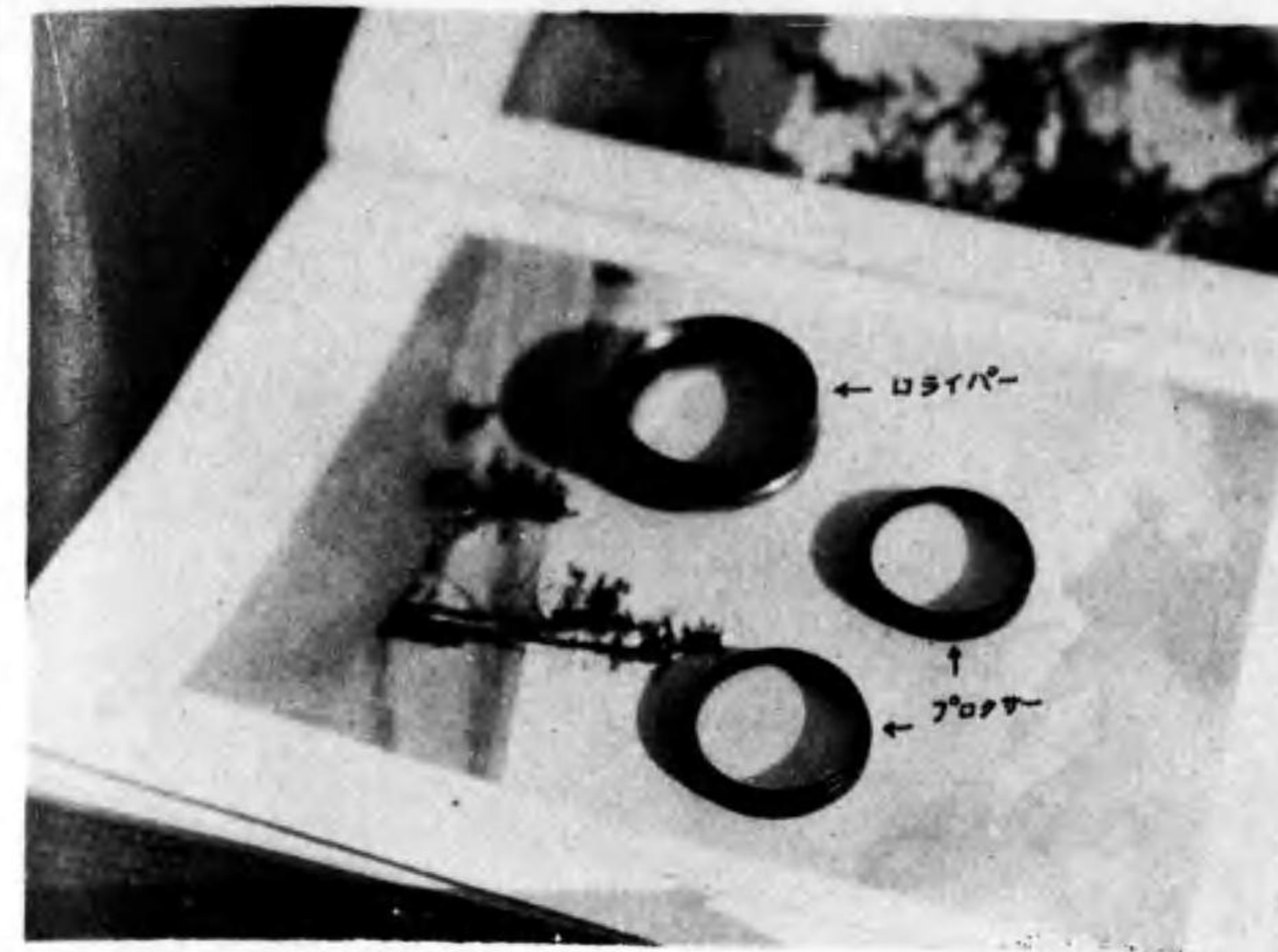
レフレックスの最も大なる特長は至極近距離が容易に且つ正確に寫せる事である。此點に於ては如何に高級機と云つても他に及ぶものはない。

實際吾々が寫眞として眺むる場合に近距離の物體程力があるのであつて殊に之れを實證した例としては本書の直前に出版した“イコフレックスの寫し方”の卷末に多數掲げた獨乙アマチュアの傑作集によつても充分に判るところであるが、幸に御手許に同書があれば一應御參照願ひたい。否、それに及ぶまでもなく、本書中の挿畫とした拙作によつても充分御了解が得られやう。

寫眞には一般に近景が大なる役割をするが、段々接近し來つて1米となり更に1/2米と云ふ工合に接近して來ると、私共は日常見遁し勝であつた物の新しい感覺に接して驚くやうな場合が屢々である。

例へば百合の花を寫すならば其細部が如何に巧みな構造になつて居るか造化の神技を今更の如く知るであらう。その寫眞の美しさも亦如實に感じられて來る。

近い物體を寫す時は其接近の度が益々加はるにつれて、物體の一點と其前後の距離の相違による差が目立つて來るものである。つまり遠方を寫した時と同じ絞であつても非常に焦點深度が淺くなつて通常考へなかつた奇妙なほけさへ現はれて見える。つまり目標のみを鮮かにし、背景其他二次



的存在の物體を取除いて撮影の目的を一層鮮明にする事になる。小絞又は大絞の適當なる利用によつて、實に思ふ存分の畫を作る事になるから研究上の興味は想像以外に大きい。

私は若し未だ補助レンズを持たぬと云ふ方がロライフレックス又はロライコートの使用家の間にあるならば、これ無くしては眞に此優秀カメラの價値も判らないであらうと申す次第である。市販品には後に記す如く1號と2號とがあるが、最小限度の設備として2號の一組だけでも持つ事をおすすめする。



ロライフレックス、ロライコート共皆レンズの口径は23.5ミリの同一になつて居るから口径による選擇の必要はなく、たゞ度の弱い1號と、強い2號とがあつて、勿論強い方が一層接近して寫せる事を承知すればよろしい。尙國産品と舶來品とがあるが、少しも品質に於て違はぬ上に代價が舶來品では倍以上の高價であるから國産品で結構である。のみならず舶來品は最早入荷されない。參考までに國産製品を掲げて見る。

ロライフレックス ———— 4×4判用
6×6判用

ロライコート ———— 6×6判用

A 近距離用補助レンズ (Proxar)

1 號 (20—40吋)用 2 個 1 組…………… ¥ 12.

2 號 (13—20吋)用 2 個 1 組…………… ¥ 12.

B 視野匡正用レンズ (Rolleipar)

1 號 用 1 個…………… ¥ 10.

2 號 用 1 個…………… ¥ 10.

上記の品

A — 2 個 } 各號 1 組につきケース入り…………… ¥ 22.
B — 1 個 }

云ふまでもなく二眼レフである以上、上下双方のレンズに同性質のアタッチメントを各々取つけて使用しなければならないが、これは普通のカメラを使ひつけた人々や、一眼レフの所有者には二倍の費用で無駄なやうな気がする。しかのみならず上方レンズだけには更にBに掲げた視野匡正用レンズのロライパーを必ず一個加へなければならないから、撮影に際しては必ず三個の附屬物（前述の如く一組になつてゐる）を用ひなければならないのは致し方ない。

ロライパーレンズと云ふものは御存知のない方もあらうが、上方レンズの光軸を下方に曲けて、下方レンズの見るところと合致させる爲に用ひるものであつて、下方レンズがフィルムの中央に映し出して居る物體を、上

方レンズもピントガラスの中央に眺めさせる役割をつとめる。従つてこれを用ひなければピントガラス上の見る範圍と、下方で撮影される寫眞の範圍とが天地で違ひを生じ失敗を來す處がある。尤も慣れた人ならばそれを承知で加減して見るから強ひて用ひなければならぬと云ふ譯でもない。

ロライパーレンズは、必ず補助レンズをかけた上に更に附加するものであつて、常に上方レンズのみに用ひ、決して下方のレンズには用ひない。

又ロライパーレンズのはめ方には一定の方法がある。即ち座金に←→印のある方が、必ずカメラの頂點の位置に置かれなければならないものである。

然し此外の用法として、此プロクサーは上下各レンズに1個づゝ加へるのみならず、2枚又は3枚づゝ加へる事によつて一層度を強くして、驚ろくべき至近距離を寫す事も出来るので極めて興味が多いものである。

又ロライパーレンズは安いものではなく、常に用のない方もあるから持つて居らぬ方もあると思ふが、此様な場合にたゞプロクサー補助レンズのみでも畫の天地のズレ、即ち上の鏡で見る像と下の實地撮影される像との天地境界の相違は、1號プロクサーを上下レンズに附した場合には3ミリの狂ひ、2號を上下レンズに附した場合に6ミリの狂ひを生ずる事を念頭において置けば、さう苦勞せずに正しい範圍内に被寫體を納める事が出来る。即ち上像の中央即ち對角線に當るところの像を目標とすれば、下像では此目標が上記の通り3ミリ或は6ミリ對角線のところより下に低く位置せしむる事にすればよいのである。

菊



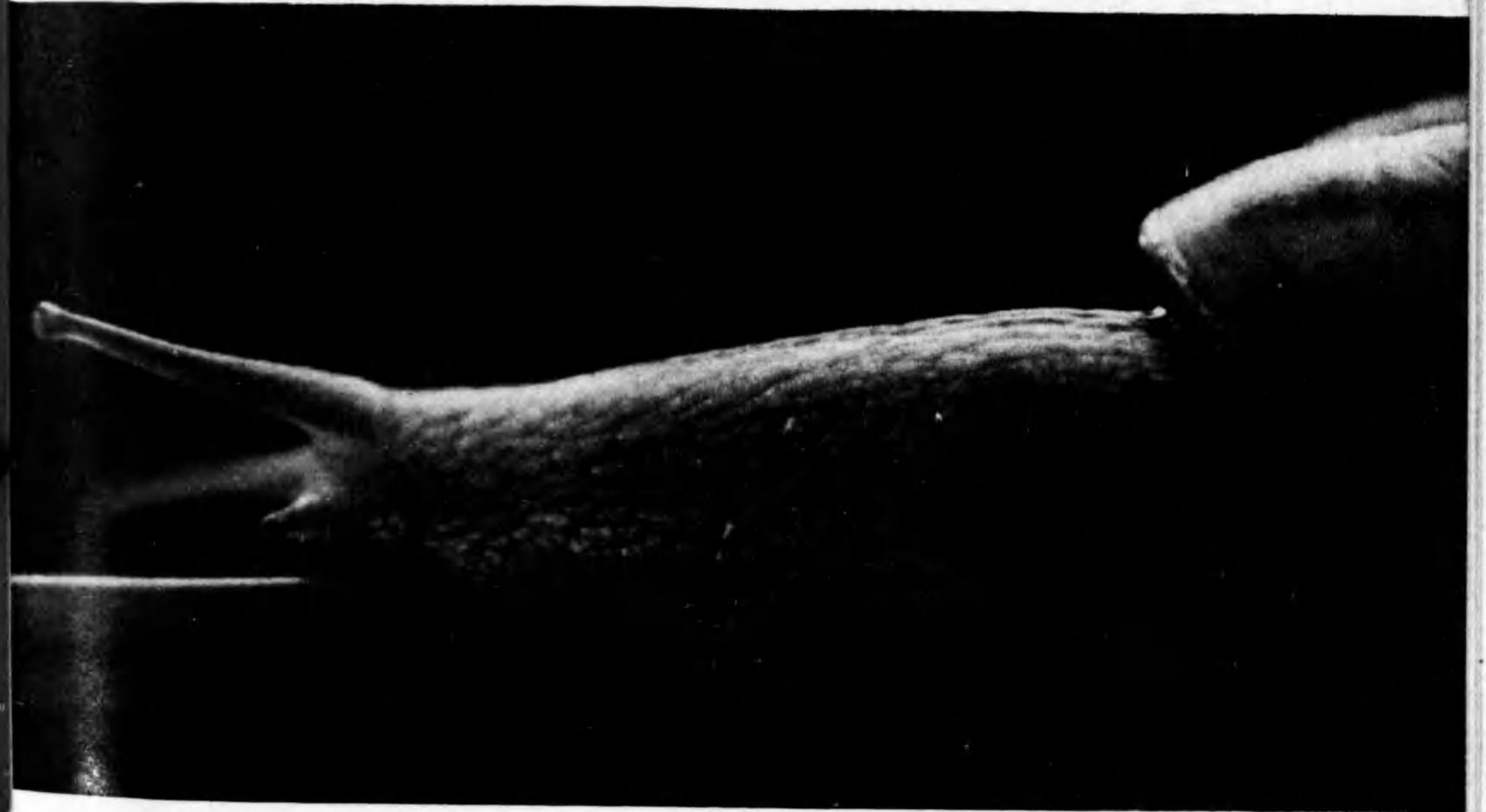
ロライフレックスの上玉に 2 號接寫レンズ (プロクサー) 2 號ロライパー (パララックス除去用) レンズを附し, 下玉に同接寫レンズを附して菊を接寫する實際を示す爲に掲げる。適當なる背景と光とに注意して寫せば, 斷じて失敗はない。これ程の接寫を爲す場合には, 光線上止むを得ぬ場合の外は $f:8$ 以上の大口徑は用ひない方がよいと思ふ。又光線状態が悪く, 被寫體それ自身の丸味の甚しいものなどの場合には, 三脚を使用して一層小絞で寫す方がよいと思ふ。



かたつむり

残暑も幾分和らぎ、二三日來凌ぎよくなつて來た。私は常の如く庭に椅子を持出して執筆して居ると、傍らの櫻の枝に蝸牛が匍ひ上つて行くのを見つけた。

最初先づ、補助レンズを用ひず、ロライを一杯前方に繰出して寫した。それを實物大に引伸して見た。原板には非常に小さく寫つて居る蝸牛そのものも、此程度に引伸して少しも見苦しくない。但し此撮影に際して感じた事は、彼の通り遅い行動の蟲とは云へ、中々1/10秒などの緩速度シャッターなど切れぬ程速い行動で進む事である。従つて1/25秒(絞f:8)を以てして漸く寫しとめた譯である。次に此蟲を技からベランダの手擦に移して匍はせ、2號プロクサーを上下レンズに各二個づゝ重ねて速なる運動に相當の困難を感じつゝ寫したのである。天地の餘分は切捨て左右は原板のままに近い範圍を利用した。

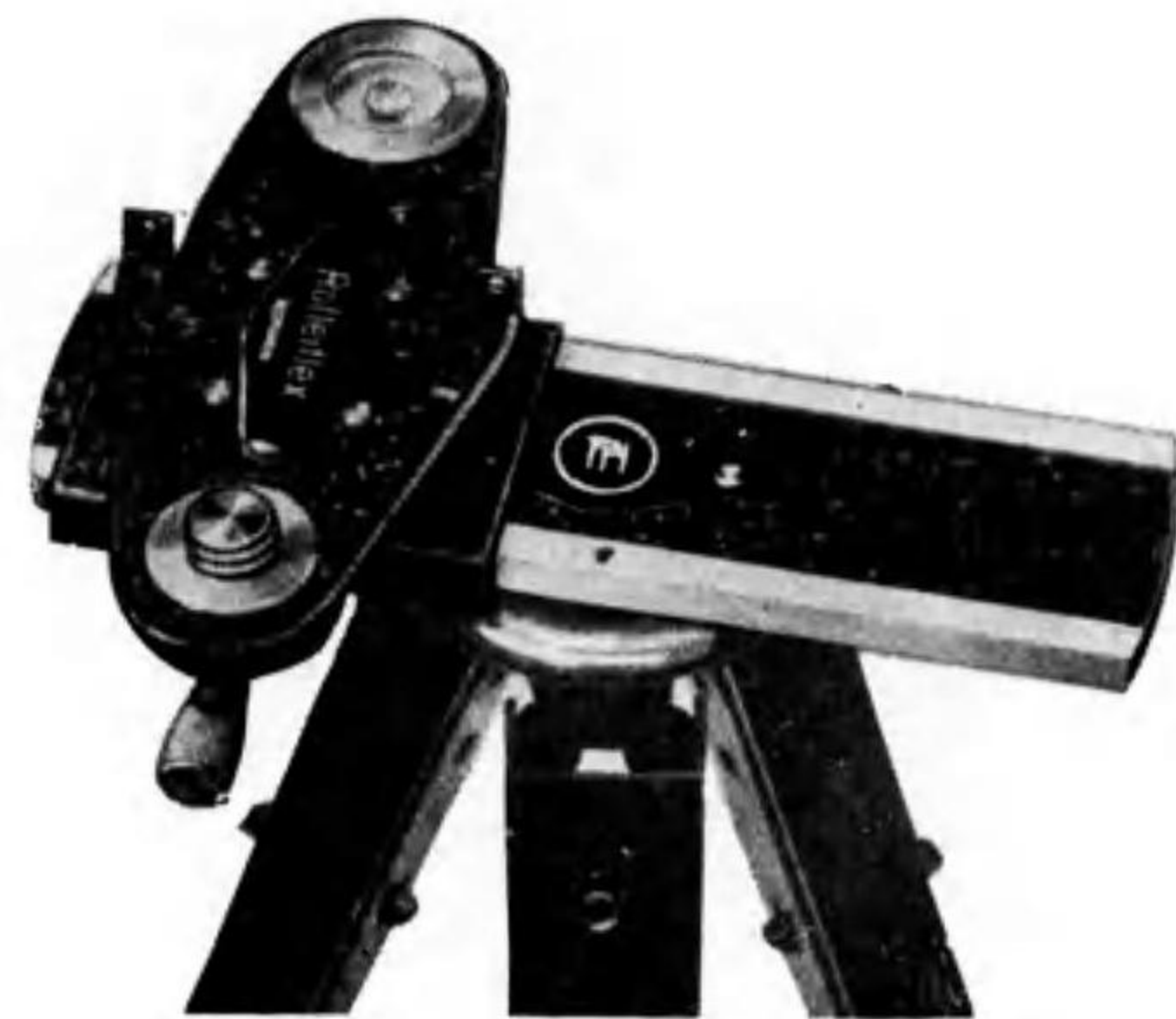


双眼寫眞装置

双眼寫眞——浮出寫眞——即ちステレオ (Stereo) 寫眞をロライフレックス及びロライコートによつて作る附屬の装置としてステレオ・フィットメント (Stereo-Fitment) と云ふものが出来てゐる。其構造は別項のパノラマ装置と酷似して居る。



然し此用具はステレオ撮影用としては、最も簡單且つ原始的なもので、第一の缺點としては左右一組の寫眞を一回の撮影で作り得ない事である。従つて、必ずカメラを左右に移動して二回の撮影を以てしなければならない爲に、動體は寫し得ないのである。普通のステレオカメラでは二個のレ

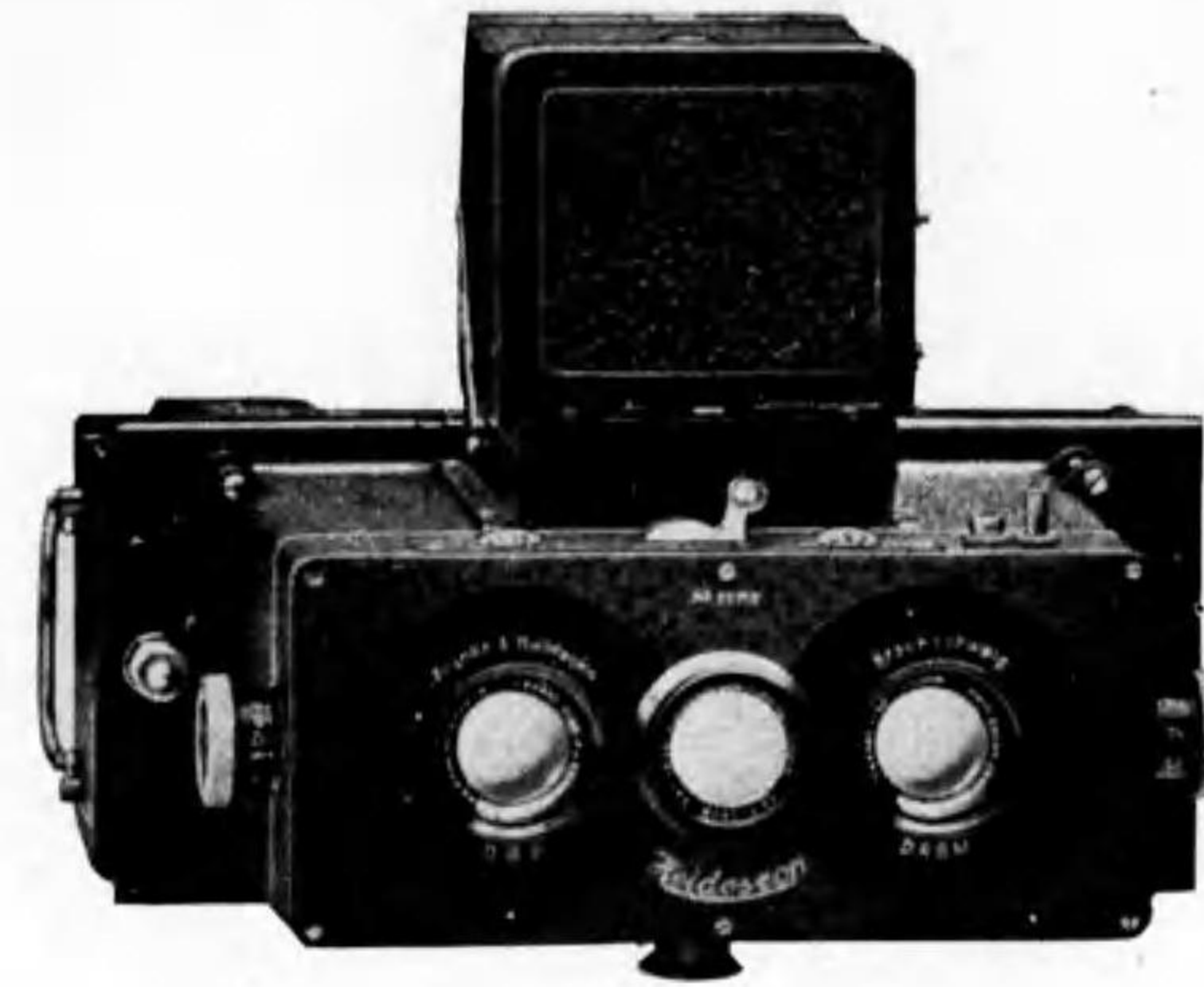


ンズを有して同時に二個の撮影が出来る爲に動體も寫せるのであるが、ロライ用の此装置では此點が何より不便なところである。

故にロライの製造所では別にステレオ用としてハイドスコープ (Heidoscope) と云ふ乾板専用のものと、ロライドスコープ (Rolleidoscope) と云ふロール

乾板用ハイドスコープ

(4.5×10.7) (6×13)



フィルム専用のカメラを賣出して居る。乾板用としては 6×6 判に相當する大形の 6×13 センチ判特殊サイズの乾板を使用

するものと、4×4判に相當する4.5×10.7センチ判乾板用とがあり、ロールフィルム用としてはブローニーフィルム用の大形と、ヴェストフィルム用の小型とがある。

然し此カメラはどう云ふものか、ステレオに對する興味が我が國で一般に解せられて居らず、僅かの愛用者しかない爲に、同じ會社で作られ乍ら之等の入荷は非常に少なく、今後は全く入荷の可能性がないと思はれるので、折角の興味ある動體の撮影に就ては茲に述べる事を差控へなければならぬ。永年ステレオの愛用者たる私自身としては、此上もない遺憾の事であるが止むを得ない。



扱て元に戻つて簡單なるステレオ・フィットメントの事を記すのであるが、此簡單な装置すら如何に今日の多くの我がロライ愛用家中に少ない事か。

それだけで考へて見ても、如何に藝術寫眞にのみ興味を持つ人が多いか、如何に懸賞應募用の作品にのみ腐心する人が、又如何に浅い程度でロライを楽しむに過ぎぬ人のみであらうかと云ふ考へさへ起さずには居られないのである。

今假令動體は寫せぬとしても、ステレオ撮影の興味を味へる目的物は無盡蔵に有するかを考へて見なければならぬ。

第一に靜物である。靜物としては先づ草花、生花等のステレオによる美しさが考へられやう。花瓶に其一々の葉、その一つ一つの花の形、大き浮出工合、實物そのまゝの姿を見る事が出来るのは、此ステレオのみの世界である。又靜物として果物を並べてもよい。硝子器等の透明體などの美しさは想像の外である。家寶の什器、例へば傳家の名刀の彫刻部分或は精巧極まる人形、面等の様々な品、時計、タイプライター、ラヂオ内部の組立装置等の小器械類は實物通りに此ステレオによつて示され、生きた記録と

して又觀察教育の資料としてこれに及ぶものはない。

靜物ではないが、被寫體の



ロールフィルム用
ロライドスコープ

(4.5×10.7) (6×13)

運動が緩慢で殆んど靜止の状態として見る事が出来、従つて前後二回の撮影でよく變りない畫を作る場合として、船、車、行人等を含めぬ風景がある。無風に近い穏かな日の森、野邊、水邊、街路等は、此方法を以てする事が出来る。

殊に建築物の構造、例へば日光、奈良等の寺院などは好適の對照物である。之等に應用して實にステレオの効果は偉大なものである。歴史的建築物等の記録用としてこれに勝るものはない。



又美術家に對しては古來の佛像、其他の彫刻物等の全部細部、或は美術家及び醫學者に對しては人體の解剖の筋骨組織等を此ステレオによつて以て研究資料とする時、如何に貴重なる役割を爲すものか、想像するに難くないと云つてもよい。

否、機關車、船舶、自動車、飛行機、ディーゼル機關、紡織機、印刷機等、實物を携帶して商用に供したり、或は研究用として至る所に示したりする事の出来ぬ重く且つ大なる品物は、此ステレオ撮撮によつて其全部及び細部を至る處に、又何人にも自由に示して完全に觀念を得せしむる効果が著しい事は是非共考へて見られたい。

否々それのみではない。何故私は我が新進の學者が此ステレオに着目しないのかを疑ふ事が常である。即ち科學寫眞として此ステレオの價值の大なる事を是非共認めて、即座に應用せられん事を奨める。例へば地震による地殼の變化、即ち地割れ、斷層、崖の崩壞、道路建物等の被害、先づこ



れだけでも大した研究材料である。

同時に落雷による被害、洪水後に於ける鐵道線路、橋梁の破損状態、道路の被害、農作物の被害等の研究に關するステレオの應用效果も著しい。

殊に又殖林に於ては遠方より眺めた林相、又其接近しての状態、樹木の生育の状態、各種の樹木の混交生育の關係、地形地質の状態、皆ステレオによつてのみ完全に記録し研究資料と爲し得るものである。



其他、岩石に昆虫に物質の組織に、簡單なる此二回撮りステレオ撮影は實に數へ切れぬ應用の途がある。それにも拘らず、ステレオは素人には關係のない事の様思つて居る人のみである事は此上もない残念な事である。多年聲を大にして、ステレオの重要な事を雑誌に著書に幾度か唱導して來た私は、今日尙ステレオ家の昔に變らぬ少數な事に對して失望すると同時に、如何に寫眞家が今後増加しても藝術寫眞や懸賞寫眞にのみ腐心して居る程度では眞に寫眞の進歩も應用も見込はないとまで斷言したい。こゝに私の日頃の鬱憤を一言晴らすべく敢て筆を執る覺悟をした譯である。

以上は一般の方には望まない。然し幸と學者の方の眼に觸れたならば是非一考を煩はして頂きたい。



勿論此二回撮りでなく一回で動體をも撮る方法の採用が優れた事は論ずるまでもない事である。

一回撮りとしては前記以外に第一にスポーツに應用される。これは今日の生活には非常に關係の深いものであるから、大に注意されたいのである。

又人物の撮影がある。人物即ちポートレートであるが、私の意味に於ては單に趣味の肖像寫眞ではない。勿論現在の家族の各々を此ステレオによつて撮影するならば、死後幾年の後までも其本人を眼前に見る事が出來て此上もない記録ではあるが、活動寫眞の如き變化と運動とを持たぬ普通寫眞のステレオとしては、恰も人形に接すると同じ感があるが、それでも記録の一方法として大いに満足を與へる。然し私は吾々の現實の生活にこれを應用する時、例へば刑法上の犯人の人相を記録する爲、又は犯行の現場を證據の目的で寫しとめる場合に應用して實に遺憾のない方法として推奨する事が出来る。これによつて恐らく搜索上の成果は一變するであらう。



尙氣象學上の應用として颱風中の状態、火山噴火の噴煙、岩盤炸烈又は流岩流下の状況、洪水波濤の現状其儘如何なる動體をも如實に記録し、有るがまゝに浮出さしめて、距離觀念を其儘に、複雑なる物體の位置を正確に判別して眺める事が出来る。實に眞を寫すと云ふ寫眞術本來の使命として其中最も特色ある、此動體ステレオ撮影のある事を忘れてはならない。

私は藝術寫眞を排斥する意思は勿論ない。自身としても日常多くの趣味的撮影を行つては光の藝術を楽しみつゝあるが、決して、そのみが寫眞家の最高目標ではない事を繰返して充分こゝに述べるものである。

ステレオ装置使用法

前章に述べたステレオ・フィットメントは、矢張りカメラを速寫ケースから出して取付けなければならないものである。取付の方法も全くパノラマ装置に於けると同様で、カメラ前面下部に見る二個の小捻子の頭に、此装置の突起にある孔を合はせ、カメラの三脚固定穴に臺の留捻子を以て固着した上で三脚上に全部を据えるのである。

パノラマ装置では三脚上面は絶対に水平にしなければならなかつたが、本器では左右だけ水平に保てばよく、仰角、俯角は許されるものである。器の一部には矢張り水準器がつけてある。



ステレオ即ち浮出寫眞は、所謂三次元像(Three Dimentional Picture)と稱せられる。即ち高さと巾の外に奥行を示すものであるが、その觀念を得る爲に、カメラを一旦器の左端に於て一回撮影し次に右端に於て全く同じ方向に第二回目の撮影をする事である。但し撮影の場合の左右は陽畫として觀賞する場合には全然位置を轉換して、右方で寫した寫眞は臺紙の左方に貼り、左方で寫した寫眞は右方に貼る事を忘れてはならない。さもなければ前後の浮出は全く實物と逆になり、遠いものは近く、近いものは遠くになつて甚だ奇觀を呈する結果になる。これを Pseudostereo 即ち逆浮出と名づく。

右端に於けるレンズの中心と、左端に於ける中心との間隔は 65 ミリに選んである。それは人間の左右兩眼の平均した間隔が約 62—70 ミリであり、人によつて多少違ひはあるが、大體の平均を 65 ミリと考へて作られたのである。但し日本人は 62 ミリ又は 63 ミリの人が多い。今其等の事は念頭に置かずして一向差支へない。



左右二回の撮影は全く同一條件、即ちシャッターの速度も絞も、距離の定め方も同じにするのであつて、なるべく二回の撮影の間の時間を短かくする方がよい。例へば靜物などは心配はないが、風景などの時は一見動くものがないやうに思つても白雲などは動いて居るから、一回寫した後直ちに手早く第二回の撮影を完了するやうにするものである。



印畫を作る時、密着焼ならば二枚同時に一枚の印畫紙に一つの焼枠で一度に焼いて、一度に現像し、乾燥後に初めて切斷するやうにすれば、焼度等全く同じものが得られる。又引伸ならば引伸機に同時に並べてネガを入れ一枚の紙に引伸せば理想的ではあるが、大概引伸機は同時に並べて二枚のネガを入れる事が出来ないから、各々二度に行ふとしても其焼付時間現像時間、共に出來得る限り違ひのないやうにして仕上げねばならぬ。

二枚の陽畫は密着焼の場合も目標間を 65 ミリに定めて貼る。又引伸では部分伸しを行つてもよろしいし、又各々の全面を任意の大きにし同じ割

合で目的物だけを選んで引伸してステレオにするもよいが、左右の目標の間隔は矢張り 65 ミリ に選んで貼るのである。前にも述べた通り、貼る時は左右の寫眞の位置が互に反對に置きかへられる事を忘れてはならない。

ステレオの引伸には限度がある。色々これには論ずる事もあるが、最大 6×6 判程度に引伸す事にし、それ以上には行つても効果がないと云ふ事だけを申して置く。



斯くして作られた觀賞用の寫眞を見るには何うするか。それには覗眼鏡即ちステレオスコープ (Stereoscope) と云ふものが必要であるが、それは別に此附屬品として賣出されては居ないからこまるが、普通の擴大鏡二個同種のを求めて、其レンズを一枚のボール紙又は木の板に左右並べて (中心間隔を 62—65 ミリ に選んで) 取りつけ、その前方に此寫眞を正しく置く装置を自ら作つて見れば充分に役立つ事を申して置く。擴大鏡は度の餘り強くないもの、例へば焦點距離が 5 寸位のを街の眼鏡店なり又は縁日の眼鏡店などで求めれば立派に役に立つ。つまり此程度の度を持つ老眼レンズを求めれば出来る。これ以外に、私は後章に述べる考案の下に行つてゐる事を記して置く。

パノラマ装置

4×4 判及び 6×6 判のロライフレックス、及びロライコートに兼用の出来るパノラマ撮影臺と云ふ附屬品が出来て居る。これは地形の研究者及び山岳撮影者などには喜ばれるものであると思ふが、普通には殆んど必要を見ないものであるから中々手に入らない。私は數年以前これを求めて今日も所有して居るが、殆んど用ひた事が無いと云へる程普通には要らぬものである。然し巧妙に出来て居るから一應御参考までに説明を試みやう。



此装置を使用するにはカメラは速寫ケースから出さなければならない。そしてカメラの前面の下部に見る小捻子の突起二本を、此器の突起中の孔に合はせ、そして三脚穴に器の捻子を合はせて締めるならば、器とカメラとが固着する。これを三脚上につけるものであるが、最初器を三脚につけて後にカメラを取つてもよろしい。



さて器を用ひる時は必ず三脚の頭部を水平としなければならない爲に器の一部へ水準器が取つてある。従つて三脚を水平にする爲に此水準器中の水玉を、正しく中央になるやう、三脚の足を充分に調節するので

ある。なぜかと云へば水平で無いとすれば 10 枚ぐるりと周囲を一廻りして寫す間に寫眞の水平線が次第に傾いて來るからである。然るに水平を正しく保つた場合には最初の 1 枚と最後の一枚との水平線が完全に合つて見事なパノラマ寫眞が出来る事になる。



一見不必要な器ではあるが、此種の撮影を常に必要とする人にとっては又とない便利な器である事は勿論である。それは各撮影の區域が正しく角度を失せず定められるからであつて、4×4判の場合は前回の撮影の一方の末端に次回の撮影の始端が正しく寫し出されて無駄がない。即ち重なりや又缺除部分が無いからであり、6×6判の時は少しく重なり部分を残すから取扱上の不便もないのである。



器上にカメラを取つけて廻す場合には、一方にのみ廻るやうになつて居る。そして適度の角度に廻つた時は、パチリと一つの刻みに止まる。その刻みには 1 から 10 までの數が刻んであるから、最初 1 の位置から寫し始めるのである。



12枚撮れるフィルムに18枚を撮るのであるから 2枚餘分が残るが、残りは其後で何か適當なものを寫してしまつても無駄ではないと思ふ。

又何か別の物を前以て數枚寫してあるフィルムに此装置を以てパノラマ撮影を行ふ事は感心出来ない。なぜかと云へば 10 枚寫すべき所を途中でフィルムが無くなつては、此装置から一時カメラを外して新しいフィルムを取換へて續行しをしなければならないから、撮影中に色々の故障もあると考へなければならない。従つてパノラマ撮影を行ふ爲には、前の寫し残りのフィルムはなるべく有効に他のものに使つてしまつた上で新たなフィルムを以てした方がよいと思ふ。

乾板用具

ロライフレックス 6×6 判, ロライコート 6×6 判共に乾板用補助装置 (Plate Adapter) と云ふものが出来てゐる。又ロライフレックス 4×4 判にもある。これは研究室で顕微鏡撮影するとか家庭に暗室を持つ人には、一枚づゝ入れて寫し、直に現像が出来から便利ではあるが、一般の方には餘り用がないものであるし、又代價もカメラ後部換蓋と洋銀製取枠三個付の一组で六七十圓のものである。是非ともこれを用ひずとも、暗室でカメラの中へ一枚の乾板 (6×6 判には大名刺, 4×4 判にはアトム) を注意して入れゝば普通のまゝで誰れにも出来る。



◇
然し御参考までに示して置く。後壁は御承知の如く一番上まで開けて少し一方へ移動すると蝶番が外れて取外せるから、乾板用の後壁と換へるのである。

そして取枠を差すが、撮影の際には前蓋を抜去つてから、忘れずに取枠の裏面にあるツマミ突起を起して乾板をカメラ中でフィルム

面と同じ所まで繰出すのである。

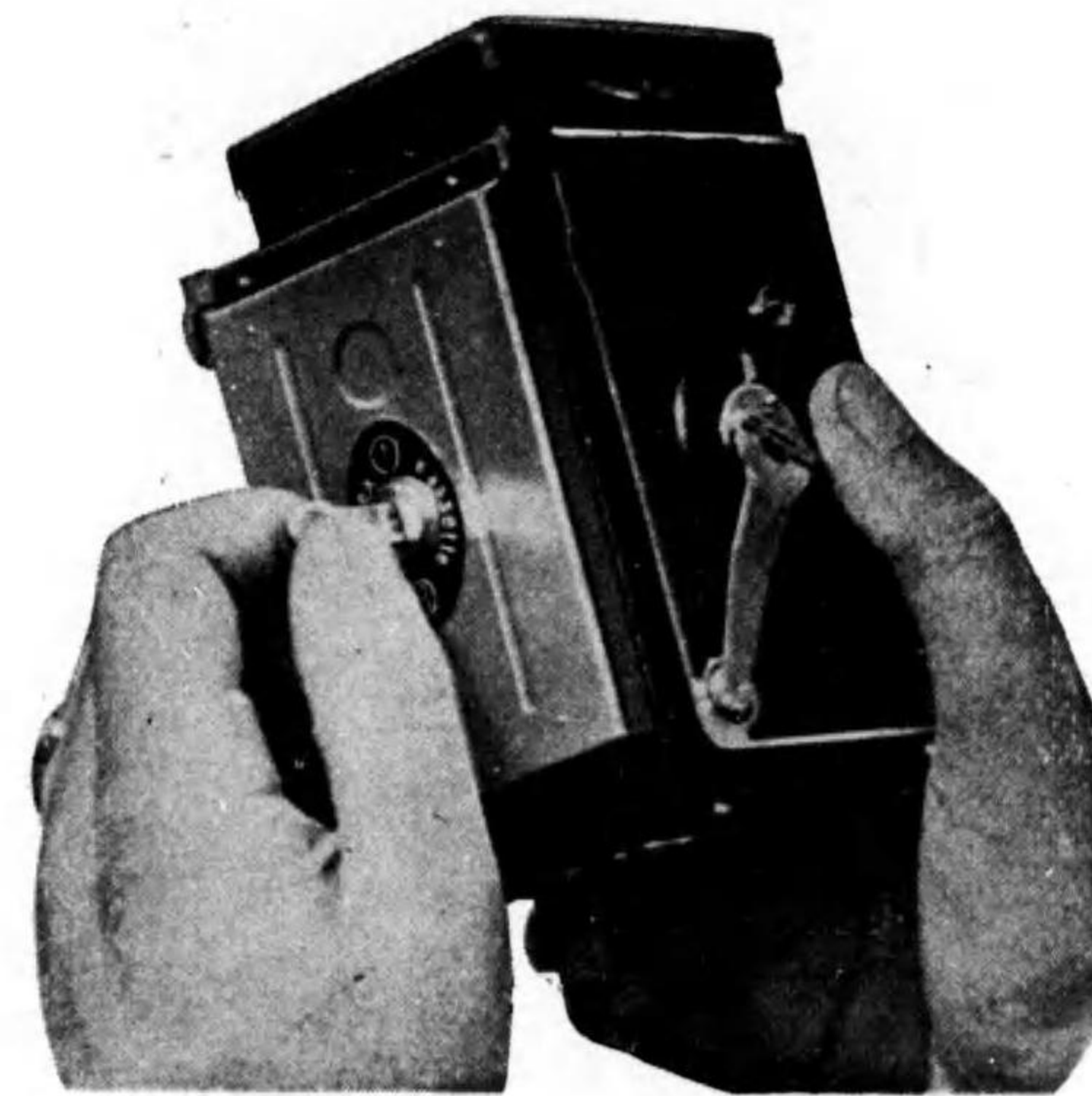
これでピントが合ふ譯である。

寫し了つたならば再び引込めてから前蓋を差すのである。普通の取枠と違ふのでよく間違ふから注意せねばならぬ。

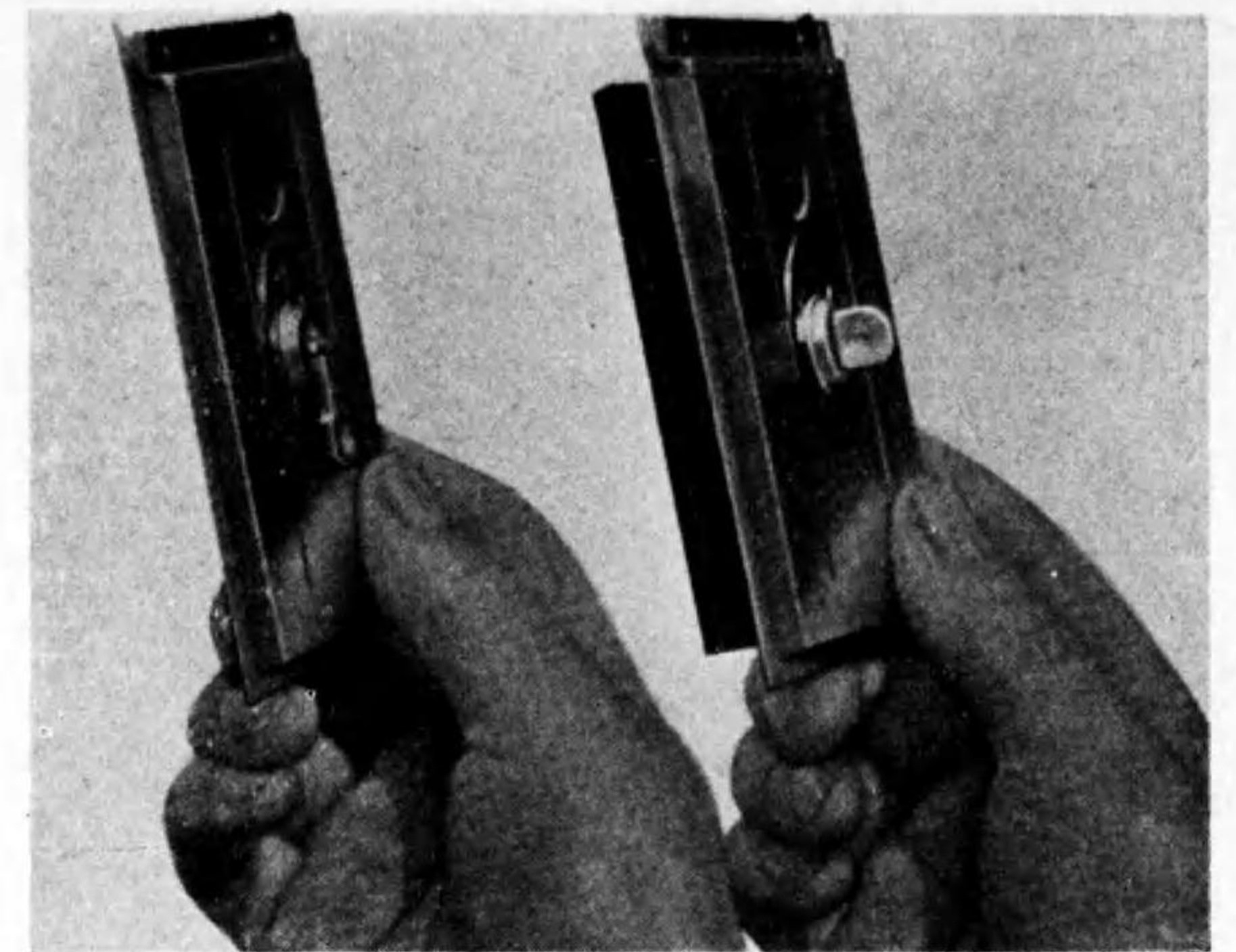
取枠に乾板を入れる時も取出す時も、此裏面の突起を押出してから側面から乾板を出し入れするのであるから、少し面倒ではある。

尙乾板を此装置で用ひる時はカメラ中からは必ず巻取軸を除いて置かなければならない。これは最も注意すべきことである。

乾板は舶來品 (例へばアグファ・イゾパン, コダック・パンアトミック等) の薄板アトム判のものを用ひる。



此装置に就て私の想ふところは、一般のスケッチや科學寫眞の撮影には大して必要と云ふものではなからうが、ゆつくりと構へて藝術寫眞でも作つて見やうと云ふ時などには面白いものと思ふし、又近距離のポートレートを日々寫して楽しむには便利なものであらうと云へるのである。



6×6判用 35 ミリフィルム装置

ロライキン (Rolleikin)

シネ・フィルムを用ひる事に関しては別項“6×6判と4×4判との相違”の部に少しく記して置いたが、これも前章に記した乾板用装置と同様に、カメラの後壁を取換へて行ふものであつて、此特殊の後壁と特殊のマガジン軸二個との外に、ピントグラスの上に置くマスクとを併せて一組となつて居るものである。



此装置によつてライカ、コンタックス同様 35 ミリ活動フィルムを用ひて75 ミリ焦点のレンズで24×36 ミリサイズの畫を36枚寫す事が出来る。畫は(ライカ等と違つて縦位置に寫るのであるが)ライカ、コンタックスは通常50ミリ焦点レンズを以て同大のサイズに寫すのであるから、畫の角度は甚だ狭くなるが、寫すべき主體をピントグラス上に眺めて外す處はないから割合に使ひ易いと云へる。但し何故にシネ・フィルムを用ひるかを考へるならば大した原因もないと考へられる。勿論通常は一本のフィルムに12枚しか寫せぬものを、これでは36枚つまり3倍の數を寫せて、フィルム交換の手數が省ける事にもなるし、又費用から云つて或る場合幾分安くも濟ませられるとも思へるから用ひて居る人も少しはある。



主としてポートレートの連続撮影、各種の花弁等の種類を並べて次々と時間を置かず迅速に寫す時、静物或は書物の複寫等にも利用されて便利もあると云へやう。然し有つても便利、無くても濟む程度のものである。

撮影の番號は後壁の中央に現はれるやうになつて居る。

ファインダー レンズ用

特殊絞 (Iris stop) アイリス ストップ

□ ライフレックスの上方レンズには絞が無い。それ故下方の撮影レンズで絞を大小に調節した場合、目的物にピントを合はしたその前後の物體が如何なる程度にぼけを示してゐるかは、上方のファインダーレンズが生ずるピントガラス上の像では遺憾乍ら知る事が出来ない。これは一眼レフレックスに一步を譲る點ではあるが、又反對に考へるならば一眼レフでは多くの場合必ず絞を用ひるとして、同じレンズが投ずるピントガラス上の像が必然的に暗くなつて見にくい結果を來すが、二眼レンズでは此缺點が却つて幸して常に開放のまゝの明るい像が眺められると考へる事が出来る。



そこで、下の絞とまつたく同じに調節した此アイリスストップなるもの



を、必要に応じて上方レンズにはめて見るならば、下方と同じぼけと遠近感とを得たる像を見る事が出来るから、或る場合に此方法の方が一層よいと考へる事も出来る。

それは以上の説明で充分と

思ふが、尙此補助器は或る場合露出計の役割を勤める事も出来るやうになつて居るので此點に就て聊か記して見やう。

(1) 露出を計る (Estimating the exposure)

尙此アイリスストップは4×4判用としては考へて居らず、6×6判 $f:3.5$ レンズ用と解して置く必要がある。即ち4×4判では下玉を邪魔する。圖中の座金(前方のもの)1にはシャッター速度が記されており、座金(後方、カメラに近いもの)2には絞の數字が出てゐる。又晝間の使用には * 形(太陽を意味する)の欄を用ひ、夜間或は人工光線では) 型(月を意味す)欄による。



先づ此器をカメラの上方レンズに附加してその絞を一杯に開放する。そしてフードの拡大鏡によつて眼をカメラに極めて近くして、ピントガラスを數秒間覗いて、今迄明るいものを見なれた眼を少しく慣らせて後、そのまゝの状態に座金1をば絞つて行く。そして陰(シャドウ)の部分の細部が見えるか見えぬかと云ふ所まで絞つて行くのであるが、大概絞り過ぎてしまふ虞がある爲に、ピントガラスの中央を以て測らずに、寧ろ片隅で見の方が安全である、と説明書には示されて居る。勿論、戶外では室内の時より細部がよく見えるから露出は寧ろ此露出計が示すものより幾分餘計にした方がよいと云はれて居る。今一例を舉げて見るならば、

* 1/500	1/300	1/100	1/50	1/25	1/10	1/2	1 秒
			3.5	5.6	8	11	

と出れば、 $f:3.5$ が $1/50$ 秒のところにあつて、開放の絞で寫す場合であるが、其際若し11の絞ならば $1/2$ 秒でよいと云ふ風に讀む。

然し此露出計は DIN 18/10 の感光度を有するフィルムを基として出来てゐるものであるから、フィルムの感光度によつては當適に答を加減して見なければならぬが、現在我が國のフィルムは此程度の感光度のものが普通であり、又違ふとしても大した相違がないから、大概のフィルムは此まゝで用ひて差支ないと思ふ。——御参考までに DIN 18 度のフィルムと云へば、

アグファ——イゾクローム
 富士——ネオクローム
 〃 ——ネオパン
 さくら——US クローム

などを想ひ出す事が出来る。



然し私は、電氣露出計の色々と出来てゐる今日、態々此露出計を求めるならば、寧ろ大差ない金額で求められる電氣露出計を求める方がよいと思ふ。但し前申した通り、此アイリスストップは露出計が主たる目的ではなくて焦點深度を直接ピントグラス上で眺めやうと云ふ目的で作られたものであるから、其意味でこそ本器の價値がある。次に其場合の使用法に就て

欠

欠

の確實なものである點は、十分に認められるのである。詳細なる機構を説明する時間は無かつたので單に寫眞により構造だけを御覽に供した次第ではあるが、以上の他に、皆川商店製のファーストレフレックス、富士光學製のライラフレックスのあることを申添へて置く。

獨逸ロライ愛用家 作品集

寫眞家には各々個性がある。又無ければならないと思ふ。或る人は舞臺撮影が好き、或る人は人像寫眞ばかり寫して居る、又靜物に主きを置く人あり、スポーツ寫眞に山岳寫眞に、風俗寫眞に風景寫眞に、科學寫眞に、皆それぞれ何かしら向があるものである。私はロライに限らずレフは、輕妙迅速至る所あらゆる機會にスケッチ撮影を行ふライカ等の仕事のみならず、ライカに一步を譲ると云ふ事を斷然認める。それが即ち一方から見ればロライの特徴を明示するもので、スケッチ以外のすべての撮影には、到底スケッチ用カメラは此ロライに及ぶものではない。その總てがロライの優れた性能なのである。

その優れた點の總てを私は利用して居ないのである。例へば私自身は舞臺撮影や人物のスナップ等には殆んど興味を持つて居らず本書でも又從來の拙著の全部でも御承知の如く我日本の自然界、風光、風俗、傳説、山林、原野の地勢、動植物虫類等の生態、町村と云つた方面を科學的に又春夏秋冬の氣候上の變化などを中心として時には牧歌的に、或はロマンチシユな氣分イデーリツシユで撮影を行ふ所謂“郷土

研究”“祖國の再認識”“文化運動國民精神指導”の意味を持つ。獨乙ではこれを(Heimatskunde)と云つて居るが、左様な撮影に終始して居るものであるが爲に、折角此様に幾多の方面で特長を發揮し得る私のロライの作例を御覽に入れる事は出來ないのである。

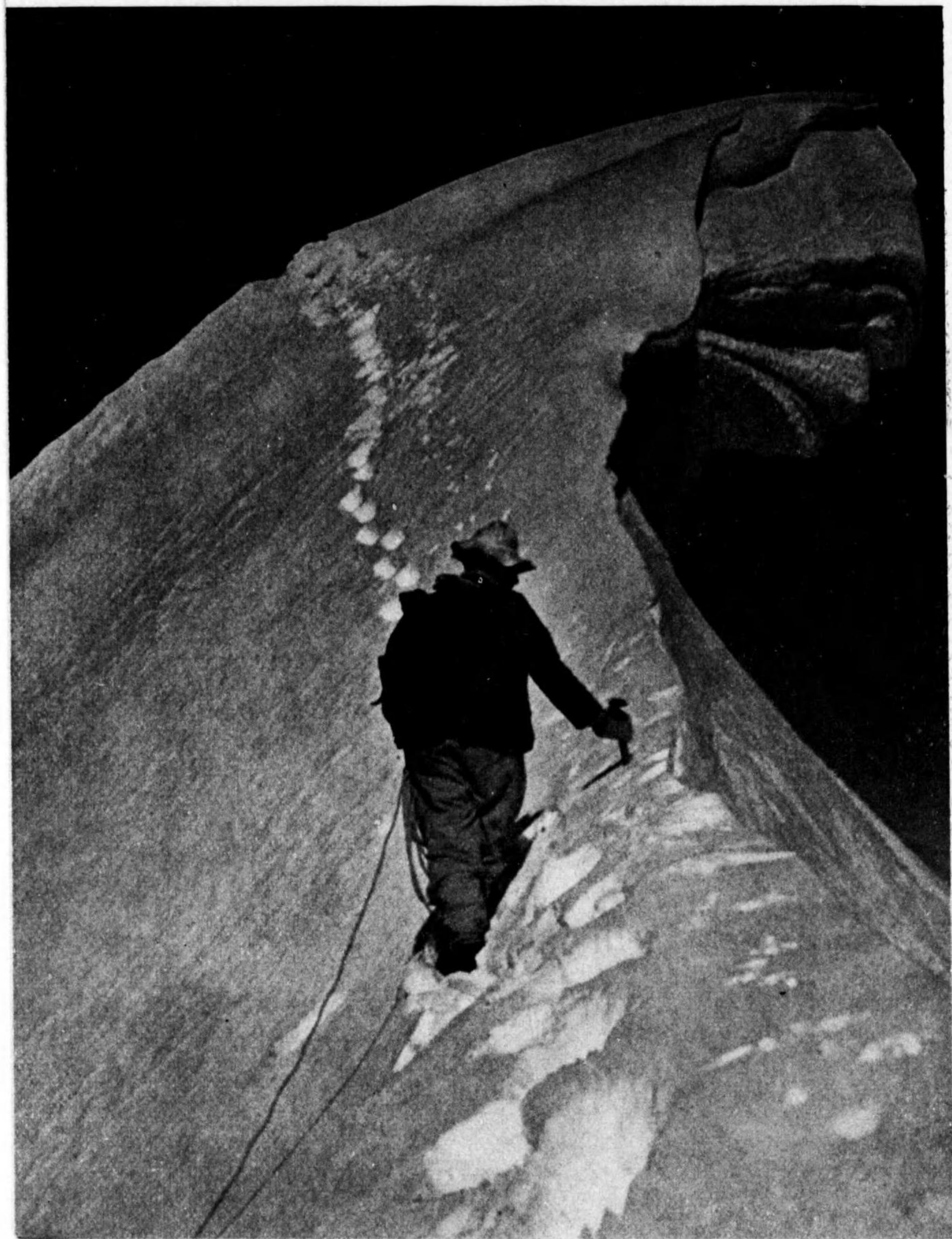
そこでロライの誕生國たる獨乙本國では世界第一のカメラ製造國として、此ロライが愛用家の數に於て最も多數を占めて居ると云ふ事でもあるから、次に獨乙の一流のアマチュア作品の見事なる作品をついでスポーツ、スピード、ポートレート其他各種の方面に於けるロライの活用の實例を掲げて御参考に供しやうと思ふ。

この獨乙の作品を見るに、非常に光の調子が優れて居る、又構圖が旨い、被寫體の選擇が上手である。恐ら諸君もロライの寫眞は全然他のカメラによるものと違ふと感嘆せらるゝであらうと思ふ。

私は一々の作品をなるべく比較研究し易いやうに同種のものにまとめ、且つ撮影のデータを附し、題名は獨乙語に代へて邦譯で置いた。以下ゆつくり御覽を願ひたい。

“山頂の番人”の顔

フェルディナンド・ペリンゲル氏作



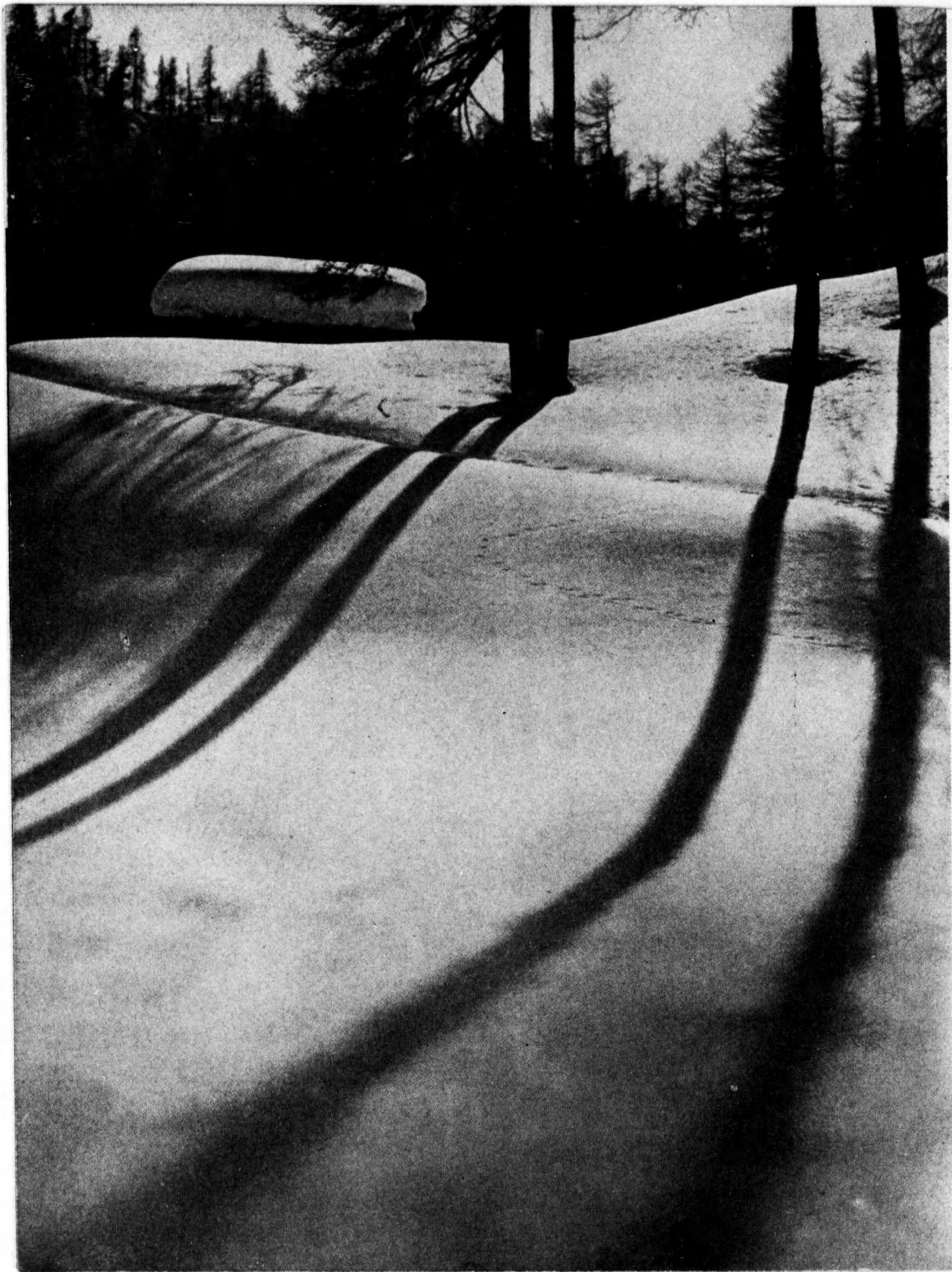
6×6判 7月、午後
パンアトミツク
絞 f:9
露出 1/100秒

6×6判 7月 午後
パンアトミツク
絞 f:9
露出 1/100秒



シュシヤラ (Schchara) 峯5450米

フェルディナンド・ペリンゲル氏作



スキー小屋の籠城

フリッツ・ヒルデブランド氏作

6×6判 2月 午前10時

ISS

フィルターなし

絞 $f:3.5$

露出 $1/10$ 秒

ヒュツテの中食

同氏作

6×6判 2月 午正

IS3

フィルターなし

絞 $f:3.5$

露出 $1/25$ 補

補助光線なし

←

青き雪

エルンスト・パウマン氏作

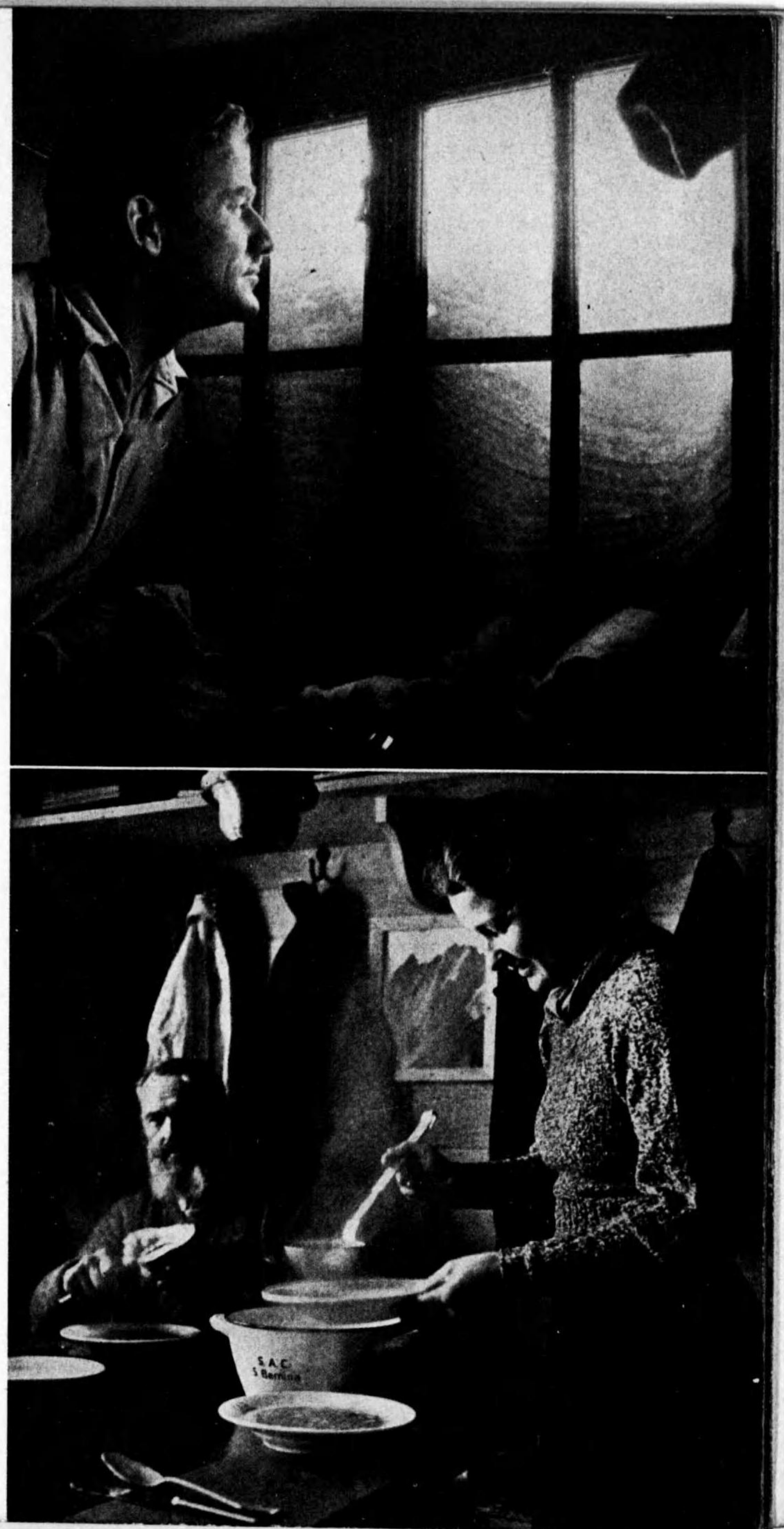
6×6判 2月朝

ベルツ、ベルパンチツク

淡黄色フィルター

絞 $f:8$

露出 $1/50$ 秒





ホックカルター(Hockkalter)
岩の西凌

同氏作

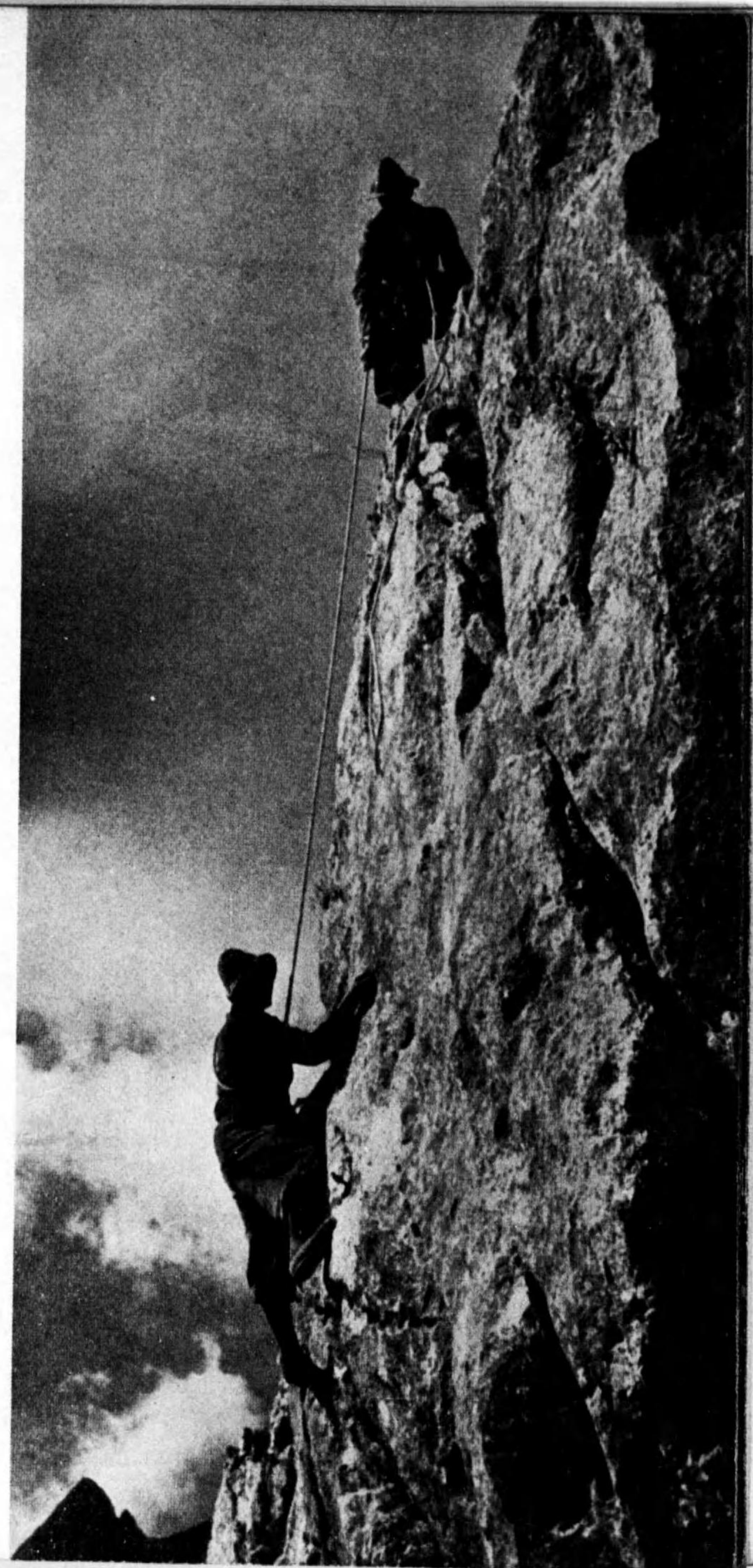
6×6判 7月 午後4時
ペルツ ペルオムニア
ロライ淡黄フィルター
絞 $f:5.6$
露出 $1/50$ 秒

←

ツェグシユピツツエより
ミュンヘン市方面を望む

ドクトル・オトマー・
ヘルウイヒ氏作

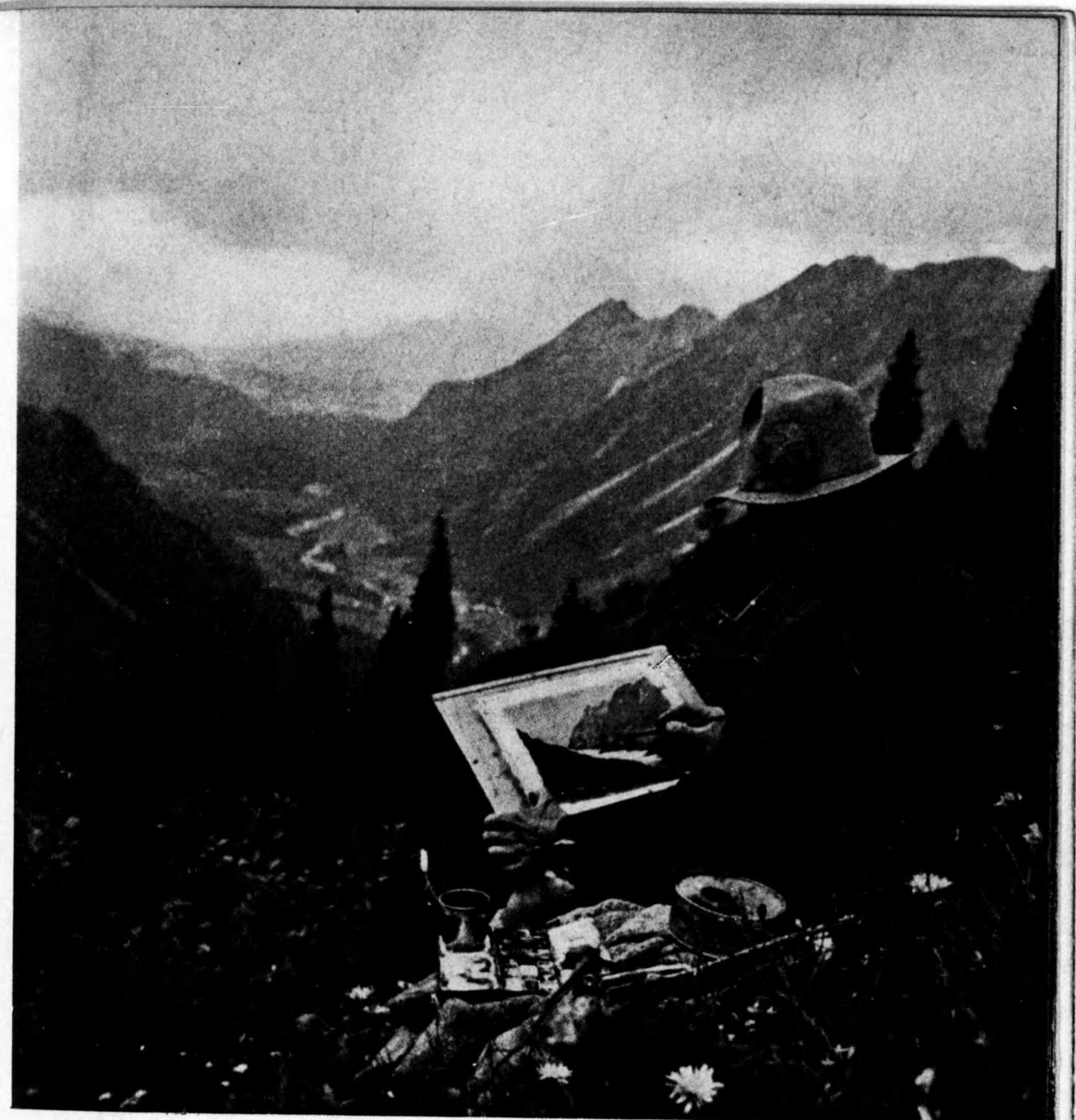
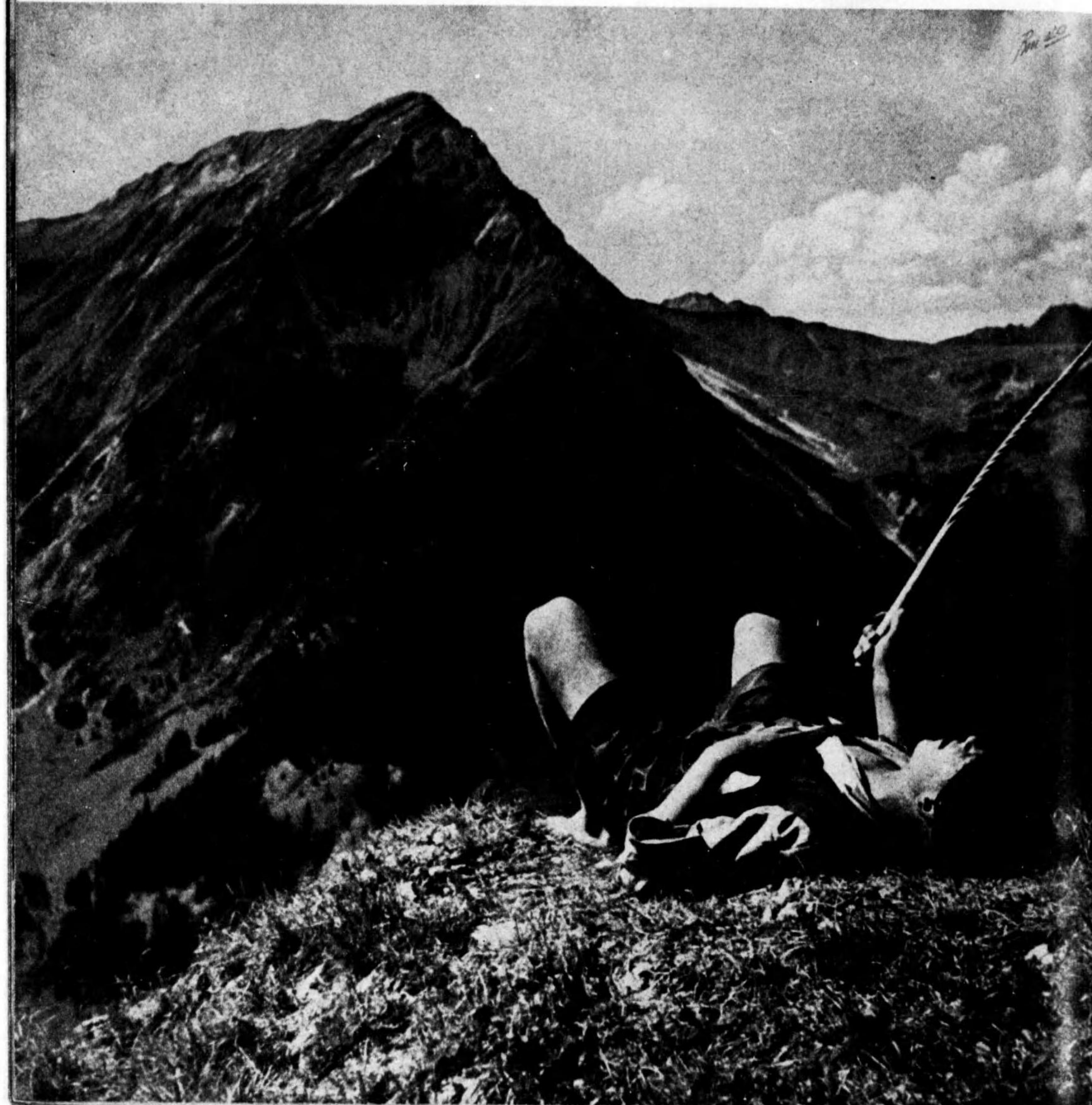
ミュンヘン市は地平線に
黒く見えて居る。
6×6判 6月 正午
黒き曇霧
イルフオード 赤外フィルム
ロライ赤外フィルター
絞 $f:8$ 露出 $1/50$ 秒



山の牧童

エリカ・シユマハテンベルガー氏作

4×4判 8月 午後3時
アグファ、パンフィルム
絞 f 8
露出 1/50 秒



山岳画家

ワルテル・パウマイスター氏作

6×6判 6月
パンアトミツク
淡黄色フィルター
絞 f. 8
露出 1/50 秒



←

夕 陽

エルンスト・

ワイデンホーフ

エル氏作

ロライコート

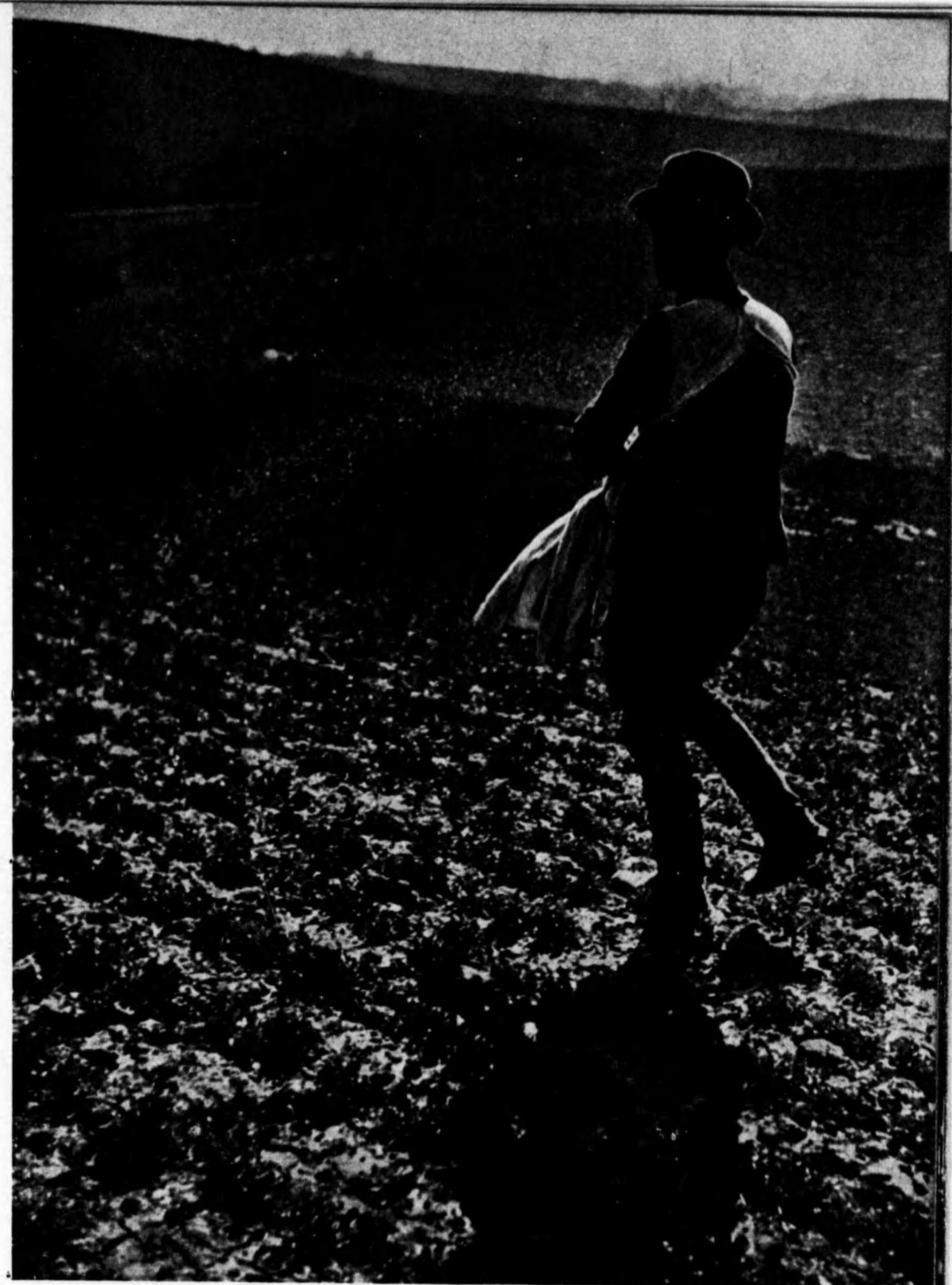
6月上旬

ハウフ、パンコラ

緑色フィルター

絞 $f:3,8$

露出 1秒



農夫でなかつたらば

ヘームケ・ウインテラー氏作

6×6判 3月 晴天 正午

ISS

絞 $f:8$

露出 1/100秒